
虚無の魔法使い

大政奉還

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚無の魔法使い

【Nコード】

N8112K

【作者名】

大政奉還

【あらすじ】

使い魔召喚で何故か異世界に飛ばされてしまったルイズ。

偶然出会ったナギの弟子になり数々の冒険や修行を経て最強クラスの実力を着けたあと、元の世界になんとか戻っているいろいろやりま

* 不定期更新中

プロローグ（前書き）

初投稿です。 完結目指して頑張ります。

プロローグ

巨木。天を突かんばかりの大きさ、名を【神木・蟠桃】と言う木の根元に、数人の人影があった。

「遂に嬢ちゃんともお別れか、寂しくなるな」

そう口の端をつり上げながら、からかうように言ったのは【千の呪文の男】ことナギ・スプリングフィールドだった。

周りには詠春やラカンを始め、紅き翼のメンバー達もいる。

「あんた達には感謝してるわよ。もし十年前、あの森で助けてもらわなかったら、何処かでのたれ死んでたかもしれないわ」

過去を思いだすかのように目を閉じながら答えたのは、桃色の金髪をした十代半ばに見える少女だった。

「ところでルイズ嬢ちゃんよ、なんで変身魔法なんか使ってた？」

ラカンが訝しげに言うと、ルイズは溜め息をついて面倒くさそうに言った。

「あんた、人の話もつとちゃんと聞いたらどうなのよ？ さっきも言ったでしょ、私の世界とこっちの世界とじゃ時間の流れが違っていて、私がこっちに来てからもうだいぶ経つけど、向こうじゃ1日位しか経ってないの、いきなり大人になったら怪しまれるに決まってるじゃない！」

「大丈夫だって、たいして大きさは変わらないんだから……」

とルイズの胸を見ながらラカンには可哀想な物を見るように言った。

「わかっていませんねラカン、貧乳は稀少価値が高いんですよ？」

アルビレオの言葉にルイズはまた溜め息をついた。

「もうあんた達の相手は疲れたわよ……」

「ところで、変身魔法は見破られないのかい？」

「詠春さんは私の実力を信じてないんですか？死に欠けでもしない限り、無意識にでも維持出来ますよ！魔力の隠蔽だって完璧です」

「そうだぞ詠春！ こんなんでも俺の弟子だぞ」

「こんなもんってどう言う意味よナギ！」

……

【神木・蟠桃】が輝きだした。数十年に一度の大発光が始まる。ルイズはこの時に出来る、魔力溜まり場を利用して帰るつもりなのである。

「それじゃあね……また縁があれば会いましょ」

「ああ、またな嬢ちゃん」

「達者でな」

「貴女の人生を収集出来ないのは残念ですが縁があれば……」

「それとナギ」

「なんだ？」

「あんたには力や自信、いろんなものを貰ったわ。感謝してもしきれないぐらいね…… 本当ありがとう」

「ハッ 止せよ柄でもない、それにそれはお前が元々持ってた力だぜ？」

「……それでもよ」

足元の魔法陣の輝きが強くなってきた。

「本当にありがとう 紅き翼のみんな…… あんた達のことは一生涯忘れない…… じゃあね！」

次の瞬間、彼女は元の世界【ハルケギニア】に帰って行った。

こうしてルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールールの異世界での冒険は幕を下ろした。しかし、彼女の物語はまだまだこれからであった。

第1話 帰還（前書き）

文章力が・・・

第1話 帰還

トリスティン魔法学校の校長室では『偉大なる魔法使い』の異名をもつオールド・オスマンと教師のコルベールが話合っていた。

「それで、一体何が起こったのかわかったかね？」

「・・・いえ、それがまったく。そもそも召喚のゲートに召喚者が呑み込まれということは聞いたことがありません」

「・・・そもそも、本当に彼女は召喚ゲートに呑み込まれたのかね？ わしも随分長く生きとるが、そんなこと耳にしたこともないぞ？」

「はい、それは間違いありません…。彼女は召喚がうまくいかず、一人残って、私の監督の下、召喚をしていたのですが・・・」

「うむ」

コンコン

オスマンが考えこんでいるとき、ドアがノックされた。

「オールド・オスマン、ロングビルです」

「はいりたまえ」

入って来たのは秘書のロングビルであった。

「どづしたんじゃ？」

「・・・それが、ミス・ウァリエールが戻って来たようです」

「なんじゃと!？」

..... 【トリスティン魔法学校正門前】

トリスティン魔法学校の正門には十代半ばに見える少女が立っていた。

(ふう、なんとか戻ってきたわね…。懐かしいわ)

「どうぞ、お入り下さい。オールド・オスマン学院長が校長室に来るようにとおっしゃっております。」

「……わかったわ。ありがとう」

(どうやら私が消えたことは広まってないようね…)
衛兵から話を聞いたルイズはさっそく校長室に向かった。

(上手く騙せるかしらね……)
……「なんじゃと!？」ここから1日位の森の中に転移していたじゃと!？」

校長室で事情を話したルイズにオスマンは疑わしげに目を向けた。

「はい、そのとうりです」

「……うむ、わかった。過ぎてしまったことはしょうがあるまい、お主が無事で安心したわい」

「ところで、結局、使い魔召喚はどうなったのですか？」

「はい、ミスタ・コルベール 召喚ゲートの先には何も居ませんでした。契約は出来なかったので、もう一度挑戦したいのですが・・・」

横にいたコルベールからの質問にルイズは落ち着いて答えた。

「うむ、わかった。わしが許可しよう、じゃがまたゲートに呑み込まれるようなことはないようにの」

「ありがとうございます、オールド・オスマン」

「もう下がってよいぞ」

..... 【ルイズが退室した後の校長室】

「コルベール君、さっきの話はどう思うかね？」

「はい、特に矛盾もありませんでしたし そのとおりなのでわと・・・」

「うむ、何か彼女から違和感を感じなかったかね？」

「違和感ですか？・・・特にこれといって感じませんでしたか？」

「・・・そうか、すまんのわしの思いすごしのようじゃ」

ルイズの変身魔法に少しでも気づくことが出来たのは、この国でも有数のメイジである オールド・オスマンだけであった。

.....

ルイズは自分の部屋へ体感時間で十年ぶりにあしを踏み入っていた。

「戻って来たのね、私」

久しぶりの自室に帰還を実感するルイズ。目の端には涙を浮かべている。

ガチャ

「は〜い、ルイズ。帰って来たのね？一体どこにいったの？」

ノックもせずに入ってきたのはキュルケ・フォン・ツエルプストーであった。

「・・・キュルケ、ノックぐらいしなさいよもう。で、なんのよう？」

ルイズは懐かしさにひたりながらも言葉をかえした。

「・・・・・・・・？」

いつものルイズなら怒鳴ってくるはずである、キュルケは内心首を傾げながら続けた。

「いやね、貴女が帰って来たって聞いたから、私の使い魔を紹介してあげようかと思っただけ？いらっしやいフレイム」

キュルケの呼び掛けに答えるかのように、真っ赤で巨大なトカゲであるサラマンダーのフレイムがのしと入ってきた。「へ〜キュルケ、あんた　サラマンダーを召喚したの？　そう言えば貴女は火属性だったもんね〜　凄いいじゃない」

ルイズ悔しがる姿を見に来たキュルケはなんだか拍子抜けしてし

まった。

「・・・貴女、熱でもあるの？大丈夫？」

「な、なによいきなり？」

キュルケは隣国ゲルマニア出身で、国境沿いにあるルイズの実家と敵対しているのである、キュルケ自身はそうでもなかったがルイズは敵対視していた。そんなルイズがキュルケを誉めるなど以前なら考えられなかったらことだ。しかし異世界での経験がルイズを変えていた。

「ところで、貴女は一体なにを召喚したの？」

「・・・それが、また失敗しちゃってね。明日の朝にもう一度やることになったわ」

「そ、そうなの？　じゃあ　まあ頑張ってたね」

なんだか納得がいかないような表情でキュルケは自室に戻って行った。

さて、どうしようかしらね。　とりあえず十年ぶり位だから、自分の持ち物とかの確認と、授業の復習ぐらいはやっておこうかしら。　わたしは右手の中指にしてある魔法発動体の指輪をチラリと見てから、自分の部屋の確認を始めた。

第2話 召喚

東の空が、赤く染まりはじめた。学院では使用人達が起きはじめたようだ。わたしは朝日を眺めながら独り呟いた。

「どうなるかしらね」

わたしは前の使い魔召喚でナギ達の世界に跳ばされた。結果的に戻ってこれたし、良い経験も出来たと思うが、そう何度も他の世界に跳ばされたくはない。今日の昼には、もう一度召喚の儀式をしなければならぬのだ。

「……ま どうにかなるでしょ、悩んでもしょうがないわよね」

どうもナギ達のせいで楽観的と言うか、なんとと言うか、思考がポジティブになった気がする。悪いことではないが……。

冷たい朝の空気のなか、最後に深く深呼吸して、わたしは部屋に戻った。

あつという間に時間が過ぎ、召喚を行う時間になってしまった。わたしはナギ達と行動を共にしていて、こう言う生活も良いなと思っていた。卒業後は領地に戻り、親の後を継ぎ、領地を運営していくつもりだったが、パーティーを組んでナギ達のように世界中を周りながら人助けをするのも……。その為にはこんな所で立ち止まっている暇はない、召喚に失敗すれば留年である。わたしは気合いを入れ直した。

「準備は出来ましたか？」

コルベール先生が尋ねてくる。

わたしは今、校舎から少し離れた広場に、コルベール先生と二人でいる。クラスメートたちは教室で使い魔と交流を深める授業をしている筈だ。

まともな使い魔が来てくれれば良いのだが……、それこそ力エル以外ならなんでも。

「はい、大丈夫です！」

「それでは、始めてください」

「我が名はルイズ・フランソワーズ……」

わたしは心の中で祈りながら呪文を続けた。

「五つの力を司るペンタゴン。『この』世界の何処かにいる、私の運命に従いし使い魔を召喚せよ！」

次の瞬間、閃光が炸裂し、目を眩ませた。

そこにあつたのはスクロールのような物だった。

わたしはそれに見覚えがあつた、確か、闇の魔法【マギア・エレベア】を修得するのに使った覚えがある。中には、【闇の福音】と恐れられた魔法使い”エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル”の人造精霊がいる筈だ…… ちなみにわたしはエヴァと飲み仲間だった。

スクロールを手に持ち、発動させてみた。

ピコピコ カチャカチャ

「……………」

「ピポピポピロロンッ」

「……………」

「ふむふむ、んんん？ んー………… おお！」

「……………」

そこにはテレビでファミコンのマリオ？をプレイしながら素っ裸でソファーに寝っ転がるエヴァンジェリン（人造精霊）がいた。

「ふむ……………？ おわあっ！？何だ貴様！」

「あんなこそなんて格好で何やってんのよ！？ てゆうか中で暮らしてたの！？」

「ん？……………なんだルイズか、久しぶりだな」

軽く流された……………

「ところでわたしになんの用だ？」

わたしは事情を説明した。まさかエヴァが来るとは思ってもみなかった。ややこしいことになりそうだわ……………

「ふむ……………使い魔か、別になってやっても良いぞ」
「……………へ？」

「だからなつてやつても良いと言っただ」

「いったいどうしたの？ あんたの性格じゃ 死んでも断る！とか言つてきそつなのに」

わたしはエヴァの性格は大体わかってるからこの言葉には疑問を抱いた。

「いやなに、近頃は随分と暇でな、ゲームぐらいしかやることがないんだよ 暇潰しにはなると思うし、何よりお前と居れば退屈しないだろうしな」

「……そう、じゃあ契約するわよ」

「わたしは女とキスする趣味はない。 巻物に戻ってるから、そっちにするならしろ」

そう言うやいなやエヴァは巻物に戻ってしまった。 わたしにもそんな趣味ないつての……

「この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

呪文を唱え巻物に口づけする。 エヴァが来たのは嬉しいけど、巻物を使い魔つて……

「ミス・ヴァリエール、いまのはいったい……？」

「はい？ え、え〜とあの〜 巻物、そう巻物の精霊じゃないでしょうか」

エヴァの登場が意外すぎてコルベール先生が居たことをすっかり

忘れていた。

「なるほど、巻物の精霊ですか……いやはや珍しいものを召喚しましたね。ルーンを見せてもらっても良いかな？」

「はい、どうぞ」

わたしは巻物に浮き上がったルーンをコルベール先生に見せた。

「……はい、ありがとうございます、召喚は成功ですね、この調子で頑張りなさい」

「はい、ありがとうございました」

わたしは内心怪しまれてないか心配しながら、コルベール先生が去って行くのを見送った。どうやら上手く誤魔化せたようである。

授業も終わり自室に戻ってしばらくすると、巻物がひとりでに開いて、中からエヴァが出てきた。

「本当に異世界なんだな」

エヴァが窓の外に浮かんでいる二つの月を眺めながら言った。
今は素っ裸ではなく黒い制服？を着ている。

「悪かったわね、いきなり喚びだしちゃって」

「フツ、構わんさ、昼間も言っただろ？ 退屈してたんだ」

「そう……、それじゃ再会を祝ってと、これからよれしくってことで、乾杯しましょ」

わたしは厨房からもらってきたワインをグラスに注ぎながら言った。

「ほう、それじゃあ久しぶりに飲むかな」

「それじゃ……乾杯」

「うむ、乾杯」

その後、エヴァと飲みながらこの世界の常識やなにやら説明したり、いろいろ語り合った。学院の案内は後日と言ったことで、かなり遅くまで起きていた。ついついかなり飲んでしまったので二日酔いが怖い……

こうしてわたしの一日は終わりを告げた。

第3話 授業（前書き）

エヴァの性格が原作と違っているかもしれません。

第3話 授業

ドンドンドンッ ドンドンドンッ

誰よ、わたしの安眠を邪魔する奴は？

「ルイズー、そろそろ起きた方が良いんじゃない？もう朝食終わっちゃったわよー」

「なんだキュルケか……朝食終わった？なんだそうなんだ

……朝食終わった？

ふと身体を起こす。どうやら、わたしはテーブルに突っ伏して眠ってしまったようだ。ふと部屋を見回すとワインの空き瓶が数本転がっていた。そう言えば昨日はエヴァと飲んでたんだっけ……
……なんか大切なことを忘れている気がする。

「授業始まつちゃうわよー」

キュルケがまた呼んでいる。そこからのわたしの動きは凄まじかった、一瞬で身だしなみを整えてからエヴァを叩き起こし、転がっていた空き瓶をかたずける。この間、僅か五秒 何事もなかったかのように扉を開けた。向こうの世界での修行の成果かしら……

「ありがとう キュルケ、助かったわ」

「朝食食べに来ないと思ったたら、まだ寝てたの？ あんた一日居なくなっからおかしくない？」

「そ、そんなことないわよ」

「まあいいんだけどね。それよりその娘があんたの使い魔？
・・・平民？」

「さあ、どうでしょうねー、早く教室に行きましょ、遅れるわよ」
エヴァの正体は誤魔化し、わたしはさっさと教室に向かった。エ
ヴァが静かだと思って見てみると、目が半分閉じている。どうや
ら寝惚けているようだ。

教室に着く頃にはエヴァも目が覚めたようで、周りの生徒の使
い魔を見回している。

「なんだ、下等生物ばかりだな」

「頼むから、わたし以外の奴にそんなこと言わないでよ？ あんた
が喧嘩とかして、相手が死んだりしたら、わたしが退学になっちゃ
うんだからね」

まあこのエヴァはコピーの人造精霊とはいえ最強種である。

吸血鬼の真祖だっけ？ そんな最強種を召喚したわたしって、もし
かして天才？ いやいや、自惚れは身を滅ぼすわね ナギ達との修
行で懲りたわ。

そんなことを考えていたら先生が入って来た。ふとエヴァを見る
とクラスで使っているのと似たような椅子に座っていた。いつの
間に召喚したんだか。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですわね。このシ
ュブルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔を見るのが楽

しみなのですよ」

彼女は教室を見回すと、満足そうにそう言った。

「おやおや。変わった使い魔を召喚したんですね。ミス・ヴァリエール」

シュヴルーズが、エヴァを見てそう言つと、教室中がどつと笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！召喚出来ないからつて、その辺の平民を連れ・・・」

不味い、わたしが想像した中で、最悪のパターンになりかけている。わたしはエヴァを抑えようと立ち上がりかけた。

『心配するな、威嚇だけだ。それに、わたしは女子供は殺らん。子供と言えるか微妙なところだがな』

エヴァから念話きた。

『頼むわよ』

まったく、冷や汗が止まらない。エヴァの殺気を感じたのか周りの笑いは鎮まっていた。

「では、授業を始めますよ」

不思議そうな顔をして、シュヴルーズは授業を始めた。

結局わたしの鍊金は失敗し、教室がめちゃくちゃになった。

わたし自身は指名されたときに障壁を張っていたので、無傷だった。「何で失敗するのかしらね、なんか術が暴走してるような感じがするんだけど」

わたしは教室を片付けながら、傍らにいるエヴァに問いかけた。

「まあ、あの短時間の詠唱で、この威力は凄いいんじゃないか？」

「……………」

「慰めてるのか、貶してるのかわからない言葉を頂きました……」

掃除が終わったら、もう昼になっていた。そう言えば朝食食べてないんだっけ、道理でお腹がすいてるわけだ。

「そう言えば、エヴァってご飯食べるの？」

「昨日、酒を飲んでただろうが。まあ、食べなくても死ぬ分けじゃないが、異世界の料理に興味はあるな」

随分と便利だね、精霊って……………」

「それじゃ、明日から準備させるから、とりあえず厨房の方で食べてきて」

わたしは食堂にいたメイドを呼んで、エヴァのことを任せた。

このとき、わたしは空腹で思考力が落ちていたのかもしれない。エヴァが何か問題を起こすなど、少し考えればすぐに気付けたはずなのに……………」

第4話 決闘

それが起こったのは、わたしが昼食を食べ終えて、デザートを待っているときだった。

「よかるう。君に礼儀を教えてやる！ヴェストリの広場で待っている。ケーキを配り終わったら来たまえ」

そう言っただけで食堂から出ていったのは、金色の巻き髪に、フリルのついたシャツを着た、気障な色男、ギーシュだった。ギーシュがいた席の方を見ると、あわてふためく黒髪のメイドと十歳前後に見える金髪のメイドがいた。ってよく見ると、金髪の方はエヴァである。わたしは溜め息を吐いてから、話を聞きに行った。

「どうしたのよ？ まあ、大体予想はつくけど」

「おお、ルイズ。いやなに、二股男に少しばかり説教をくれてやったら、おこりだしてな」

「……………待つたく、面倒事はごめんなのに。」

「どうすんのよ……………あれ、あんたに決闘を仕掛けるのよ？」

「問題ないだろう。軽く捻り殺してやる」

「いやいやいや、問題あり過ぎだからね？ わたしが退学確定だからね？」

そんな言い争いをしていると、さっきあわてふためいていたメイドが話し掛けてきた。

「申し訳ありません。ミス・ヴァリエール、わたしがデザート配りを手伝ってもらったばかりに……」

「あなた、名前は？」

「シエスタです」

「じゃあシエスタ、大丈夫よ。この子、こんな格好してるけど、凄く強いから」

「こんな格好とはなんだ、こんな格好とは 何事も経験だと思ったんだよ」

エヴァはメイド服の裾を持ち上げながら言った。

「そんなことより、決闘のことよ、止めないけど 絶対に殺さないですよ！ 酷い怪我もさせないようにね、あと派手な魔法もなしよ、面倒事はごめんだからね」

「まったく、注文が多いな……ま、出来るだけそうしよう」

「……頼むわよ」

わたし達が使う魔法を見られたら、先住魔法と間違われるかもしれない。 そうなったら面倒な事になるにちがいない。 せめて卒業まではあまり目立ちたくないのに……

【サイド・エヴァ】

まったく、ルイズは細かいことを気にし過ぎだ。 どうせどこか

でボロが出るに決まっているのに。

「諸君、決闘だ！」

ヴェストリの広場とやらに來た私達を迎えたのは、噂を聞き付けたらしい、ガキどもの集団だった。

「とりあえず、逃げずに來たことは、誉めてやろうじゃないか」

「貴様ごときになんで逃げる必要がある」

「フン、では始めるか」

そう言つと、ギーシュが薔薇の造花を振つた。花卉が一枚、宙に舞つたかと思うと、甲冑をきた等身大の人形になった。青銅でできているようだ。ま、あれだけ言われたからな、殺しはしないさ。

断罪の剣

私は輝く剣を腕に纏わせながら、向かってくる人形に突っ込んだ。ザシュツ　一瞬でバラバラにし、ギーシュに詰め寄る。

ギーシュが慌てながら造花を振ると、今度は六体の人形が表れた。どうやらなめられていたようだ。

「氷の精霊十七柱

集い來たりて

敵を射て！

【魔法の射手 氷の十七矢】」

一本一本が人の腕程の氷の矢が、人形達に翔んで行く。容易く貫通し、全ての人形が粉々になった。

「そんな、……魔法？」

呆けたようにそう呟くギーシュの首に断罪の剣を突き付け言った。

「どうする？ まだ続けるのか？」ギーシュは首を振る。完全に戦意を喪失していた。

「ま、参った」

ふん、弱すぎて話にならん。私は【断罪の剣】を消して、ルイズのところに戻った。周りが騒がしかったが、気にすることではないだろう。

【サイド・ルイズ】

やってくれちゃったわよこの子……

【魔法の射手】

に【断罪の剣】まで使ってくれちゃって……悠々と戻ってくるエヴァにわたしは責めるように言った。

「なんで、魔法モロに使ってるのよ あんたなら魔法使わなくてもあんな奴、余裕だったでしょ！」

「フンッ、すぐにボロが出るに決まってるだろうが、それに私は使い魔なんだから、特殊能力がどうたらこうたら〜とか誤魔化せるだろ？ お前自身が使わない限りは、強い使い魔を召喚したってことでどうせるだろうが」

それはそうだけど……

「なんか、あんただけ周りを気にしないで使えてズルい」

「そんなの知ったことか」

このあと、「ルイズは悪魔を召喚した」とか「実はあれは太陽の光を克服した吸血鬼だ」など、あつてるんだか間違ってるんだか分からない噂が流れたのは、わたしの気のせいにちがいない。

【学院長室にて】

オスマン氏とコルベールは、【遠見の鏡】で一部始終を見終えると、顔を見合わせた。コルベールは震えながらオスマン氏の名を言った。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの者、やはりただ者ではなかったですね」

「うむ」

「ギーシュは一番レベルの低い【ドット】メイジですが、あそこまで圧倒するとは…… それに見たこともない魔法や手に纏った剣…… やはり彼女は【ガンダールヴ】！」

「うむむむ……」

コルベールはオスマン氏に言った。

「この件は、王室に報告しない方がよろしいですよね……………」

「そのとおりじゃ」

オスマン氏は、重々しく頷いた。

「王宮のボンクラどもに【ガンダールヴ】とその主人を渡すわけにはいくまい。 宮廷で暇をもて余しとる連中はまったく、戦が好きじゃからな」

オスマン氏は溜め息をついてから続けた。

「で、ミスタ・コルベール」

「はい」

「あの者が何者か分かるかね？ 君は召喚の儀に立ち会ったのじゃろ？」

「……………それが、実際はどうか分かりませんが、ミス・ヴァリエールは巻物の精霊と言っていました。 【ディテクト・マジック】で調べたのですが、強力な魔力をうちに秘めていることしか分かりませんでした」

「ふむ……………」

コルベールは思い出すように呟いた。

「そう言えば、ミス・ヴァリエールの態度がきになりましたね」

「どづいづいとじゃ？」

「何故か知り合いに話し掛けるように会話していました。あの時は巻物から人が出て来た驚きと、ルーンを調べることで頭がいっぱいだったので 疑問に思わなかったのですが……」

「……もう少し様子を見てみるかの 幸い、グラモンとこの息子は無傷じゃったしの 殺す気ならあの時容易に殺れたじゃろ」

「何事も無ければ良いんですがね」

「まあ、機をみて話を聞いてみるかとするかの」

第5話 休日

「ろくな物がないわね」

ギーシュとエヴァが決闘してから数日が過ぎた。今日は虚無の曜日と言う休日で、特にやる事が無かったルイズ達は王都トリステインに買い物に来ていた。今は武器屋で掘り出し物でもないか探していた。

「いえいえそんなはず、ありません。何せこいつを鍛えたのは、かの高名なゲルマニアの錬金魔術師シュペー卿で。魔法がかかっているから鉄だつて一刀両断でさ。ごらんなさい、ここにその名が刻まれているでしょう?」

ルイズの言葉に武器屋の主人は剣の柄に刻まれた文字を指差しながら答えた。

「いや、これは鑑賞用でしょ? 鉄どころか丸太を斬っても折れちゃうんじゃない?」

「さつきから何を期待してるんだ? 駄目でもともとだろ」

そう言ったのは、黒い制服を着ているエヴァである。

「うるさいわね、そんなこと分かってるわよ。でも期待しちゃうもんでしょ」

ルイズは主人との話をきりあげて、他にめぼしい武器がないか探していた。

「そもそも、なんで武器屋なんかに来たんだ？」

ふと、疑問に思ったエヴァが尋ねる。

「いやね、わたしの魔法はあんまり人前で使えないでしょ？ なんかあったら困るから、とりあえず武器でもと思って」

「お前は武器が使えるのか？ 体術とは勝手が違うだろ？」

「詠春さんに少し修行つけてもらったこともあるからね、その辺は大丈夫よ」

「なるほど、詠春か」

エヴァと話ながらも探し続けるルイズ。そのとき……、乱雑に積み上げられた剣の中から低い男の声がした。

「ほ、珍しくできる奴が来たかと思ったら、貴族の娘っ子だとわね」

ルイズは声がした場所にある剣の山から一本の剣を抜き出した。

「インテリジェンスソードかしら？ なかなか面白い力がありそうね」

「おでれーた。見損なつてた。お前さん、どんだけ力を持ってるんだ」

「わかるの？」

「まあな、俺を持った奴の大体の力量ぐらいならな。俺様はデルフリンガーってんだ。てめ、俺を買え」

ルイズは剣をまじまじと見た。刀身が細い薄手の長剣である。やや刀身が反っていて、日本刀を思い出させる。表面には錆が浮いていたが、造りはしっかりしていそうだ。

「分かった、買うわ。この剣はおいくら？」

「それなら百エキューで結構でさ」

「安いじゃない」

「こつちにしてみりゃ、厄介払いみたいなものださ」

主人は手をひらひらと振りながら言った。ルイズは財布から金貨を取り出し、主人に渡した。慎重に主人は枚数を数えると頷いた。

「毎度」

こうしてルイズはデルFRINGERという名前の剣を手に入れた。

・・・その日の夜

トリスティン魔法学校の宝物庫の前に、一人の人影があった。鉄の巨大な扉を見上げる。扉には、太い門がかかっている。門はこれまた巨大な錠前で守られている。ここには魔法学校設立以来の秘宝が収められているのだ。人影は慎重に辺りを見回すと、ポケットから杖を取り出した。人影は短く呪文を唱えた。詠唱が終わると、杖を錠前に向けて振った。しかし、錠前からはな

んの音もしない。

「まあ、ここの錠前に【アン・ロック】が通用するとは思えないけどね」

人影は、くすつと妖艶に笑った。女性の声だった。もう一度呪文を唱え、今度は分厚い鉄の扉に向かって杖を振る。……まったく変化がない。

「スクウェアクラスの【固定化】か……」

【固定化】とは物質の酸化や腐敗を防ぐ呪文である。これをかけられた物質は、あらゆる化学反応から保護され、永遠に形を保ち続けるのだ。人影は考え込むように扉を見つめていた。そのとき、階段を登ってくる足音に気づく。杖をポケットにしまった。……現れたのはコルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル。ここでなにを？」

コルベールはまのぬけた声で尋ねた。

「ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作ろうかと思ったのですがオールド・オスマンがご就寝中なのでどうしようかと……」

「なるほど、目録ですか。あの人は寝ると起きませんからな」

「それにしても、宝物庫は立派な造りですね。これではどんなメイジが来ても、開けるのは不可能でしょうね」

「そうですね。メイジには不可能でしょな。でも、一つだけ弱点があるんですよ」

「はあ、興味深いお話ですわ」

「それがですね……」

コルベールは得意げに、ロングビルに自説を語った。聞き終わったあとロングビルは満足そうに微笑んだ。

「大変興味深いお話でしたわ。ミスタ・コルベール」

……それから数日後の夜

ルイズとエヴァは中庭で二つの月を見ながらの酒盛りを楽しんでいた。

「……平和ね」

そう言つてエヴァ秘蔵の日本酒【神殺し・改】が入ったグラスに口をつけるのはルイズだった。

「安心しろ、私の勘はよく当たる。そのうち、嫌でも何かに巻き込まれるさ。つかの間の平和を楽しむがいい」

「止めてよね。そう言われると本当に何か起きそうだから」

「姐さん、相棒は何かに巻き込まれるのか？」

「フツ、デルフ。覚えておけ、こいつは巻き込まれる星の下に生まれたのさ」

「なんだかんだ言つてデルフとエヴァは気が合つようだ。二人とも、並みの人間の何十倍も生きているらしい。何か感じる事があつたのだろう。」

そんな感じでダベっていると僚の方から二人の人影が見えた。

「はーあい、ルイズ。あなた何やってるの？」

背の高い方がキュルケで、低い方がタバサだった。

「見て分かんない？ 月を見ながら使い魔とお酒を飲み交わして、親睦を深めてるのよ」

ルイズはグラスを持ち上げながら言った。

「なんか最近、あなた変じゃない？ つい最近までは私が話かけると怒り出したのに……」

「気のせいよ。ま、考えなおしたってところかしらね、いろいろと……どう？ あんたも飲む？」

どこか納得出来ないキュルケであったが差し出されたグラスを受け取った。

「ありがとう」

「それで？ 何か用があったんじゃないの？」

「それがね、なんかタバサがあなたの使い魔に用があるらしいのよ」

「ほ、私にか？」

エヴァが意外そうに言った。

「そう言えば、自己紹介がまだだったわね。私はキュルケ・フォ
ン・ツェルプストー、キュルケでいいわよ」

「タバサ」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ、で？ 私に用とは
なんだ？」

エヴァが問いかけると。

「弟子にして欲しい」

タバサが急に膝をつき、頭を下げて言った。 エヴァは少し考
え、面白そうに口を開いた。

「よかろう。その前にテストだ、私の目をみる」

タバサがエヴァの目を見ると、二人とも動きを止めて目を見開い
た。

「……タバサ？」

キュルケが心配そうに声をかけるが返事が反ってこない。

「ま、心配ないでしょ。こいつ、そんな患者じゃないしね」

ルイズはおそらく幻想空間で何かやってるんだろつとあたりをつけていた。

二人の動きが止まってから三十秒ぐらいであろうか。タバサがいきなり倒れ込んだ。

「フツ、合格だ。お前は私が鍛えてやる」

「ちょっと、大丈夫なの!？」

倒れ込んだタバサを起こしながらキュルケが言った。

「問題ない。気を失っているだけだ」

タバサが起きると

「明日から好きな時にルイズの部屋に來い。限界まで鍛えてやる」

う

「わかった。感謝する」

なんか、勝手にルイズの部屋を使われてしまうようだ。別にいいけどね と思いつつ、ルイズは念話でエヴァに話かけた。

『あんだ、まさか向こうの魔法を教える気じゃないわよね？』

『ああ。ま、今のところは』

かなり不安だがエヴァに任せることにした。

「んじゃ、親睦を深めるために飲みますかね」

「あら、あなたが飲んでるのは何？」

キュルケがルイズのグラスを見て言った。

「ん？ これは……」

そのとき、いきなり三十メートルに届くかと言っ程巨大な、ゴーレムが現れた。

第6話 討伐（前書き）

感想、ありがとうございます。 まだまだ未熟ですが、完結を目指して頑張ります。

・・・戦闘描写って難しいなあと実感しました。

第6話 討伐

突然現れた巨大ゴーレムが、いきなり学院の校舎に拳をぶっつけた。土でできているが拳の部分だけ【錬金】したのだろうか、鉄になっている。

「不味いわね……、少し飲み過ぎたみたい」

ルイズが言うとキュルケが呆れたような顔をした。

「……あんなね、怒りっぽくなくなったのは良いと思うけど、今度は……」

「冗談よ、冗談。……彼処は何があったところだっけ？」

「……宝物庫じゃない？」

キュルケとルイズが話しているうちに、ゴーレムが壁を壊して、人影が中に入ってしまった。

「もしかして、あれが噂の【土くれ】のフーケかしらね」

「土くれ？ なにそれ？」

「あんた知らないの？ 今、結構有名じゃない。貴族の屋敷に忍びこんだり、いろいろやってる神出鬼没の怪盗よ」

「ふうん、………と言う訳だからエヴァ、お願いね」

ルイズは、盗み終わったのだろうか、遠ざかって行く巨大ゴーレムを見ながら言った。

「なにが、お願いね、だ。お前がやればいいだろ？」

「なぐに言ってるのかしら。わたしの魔法は全部爆発しちゃうって言ったでしょ？」

ルイズは内心焦りながら言った。

「フンッ、まあいいだろう」

そう言つと、エヴァは影に沈んで行った。影を使った転移魔法だ。それを見た、キュルケとタバサが驚いたようだ。

「……………ルイズ」

「なによ？」

「あなたの使い魔、……………エヴァンジェリンだっけ？ 一体何者なの？ 杖無しで見たことない魔法は使っし、影に潜って行ったし……………」

「……………、巻物の精霊よ？」

「なによ今の間は？ 本当のことを言いなさいよ」

「ま、そのうちにね」

「あんだね……………」

ズンッ

キュルケが問い詰めようとすると、いきなり地面が揺れた。 見ると、ゴーレムが巨大な氷の塊に押し潰されている。 氷の塊は二十メートル程であろうか…………… すると、エヴァが戻って来た。

「ゴーレムだけで誰もいなかったぞ？」

「困」

エヴァの言葉にタバサが答えた。

「なるほどね、ゴーレムに乗っていると見せ掛けて、自分は別方向に逃げると言うわけね」

「ルイズ、解説してないでどうすんのよこれ？ 犯人探す？」

「いえ、ここは先生達に任せましょ。追って誰か怪我したら洒落にならないしね。それに、犯人が何処に行ったのかわからないんだから追いようがないじゃない」

「……それもそうね。あんたふざけてるようじゃんと考えてるのね」

「それほどでもないわよ」

翌日

「で、現場を見ていたのは誰だね？」

と、オスマン氏が尋ねた。トリステイン魔法学校では、昨夜からの騒ぎが続いていた。何せ頑丈な宝物庫の中にあつた秘宝が盗まれたのである。宝物庫には、学院中の教師が集まり、壁にあいた大きな穴を見て呆然としていた。

「この三人です」

コルベールがさつと進み出て、自分の後ろに控えていた三人を指差した。ルイズにキュルケ、タバサの三人である。エヴァもいたが、使い魔なので数には入っていないようだ。

「ふむ……」

オスマン氏は、興味深そうにエヴァを見ている。エヴァは気づいているのだろうか無視している。

「詳しく説明したまえ」

ルイズが答えた。

「え〜と、巨大なゴーレムがいきなり現れて、ここの壁を壊したんです。その後、ゴーレムが遠ざかって行って……なんとか使い魔の力を借りてゴーレムを倒したのですが、その時にはもう誰もいなくなっていて、残ったのは土しかありませんでした」

「ふむ……」

オスマン氏はひげを撫でた。

「後を追うにも、手がかり無しか……。ときに、ミス・ロングビルはどうしたんじゃね？」

気づいたようにコルベールに尋ねた。

「それが……。朝から姿が見えませんが」

そんなことを言っているとミス・ロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル！ どこに行っていたんですか」

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりました」

「仕事が早いので、それで結果はどうじゃった？」

「はい、それが……」

数時間後

ルイズ達はミス・ロングビルに案内されて怪盗退治にやって来ていた。何でも、フリーケは馬で四時間程のところにある森の中の小屋にいたとの情報があったのだ。討伐の勇士を募ったが、教師達は誰も志願せず、焦れなくなったルイズが志願するとキュルケにタバサもついてきた。今は馬車で向かっているところだ。馬車と言っても屋根無しだ、襲われたときにすぐ外に出れるようにとのことである。

キュルケが黙々と手綱を握るミス・ロングビルに話し掛けた。

「ミス・ロングビル、手綱なんて付き人にやらせればいいじゃないですか」

「いいのです。私は貴族の名をなくした者ですから」

「そうなの？」

「ええ、オスマン氏は貴族や平民だということ、あまり拘りませんから」

横で話を聞いていたデルフリンガーを背負ったルイズが言った。

「貴族か貴族じゃないかなんて、心の持ちようよ。たとえ名をなくそうともね……逆に貴族だけど、名ばかりの奴もたくさんいるわ。欲に目が眩んで、民を苦しめる奴とかね。まあ、これはわたしの解釈だけど」

「……ルイズ」

キュルケが珍しい物を見るような目でルイズを見ていた。

「な、なによ？」

「いや……、変わったなーと思って。良い意味で」

そんな風に話しているとエヴァが尋ねて来た。

「ところで、何が盗まれたんだ？」

「え〜と、確か【封魔の壺】だったかな？」

「ここからは、徒歩でいきましょう」

ミス・ロングビルがそう言って馬車を止めた。森を通る道から、小道が続いている。

一行は開けた場所に出た。森の中の空き地といった風情である。真ん中に、廃屋があった。五人は小屋から見えないように森の茂みに身を隠したまま廃屋を見つめた。

「わたくしの聞いた情報だと、あの中にいるという話です」

「んじゃ、エヴァお願い」

「まったく……」

そう言っつてエヴァは偵察に行った。

「誰もいなかったぞ」

エヴァは窓を指差して言った。　タバサがドアに向けて杖を振った。

「罨はないみたい」

そう呟いて、ドアを開け、中に入っていく。　ミス・ロングビルは辺りを見てきますと言っつて、森に消えた。

【封魔の壺】はすぐに見つかった。　何故かテーブルの上に置いてあつたからだ。

「あっけないわね！」

キュルケが言つた。

ルイズとエヴァは【封魔の壺】を見た途端、顔を見合わせた。

「ねえ、コレって……」

「ああ、間違いない」

「そう。じゃあ下手に刺激しない方が良いわね。触らぬ神に祟り無しよ」

「ああ、何が封印されているか、わかったもんじゃないからな」

そのとき……

バキバキバキッ

いきなり小屋の屋根が吹き飛んだ。あわてて外に出る。そこにはフーケの巨大な土ゴーレムの姿があった。

「エヴァ、ここは私達がなんとか持ちこたえるから術者を探して、気絶させて。殺しはなしよ、捕まえに来たんだから」

「わかった。ま、精々頑張るがいい」

そう言うと、エヴァは影に潜って行った。

ズドンッ

ゴーレムが拳を振り落として来た。ルイズは咄嗟に避ける。

「キュルケツ！ タバサツ！」

ルイズが叫んだ。

「大丈夫よ、これくらい」

キュルケが返事を返す。タバサは自分の身長より大きい杖を振り、呪文を唱えた。巨大な竜巻が舞い上がり、ゴーレムに向かっていく。しかし、ゴーレムはビクともしない。

「エヴァがフーケを見つけた間でのしんぼっよ！」

ルイズはそう叫ぶと、指揮棒程の杖を取りだし呪文を唱えた。

「【錬金】」

ゴーレムの足がいきなり爆発し、バランスを崩す。

「あなたの爆発って、よく考えると無敵よね。一言で発動するんだから……」

「うるさい！ まだ終わってないわよ」

瞬く間に足が再生されていく。

(やっぱり、術者をたおさないと駄目か……)

【サイド・フーケ】

なんなんだ……ミス・ヴァリエールはあんなに強かったのか？ まずいこれだと私の計画が……

「おっと、こんなところにいたのか」

私は振り向きざまに呪文を唱え、石の槍を地面から突き出させた。

しかし、あっさりと避けられてしまう。

「まったく。犯人はどんな奴かと思ったら、学院の人間だったのか。まあ、薄々感づいてたけどな」

「チッ」

（不味い、コイツは昨日、ゴーレムを破壊した奴だ…まともになら勝てない）

そう考えた私はなんとか逃げようと隙を探った。

「ま、安心しろ。殺しはせんよ」

そう言って使い魔の少女？は近づいて来た。

（今だ！）

そう思った私は呪文を唱えた。

「【アース・ハンド】！」

この呪文は相手を地面から伸ばした土の手で拘束する魔法だ。相手を拘束したところで鉄に変わるの、ちょっとやそつとじゃぬけだせない。

私は森の奥に逃げようとした。だが次の瞬間、耳元で声が聞こえた。

「残念だったな。相手が悪い」

そして、私の意識は途切れた。

いきなりゴーレムの動きが止まり、小屋を押し潰しながら倒れた。

「どうやら終わったみたいね。二人とも大丈夫？」

ルイズは杖を仕舞いながら尋ねた。

「まだまだ、全然行けるわよ」

「問題ない」

キュルケとタバサもまだまだ余裕そうだ。

「連れてきたぞ」

ルイズの影からエヴァと気を失っているミス・ロングビルが出てきた。

「なんだ、やっぱりミス・ロングビルが犯人だったの？」

「ルイズ、どうということ？」

キュルケが尋ねる。

「いや、だってこの小屋の情報を手に入れてきたあたりが、すでに怪しいでしょ。この近くに家なんてないし。誰がクーケを目撃したってのよ」

「確かに……」

タバサが納得するように頷く。

「じゃ〜これで一件落着ね。ところでルイズ」

「なに？」

「ミス・ロングビルが【土くれ】のフーケだったのはわかったけど、盗まれた【封魔の壺】は？」

「……、あゝ！」

ルイズはゴーレムに潰された小屋を見た。

「まさか……」

「ごめん。置いてきちゃった……ツ!!!?」

急にルイズとエヴァが潰された小屋の方に向かって身構えた。疑問に思ったキュルケとタバサだが、次の瞬間現れた異様なプレッシャーに、仕舞っていた杖を構える。

「まったく……、わたしって何か悪いことしたかしら？ 何でこんなに運が悪いのよ」

「だから言っただろ。 お前は厄介なことに巻き込まれる星の下に
生まれたんだよ」

「冗談じゃないっての……。 キュルケ、タバサ、どうやら
こっからが本番みたいよ」

ルイズがキュルケ達に声をかけた瞬間、土と小屋の残骸が吹き飛び、
中から三体の異形が姿を表した。

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
異形が雄叫びをあげる。

「最上位デーモン一体に上位が一体、中位が一体ってところかしら……
……、どんだけついてないのよ」

ルイズは呟くと、牽制に魔法を放った。

「光の精霊百一柱

集い来たりて

敵を射て

魔法の射手 光の百一矢」

一発一発が岩を砕く光の矢が雨あられのようにデーモン達に降り注ぐ。

「ルイズ……、あなた……」

「後で答えるから、今はアイツらに集中して！ エヴァ」

「なんだ」

「後は頼んだわよ」

そう言うとルイズは一瞬で間合いを詰め、最上位のデーモンに蹴りをくらわして吹き飛ばし、それを追って森の奥に消えた。

【サイド・キュルケ】

いきなり現れた化け物に向かって光の矢を放つたと思ったら、そのまま一体を追って森に消えてしまった。

「おいキュルケ、タバサ」

「なに?」

「私は右のを殺るから、お前らは左のを殺れ」

そうやってルイズの使い魔… エヴァは一体の化け物に向かって行った。

(いまいち良く分からないけど、とりあえず倒しますか)

そう思った私は、タバサとタイミングを合わせて、残った一体に魔法を放った。

「【ファイヤ・ボール】!!」

「【ウインド・ブレイク】」

タバサの風の槌と私の火の球が化け物に激突した。

「楽勝ね」

私はタバサに向かってウインクした。　　が、タバサはまだ杖を構えていた。

「まだ、終わってない」

「え？」

砂ぼこりが収まると身体から黒い煙をあげている化け物が現れた。

化け物は身体が全体的に黒くゴツゴツしているが、人型をしている。蝙蝠のような羽根があったがボロボロだった。おそらく羽根で魔法をガードしたのだろう。

「タバサ、牽制をお願い、私がデカイのを決めるわ」

タバサは頷いた。

「ラグース・イス・イーサ…… 【ウィンディ・アイシクル】

」

幾つもの氷の矢が化け物を包囲するように現れた。タバサお得意の、空気中の水蒸気を氷結させ、矢とする攻撃呪文だ。敵はその包囲をくぐり抜け、タバサに向かって爪を一閃した。読んでいたのが難なく避ける。地面の抉れ方からしてかなりの威力のようだ。タバサは敵の爪を右に左にと避けながら、呪文を唱えている。私の呪文はもう唱え終わっている。なんとか動きを止めなければ・

・
・
・

私の考えを読んだのかタバサはカウンターで魔法を叩き込んだ。

「【ウインド・ブレイク】」

敵は吹き飛び、地面に叩きつけられ動きが一瞬止まった。その一瞬で、十分だった。

「くらいなさいッ！【フレイム・ボール】」

ぶおッ！ と空気が膨れ上がり、巨大な火炎の球となる。私が今出せる最大の攻撃呪文だ。トライアングル・クラスの炎球が、猛烈な勢いで化け物を直撃した。後に残ったのは焦げた肉片だけだった。

「やったわね、タバサ」

タバサが頷く。

「ほ、やるじゃないか。中位のデーモンが相手とはいえ、よく倒せたな」

ルイズの使い魔 エヴァが話し掛けて来た。 見ると化け物が氷漬
けにされている。

「私達をあまく見すぎよ！」

「フツ、そうか。 少し見直したぞ」

「ところで、こいつらは何だったの？」

「ん？ こいつらはな、あの壺に封じ込まれていた者さ。 潰さ
れた衝撃で、封印が解けてしまったんだろうな」

「……………、まあわかったわ。 じゃあ、さっきからあなたとル
イズが使ってる魔法って何なの？」

「……………術式が違うとしか言えんな。 まあ、詳しい事はルイ
ズから聞け。 あいつも、目の前で使っておいて、言い逃れ出来る
とは思ってないだろう」

ズンッ

いきなりの衝撃に私は身構えた。 本当、ルイズが爆発魔法以外の

魔法を使ったと思つたら・・・最近の態度の変化はこれが原因かしらね。そんなことを思っていたらエヴァが口を開いた。

「どうやら敵がかなり強いらしい。ちょっと行って来るから、ここにいろ」

「私も行くわよ？」

「止めておけ。肉体強化の魔法を使わずにデーモンを倒したのは誉めてやるが、今度のは生身で受けたら即死だ。すぐ終わらせて来るから、命が惜しければここにいろんだな」

そう言って、エヴァは影に潜って行った。

第7話 激戦

一対の翼と巨大な四肢、それに漆黒の霧から突き出た蜥蜴の頭部。それは竜種に酷似したデーモンだった。ルイズは身体に魔力を迸らせながらデルフの柄に手をかけた。

「ヘッ、ようやく出番かと思ったら、初っぱなからとんでもねえ奴が、相手だな。まったく、相棒といると飽きねえな」

「うっさい。……いくわよデルフ。折れないでよね」

いつの間にか、デルフの刀身は、磨いた直後のように輝いていたが、細かいことは気にしない。

物理的な圧迫感を伴う程のにらみ合いの中、先に動いたのはルイズだった。

魔力をデルフに流しながらデーモンに突っ込んだ。

「はッ!」

短い気合いと共にデルフを振り上げる。生半可な攻撃が効かないことを、ルイズは最初の蹴りで把握していた。初っぱなから全開だ。

神鳴流 斬魔剣―

魔を滅する必殺の剣がデーモンに迫る。 狙いは翼。 先ずは機動力を奪う。

キンッ

「ッ!」

ルイズの必殺の剣はデーモンの逆鱗を壊すに留まった。

「ガアアア!!!!!!」

デーモンは砲口をあげながら、鋭利な爪がはえた両腕を振り回す。なんとか跳びすさり、距離をとる。ルイズは無意識に口の端をつり上げていた。

「……硬いわね」

「そうだな、それにしても相棒」

「なによ?」

「相棒って、もしかして戦闘狂?」
バトルマニア

「なんでよ」

「いや、なんか笑ってるし……」

「違うわよ。最近全然力が使えなかったでしょ? なんだかんだ言ってストレス溜まってたのかもね」

「ははッ、そうかい。そう言うことにしとくぜ」

ぞくりっ

ルイズは直感に従い、その場から跳びのいた。デーモンの口から紫色の光が零れたと思ったら、ルイズがいた場所が、後ろにある大木と共に消し飛んだ。

「流石は最上位個体ってところかしら、溜無しでこの威力……やるわね」

ルイズは虚空を蹴って、詠唱しつつ再び飛び掛かる。

「来たれ 裁きの光 薙ぎ払え！」

「ガアアアああアア！」

大木を薙ぎ倒す威力の両腕がルイズを襲う。見事な体捌きで避けるルイズだが、その衝撃波だけで皮膚が裂け、血が吹き出る。

「【浄化の剣】！」

「ガアッ！」

光が凝縮した剣が虚空に生まれ、デーモンに迫るも直径一メートルはあるかと言う太い尻尾に相殺されてしまう。

「まだまだあッ！」

吐き捨てると同時にうごく。三連突き。頭、胸、そして頭。魔力を込めたデルフの刀身は白く輝いていた。これなら、あの分厚い鱗を突破出来るだろう。刃が届く寸前……

「ガアッ！」

デーモンの放った雄叫びが空間を振動させる。デルフと振動波がぶつかり合い、爆発する。辺りの木々を薙ぎ倒す程の衝撃が撒き散らされ、両者とも、吹き飛ばされる。

「来たれ光精 闇の精！！ 万象を従え 吹きすさべ 混沌の嵐」

ルイズは自分が編み出したオリジナルの魔法を詠唱しながら、この闘いに決着をつけようとしていた。戦塵の向こうにいるであろうデーモンを捕捉するため、上空に飛び上がる。煙の中から三条の閃光がルイズに迫る。咄嗟に虚空を蹴り避ける。

翼をはためかせながら煙から出てきたデーモンを見ると、口から紫色の光をあふれさせている。

「【虚無の疾風】！」

「ガアアアッ！」

白と黒が入り交じった竜巻と紫色の極太の閃光がぶつかり合う。

ズンッ

ルイズの【虚無の疾風】が打ち勝ち、デーモンを地面に叩きつけるが、仕留めた感覚はない。その時……

『そっちはどうだルイズ？こっちはもう終わったぞ』

エヴァからの念話があった。

『なかなか強いわ。流石は最上位个体って感じね。でも、手出しは無用よ？ 久しぶりに、乗ってきたんだから』

『とりあえず、そっちに行くからな。自分で決めたいなら、さっさと仕留めろ』

『わかったわよ……』

下を見るとデーモンが再び飛び上がろうとしていた。

「ごめんなさいね。もうあんまり時間がないみたいだから決めさせてもらつわよ」

闇き夜の型

ルイズは闇の魔法を発動させ、最大出力を飛躍的にあげた。

「デルフ」

「なんだ相棒？」

「耐えなさい」

「は？」

「はあああああ……」

闇モードになりいつも以上につり目になったルイズが、膨大な魔力をデルフに込める。逆手に持ち、投擲の構えを取った。注がれた魔力によって、デルフは見る者に形がわからない程に輝いている。

「おおおおおおおおおおおおおおおお」

気合いとともにデルフを投げつける。デーモンは迫り来る破壊の嵐に閃光を放つが、まったくの無駄。

ドゴオオオン

ルイズが放ったデルフの一撃はデーモンを消し飛ばし、さらに周囲の木々を薙ぎ倒し、百メートル程のクレーターを作った。地面に降り立ち、デルフを探すと、クレーターの真ん中に突き立っていた。

「うおおおおおなんじゃこりゃあああッ!」

なんかさわいでいる。

「……………ちょっと、やり過ぎたかしら」

「ちょっとじゃねえだろ、これは。相棒、見損なってたぜ。最初に想像してたのより遥かにお前はめちゃくちゃだ」

「フツ、誉めても何も出ないわよ」

そんなことを話していると、影からエヴァが転移して来た。

「こんのバカもんが〜!」

エヴァにチョップされるルイズ。

「じゅめんじゅめん。ちょっとやり過ぎたわ」

「ちょっとじゃないはッ！巻き込まれそうになったぞ！」

「……ま、そう言うこともあるわよ」

久しぶりに暴れられたルイズは清々しい顔で答えながら、ぶっ倒れた。よく見ると血だらけである。デーモンの爪を避けた時の衝撃波で、ルイズの身体には裂傷が何本もついていた。気が抜けてしまい、気絶したようだ。

その後、タバサに応急手当してもらい、ロングビルことフーケを縄でぐるぐる巻きにして、一行は学院に戻った。戻る途中で気がついたルイズは魔法の事を問い詰められ、今までの事を洗いざらい吐かされたのだった。

第8話 奪還

ルイズは焼け落ちる屋敷の中に立っていた。良く見ると、生まれ故郷のラ・ヴァリエールの領地だ。その時、これは夢だと気がついた。

「ずいぶん、久しぶりね……こんな悪夢」

其処ら中に切り刻まれた死体が転がっている。いつの間にか、ルイズの目の前にもう一人のルイズが立っている。もう一人のルイズは身体中が悪魔のように変化し、漆黒の闇を纏っていた。

「ニクい憎い憎いすべてヲ壊しタイ、コワス壊す壊ス……ワタシハ、ゼロなんかジャナイ！　ゼロなんかジャ、ゼロゼロゼロゼロゼロゼロゼロゼロガアアああああア！」

「そうね、わたしはゼロなんかじゃない。わたしはルイズよ」

化け物と化したルイズが、飛び掛かる。ルイズは化け物と化した自分の爪を避けながら、拳を握り、負けじと叩きつける。

「ガアアアああアッ！」

が原因かしらね」

ふと、ルイズは自分の両腕を見た。そこには何かの紋様が浮き出していた。

「ま、考えてもしょうがないか」

思考を放棄し、手早く着替え、巻物を持ち、待っていたキュルケとタバサと一緒に朝食に向かった。

(前は普通に食べてたけど、朝からこの量って……)

ルイズの前には朝食としてはどうなんだ？ と、言つぐらゐの量の食べ物が並んでいた。

「ねえ、キュルケ」

「なに？」

「この量ってどう思うっ？」

「え？ 普通だと思っけど」

「どうやら、ルイズの食生活はこの十年でだいぶ変わってしまったよ
うだ。」

「ルイズ、あんた、もう年なんじゃないの？」

「何ですって！？ 確かにあんたより年上だけどね！ まだ二十代
よ」

「どうなんだかね」

「変身魔法で姿を変えていることも、キュルケ達に教えてしまったル
イズであった。」

「それにしても、油っこすぎない？ 今度、わたしが自分で作るう
かしら」

「あんた、料理なんて出来たの？」

「舐めないで貰おうかしら、わたしの十年に及ぶ研鑽を……」

意外にも、この話に食いついてきたのはタバサだった。

「美味しい？」

「少なくとも、不味いとは言わせないわよ。　なんだったら、今度食べてみる？　異世界の料理よ」

タバサが目を輝かせた。

「ぜひ」

「わたしのもお願いね、ルイズ」

「わかったわよ。　まあ楽しみにしてなさい。　そうね、今日の夕食の時にね」

話を切り上げたルイズはふと、シエスタが挨拶しに来ないことになった。　エヴァとギーシュの決闘の後くらいから、いつも食事の時には話かけて来るようになったのに、何故か今日は来ない。

（何かあったのかしらね）

そんな事を思いながら食事を終えて、ルイズは授業に向かった。

昼。やはりやって来ないシエスタが気になるルイズ。夕食に使う材料や器具をお願いするついでに聞いてみることにして、厨房に向かった。

「何ですって!?! シエスタが連れていかれた!?!」

「ええ、俺達も抗議したんですが、なにぶん相手が貴族でして……」

コック長のマルトーが言った。良く見ると怪我をしている。

「モットー伯爵ですって? あんまりいい噂は無いわね。気に入った平民の女性を権力にものをいわせて困っているらしいわよ」

ついて来ていたキュルケが考え込むように言った。

「……そう、じゃあ交換条件ね」

「はい？」

「わたしがシエスタを連れて行ったモットー伯爵とか言う奴からシエスタを奪還出来たら、わたしの言う食材と器具を貰うわ」

「しょうがないわね、わたしも手伝うわよ」

キュルケが言った。

「手伝う」

タバサの言葉にルイズは驚いた。

「どうしたのよタバサ？　あなたが乗ってくるなんて」

「心配。それに、一仕事した後の食事は美味しい」

「……そう、じゃマルトーさん。食材お願いしますよ？」

そう言って、用意しておいて欲しい食材と器具が書いてあるメモを置き、ルイズ達は厨房をあとにした。

「で？ どうするんだ？ まさか正面からとか言わんだらうな」

辺りは夕暮れ間近。 ルイズ達はモットー伯爵の屋敷付近に隠れていた。 目の前にある門には、見張りの衛兵の姿がある。 エヴァの問いにルイズは答えた。

「とりあえず、変身魔法で変装しときましようか。 誰かに見られると厄介だしね」

ルイズが指を弾くと、四人の姿がローブを着た四十代の男になった。 ちなみに髪の色はそのままである。

「作戦はこうよ。 まず、わたしが探査魔法でモットーの部屋を見つけて、転移するから、タバサは転移した後すぐに【サイレント】を使って、キュルケとエヴァは速攻でモットーをボコす、そんな不正な書類か何かを見つければ、モットーは終わりでしょ。 シエスタが部屋にいたらラッキーだけど、いなければモットーに化けて呼び出せばいいわ…… どう？」

ルイズの作戦に皆、頷く。

「オツケー、んじゃ行きますか」

そしてルイズ達は、光に包まれたかと思うと消えた。

【サイド・モットー】

さて、今日は可愛い平民のメイドが手に入ったことだし、早速楽しむとするか。

「今日連れて来た、メイドを呼んで来い」

使用人は礼をして部屋からでて行った。まったく、世間では、わたしが平民の女を囲っているなんて事を、まるで悪いことのように噂する奴等がいるが、自分は貴族だ、力のない平民をどうしようと勝手ではないか。そんな事を考えていると、ドアがノックされ、メイド（シエスタと言ったか？）が入って来た。

「さあ、こっちに来るんだ。なあに、痛いのは最初だけだ」

メイドは俯いている。

「……………今から、魔法学校に戻して頂けないでしょうか？」

「何を言っている。お前はわたしが買ったんだぞ？ そんなことはどうでもいい。早くこっちに来い」

「……………」

さて、どんな風に奉仕させるか。なに相手は生娘だ、如何様にもできるだろう。

「……………しかたありませんね」

そうメイドが言った瞬間、激しい衝撃を身体全身に受けて、わたしの意識は途絶えた。一瞬、犬の耳のようなものが見えた気がしたが……………」

【サイド・ルイズ】

シエスタは大丈夫かしらね……………。まったく、モットーとか言う奴は貴族は平民に何をしても良いと思ってるよね。その曲がった根性を叩き治してやるわ。

「……………え？」

「【サイレント】」

タバサの呪文が聞こえた。 転移したら速攻、モットー伯爵をボコボコにしようとしていたわたし達は目の前の状況に思わずフリーズしてしまった。 そこにはぼろ雑巾のように、身体全身がぼろぼろのモットー伯爵とその首を片手で掴んで持ち上げるシエスタの姿があった。

「ん？ 何者！」

私達に気づいたらしいシエスタがモットー伯爵を投げ飛ばし振り向く。 良く見ると、頭に犬の耳みたいなものが生えている。

「…………シエスタ、よね？」

「この姿を見られたからには、…………消えて貰いますよ」

シエスタは構えをとり、掌を合わせる。 すると影を凝縮したかのような漆黒の塊が掌に集まっていく。

「ちょっと待って、私達は…………」

「問答無用！」

しまった、変装して今、男になってたんだ。 これじゃ、

わたしがルイズだってわかるハズがないじゃない！

「【狼牙双掌打】！」

マズイッ！

障壁全開ッ！

ガガガガガッ

パキイイインッ

「ぐッ！」

まさか、わたしの障壁を破るとは……。全開にしておいで良かったわ……。シエスタは驚きながらも、次の攻撃に移ろうとしている。

「ちょっと待って！ わたしよ、わたし！」

そう言っただけわたしは変身魔法を解いた。
（十代の頃への変身は解かないわよ）

「え？ ミス・ヴァリエール！」

「貴女を助けに来たのよ。まあ、必要なかつたみただけだね」

どうやらわかってくれたみたいだ。それにしても、あの力は何かしら……。犬みたいな耳が生えてるし……。狼人？でも、この世界にいる狼人にあんな力はないし、もしかして……

「その姿とか、いろいろ聞きたいけど後回しよ。皆、作戦通りにね」

キュルケ達は驚いた顔をまだしていたが、頷き、不正な書類を探した。すぐに見つかり、さっさと脱出する。王宮に匿名で書類を届け、ミッションコンプリート。これで明日には、モットー伯爵は破滅するハズだ。

「さてと、それじゃあ教えて貰おうかしら？ 大丈夫よ、ここには人の秘密を言いふらすような奴はいないから」

今、私達はシートを敷いて、魔法学校の中庭で鍋を囲んでいる。

「貴女、何者なの？ ルイズの障壁を破るなんて普通じゃないわよ」

キュルケが言った。タバサは何も言わないが、興味はあるのだろう。本をひろげていない。

「……実は私の祖先は狗族と言う種族なんだそうです」

……やっぱりね。

「人間と子供を作ったみたいで……それで、私の血筋はときたま先祖帰りで犬の耳が生えた子供が生まれてくるようになったらしいです。その一人が私です。普段、耳は生えていないんですが、力を使うと……」

「へ」

キュルケが相づちをうつ。私が魔法で行ったり戻ったりしたんだからわかってたけど、この世界と向こうの世界は全然つながっていない訳じゃないよね。狗族と言えば、向こうの世界の生き物だったハズよ。

「皆さん、どうかこのことは秘密に……」

「大丈夫よ。言ったでしょ？　ここに人の秘密を言いふらすような奴は居ないって」

「そうよ。　ねえ、タバサ？」

「そう」

「……ありがとうございます」

そとと、それじゃあ

「そろそろ食べようかしら？　お腹へ」

「そうね、私もよ」

「待ってました」

「お酒注ぎましょうか？」

キュルケとタバサが鍋に注目していると、シエスタが言った。

ちなみにエヴァはすぐそこで酒を飲み、二つの月を見ながら、デルフと話している。

「なに言ってるのよシエスタ。 今日は無礼講よ。 貴女も飲みなさい」

そう言って私はシエスタにコップを持たせ、お酒を注ぐ。

「よし！ それじゃ今日はいろいろあったけど、乾杯」

「」「乾杯」「」

「あッ キュルケ！ なに肉を先に入れてるのよ」

「いいじゃない、美味しいものから先で。 ホラホラ」

「美味しい」

「バカッ！ 火が通る時間差ってのがあってね、まずは野菜を入れて……」

「おい、ルイズ。そんなことチマチマ言っ
てないで、バンバン食
お
うや」

「へ？ シエスタ、あんたまさか酒乱！？」

詠春さん……………私には、
まだまだ鍋将軍は勤まりそ
うに
ありません……………。

エヴァのとある一日

さて、突然だが私はエヴァジェリン・A・K・マクダウエルの人造精霊だ。まあ、この世界に本体はいないのだから私がエヴァと名乗っても問題ないだろう。ルイズに闇の魔法を教えたのは五年程前だったろうか……。当時、行き詰まっていたルイズが私を起動し、さらに使い魔として召喚したのだから……。きつと何かの縁があるのだろうか。

私が起きると、もう昼頃だった。ルイズは授業に行ったのだろう、部屋には誰もいない……。おっと、デルフがいたな。昼飯の時間はとくに過ぎているだろうが、人造精霊である私の身体に食事はいらない。まあ、趣味で食べたり飲んだりするがな。部屋に居ても暇なので、デルフを持って外に出ることにした。

「おっ、姐さんか。どっかに行くのか？」

「フツ、人生は刺激がなければつまらんだろ。待っていても来ないなら、探しに行くんだよ」

「まったくだ、姐さんは頭いいね」

部屋を出ると、最近稽古をつけてやっってるキュルケの使い魔であるサラマンダーのフレームがうるうるしていた。

「きゅるきゅるきゅる」

「どうした？ お前も退屈なのか？」

。。。。
フレームもついて来た。とりあえず、厨房に顔を出すか。。。。

「あっ、エヴァジェリンさん。 どうしたんですか？ 何か用ですか」

そう話し掛けて来たのは狗族の少女、シエスタだった。 昼飯の片付けをしている。

「いや、どちらかと言いつつ、用を探している」

シエスタとはモットー伯爵とか言う奴の屋敷に忍びこんだ辺りか

ら、仲良く? なった。 耳を誤魔化せるように、身に付けると幻術魔法がかかる腕輪をやったら、とても喜ばれた。

「そうですか、じゃあ片付けを手伝って貰えませんか？」

「いいだろう」

暇だったので、引き受けた。 ん? そんなキャラじゃない? 私が何をしようと勝手だろ。

片付け終わると、厨房からコック長のマルトーが出てきた。 四
十過ぎの太った奴だが、料理の腕は確かだ。

「よく来てくれたな【我らの女神】! 悪いな、片付けを手伝って
もらって」

「フツ、なに、暇だったからな」

「そうかそうか。 そう言えば、東方の珍しい飲み物があるんだが、
飲むか？」

「もらおう」

出てきたのは湯気をたてる緑色の液体だった。

「……………これは！」

「何でも、お茶って言うらしい。珍しい色だろ？」

一口啜る。　ズズズー　……………うむ

二口目。　ズズズー　この渋さが和む。

三口目。　ズズズー　ふ〜。

「旨いのか？　姐さん」

「……………和む」

私が和んでいるとフレームが服を引っ張ってきた。

「きゅるきゅるきゅる」

「どうしたフレイム？ お前も欲しいのか？ 止めておけ、お前の口には合わんよ」

しばらく、マルチーと世間話をしてから私は学院長室に行くことにした。

「ご馳走になった。 旨かったぞ」

「そりゃ良かった。 また珍しい物がきたらやるよ」

そして私は厨房をあとにした。

「入るぞ」

ノックせずに学院長室の扉をあけた。

「ほぐ、珍しいお客さんじゃのう」

そこには鼻毛を抜いているオスマンがいた。 オスマンは盗賊の

事件後、いろいろ聞いてきたが、ルイズは曖昧に答えていたな。
なんか私が【ガンダールヴ】だとか、なんとか。

「ところで何の用じゃ？」

「なに、暇でな。 チェスでもやらんか？」

「……別がいいんじゃない？」

そう言えば、私が何者か知りたがっていたな。

「私に勝ったら、私の正体を教えてやってもいいぞ」

「ほ、随分な自信じゃな。 いいじゃろ、勝負じゃ」

一時間後

「強いの〜」

「フツ、お前もな。 思ったより楽しめたぞ？」

「それにしても、お主、一体何歳なんじゃ？」

「私が勝ったんだがな……。少なくとも、お前よりは年上だな」

「……何が目的なんじゃ？」

少し真面目な顔できいてきた。正体不明の奴が学校にいたら、責任者として心配なんだろうな。

「なに、目的なんてないさ。強いて言うなら、暇潰しだな」

「……」

「世話になったな。また来る」

そう言い残し、私は部屋を出た。そろそろ、授業が終わって夕バサとキュルケが来る頃だろう。

一面の海に高さ百メートル、幅五十メートル程の塔が建っている。

ガキキキキンツ

私の魔法で周囲から氷の槍が生まれる。 キュルケとタバサは「
フライ」で避ける。

「くツ！」

「・・・ツ！」

「どうしたッ 私が相手でも、一分は持たせるッ」

魔法の射手 氷の五十一矢！

ガガガガガッ

キュルケとタバサは避けようとするも、数が多すぎて対応しきれず、障壁を張って耐える。

「【ファイヤ・シールド】ッ！」

「【ウィンド・シールド】」

私は一瞬で後ろに移動し、デルフの峰を叩き付ける。

「後ろがから空きだぞ、小娘ども」

ドカ
ンッ

二人は吹き飛び、倒れた。まあまあだな……。ここは私が造った【別荘】だ、しばらく使ってたが小娘達の修行のために掘り出してきた。ここでは一日過ごしても外では一時間しか経過してない。これを利用して小娘達には丸一日たっぷり修行してもらっている。

「まったく、何度言えばわかる？ 足を止めるな！ 防御後次の攻撃に対処出来なければ意味はない！」

起き上がってきた小娘達に指導をして休憩になった。

「やっぱり強いわね」

「強い」

「フンツ、まだまだ小娘達には負けんさ。だが、魔力による身体強化と障壁の展開は大体出来るようになったか」

「そこよ、なんで障壁を張る魔法を私たちの魔法体系で創れたのよ」

「便利」

そう、小娘達が使う魔法体系には障壁を展開する魔法が存在しなかったのだ。

「体系が違うとは言え、似通ったところもあったからな、創るのはそんなに難しくはなかったぞ？」

「」
「」
「」

なぜそこで黙る。 まあいい、そろそろ一日たつな……

「よし、今日はここまでだ、続きはまた明日」

「疲れた」

「フンッ、それじゃ出るぞ」

【別荘】から出るとルイズがいた。どっかへんなところに置いて、壊されたらたまったもんじゃないからな、ルイズの部屋を使わせてもらっている。

「あ、やっと出てきたわね。　どうよ二人は？」

「まあまあだな、この調子で五年ぐらいすれば、お前とも戦えるんじゃないか？」

「へっ、ッて自画自賛じゃないけど、それって一人で国と戦えるってこと？」

「なによそれは……　あんた国と戦えるの？」

まあ、行けるだろうな、広域殲滅魔法をつかえば。

「いや、魔法体系が違うからな……。　対軍用の魔法はないみたいだからな、それは無理だ。　だが対人ならかなり高いレベルまで行けると思うぞ。　なんて言ったって、私が教えているんだからな」

「へ」

そんなことを話していると、タバサが話し掛けてきた。

「そろそろご飯」

「本当だ、もうこんな時間だわ。 エヴァはどうする？ 食べる？」

ルイズが尋ねてくる。

「そうだな。 たまには食事をするのもいいかもな」

気まぐれで食事をしに行くことにした。 テーブルマナーがかたつくるとルイズがこの前言い出し、マルトーがシエスタを助けてくれた恩返しだと中庭にシートを敷いて用意してくれたらしい。

デルフを片手にルイズ達について行く。

- ・ 月を見ながらこうやって仲間と酒を飲む日が私に来るとは……
- ・ 人生とは分からないものだな。

「姐さん。 今日はどうだったよ」

デルフが話し掛けてきた。

「ん？ そうだな、それなりに楽しめたな」

「フン、まあ嫌ではないな、こんな日々も……」

第9話 依頼（1）

魔法学院に続く道を金の冠を御者台の隣につけた四頭立ての馬車が、歩いていった。馬車のところどころに金と銀のレリーフがかたどられている。王家の紋章である。馬車の四方を固めるのは、王室直属の親衛隊、魔法衛仕隊の面々である。街道に並んだ平民たちが、口々に歓呼の声を投げかける。

「トリステイン万歳！ アンリエッタ姫殿下万歳！」

と、歓声が沸き上がる。

魔法学院の正門をくぐって、王女一行が現れると、整列した生徒たちは一斉に杖を掲げた。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーリーッ！」

しかし、がちやりと扉が開いて現れたのは枢機卿のマザリーニであった。生徒たちは一斉に鼻をならした。しかし、マザリーニはいに介した風もなく、馬車の横に立つと、続いて降りてくる王女の手を取った。生徒の間から歓声上がる。王女はにっこりと薔薇のような微笑を浮かべると、優雅に手を振った。

ルイズはその喧騒のなか、小さく肩の力を抜くように溜め息を吐いた。

「あら？　どうかしたのルイズ？」

「いえ、特になんでもないわよ」

「何でもないなら溜め息なんて出ないわよ」

隣に立つキュルケがルイズに問い掛ける。ルイズは何でもないように返すが、キュルケはそう取らなかつたようだ。

「あれがトリステインの女王か？　若いな」

「そうよねー、久しぶりに会ったけど、あの顔からすると、周りに味方がいないようね」

「それが、溜め息の理由？　確かに、一国を治めるには若すぎるわね」

ルイズの周囲にはいつものメンバー、つまり、キュルケ、タバサ、エヴァがいる訳なのだが、誰一人周りのように興奮していない。

キュルケとエヴァは興味深そうに、タバサは興味無さそうに、ルイズはなんとも言えない表情で姫殿下一行を見ていた。

「それにしても、あんたが静かなのは、なんか変ね」

「……そう？」

「あんた、あんなにゲルマニアのこと嫌いだって言ってたのに、良いの？ 姫様、ゲルマニアの皇帝に嫁ぐことになるらしいけど？」

「そんなの昔の話よ。今の私としては、ゲルマニアの方が気楽で良いかもね」。……？」

キュルケの問い掛けに答えながら、ルイズは視線を姫殿下の近くに控える一人の男に向ける。見事な羽帽子をかぶり、凛々しい貴族の姿があった。鷲の頭と獅子の胴体を持った幻獣に跨がっている。

「うーん……」

「どうしたの？ ……あら、いい男」

「いやね、なんか見覚えがある気がするんだけど……思い出せないわ。気のせいかしらね」

その日のよる

エヴァは一人でファミコンをプレイしていた。ベッドの上では考え込んでいるルイズがいる。

「うーん、誰だったかしらね……」

カチャカチャ ピコピコ
ピロロンッ
ピコピコ ピロン カチャカチャ……

「ああーもう！ うるさいわね！ 私もませない！」

「ほう、この私に挑むか」

「フフフ……、【神速の指】と言われた、私のボタン連打力、見せてやるわ」

カチャカチャ……ピコピコ……カチャカチャカチャカ
チャッ ピロロンッ ピロロンッ

「ぬ……やるな」

「あんたもね……」

カチャカチャカチャカチャカチャカチャツ

そんな風にルイズとエヴァが死闘を繰り広げていると、ドアがノックされる音が聞こえた。

「エヴァ」

瞬時にゲームと共にエヴァは巻物に戻った。ノックは規則正しく叩かれた、始めに長く二回、それから短く三回……。ドアを開けると、そこにいたのは真っ黒な頭巾をすっぽりと被った少女だった。

「何処に目があるか分かりませんから……」

そう言うと杖を取りだし軽く振った。

「【ディテクトマジック】？」

ルイズが尋ねた。

頭巾の少女は頷く。

部屋の何処にも聞き

耳を立てる魔法の耳や、どこかに通じる覗き穴が無いことを確かめると、少女は頭巾を取った。そこにあった顔は、今日、トリスティン魔法学校に来訪したアンリエッタ姫だった。

「久しぶりね、ルイズ・フランソワーズ」

慌てて膝をつくルイズ。

「ああ、ルイズ、ルイズ、懐かしいルイズ！」

「姫殿下、いけません。こんな下賤な場所へお越しになられるなんて……」

かしこまった声でルイズは言った。

「止めて頂戴、ルイズ、わたくしが心を許せるのはルイズだけなのよ？ ここには口うるさい、枢機卿もいないのだから……。私から心の平穏を奪わないでくださいまし……」

「姫殿下……。それでは……、お久しぶり、姫様」

「ルイズッ！」

アンリエッタは感極まったようにルイズに抱きつき、頬擦りま
でしだした。内心、ちよっといろいろ大丈夫かしらこれ？と思
ったルイズだが、まあアンリエッタの立場じゃしかたないか、と考
える。落ち着きを取り戻したアンリエッタはルイズと昔話に花を
咲かせた。ふと、アンリエッタの顔が曇る。

「あの頃は楽しかったわ。何にも悩みが無くて」

深い憂いを含んだ声であった。

「結婚するのよわたくし」

「……おめでとつごぞいます」

現在、ハルケギニアの世は乱れている。トリステインと同じ
く歴史の古い国、アルビオンで反乱が起きているのだ。アルビオ
ン王家が倒れれば、次はトリステインと言われている。故に、隣
国ゲルマニアとの同盟を必要に迫られたのだ。その為、アンリエ
ッタはゲルマニアの皇帝に嫁がなければいけなくなつた。

「そこで、アルビオン反乱軍は同盟の妨げになるであろう材料を探
しています」

「……ちょっと待ってください。そんなものがあるんです
か？」

「……………」

「あるんですね……………」

ルイズは額に手をあてて、溜め息を吐いた。

（ちょっと、なんとか言ってみてやってみてくださいよ、アリカ女王……………）

と、知り合いの王女に内心言いながら、続けた。

「で？ その材料というのは？」

「聞いてくださるのですか？」

「言いに来たのでは？」

ボソボソとアンリエッタは喋り出した。

「……………手紙？」

「ええ……………」

「あのアルビオンのウェールズ皇太子に出した手紙がその材料？」

「……………はい」

「大方、恋文ですか？　で、そこまで言うとなると、始祖に愛を誓いましたか」

「……………そ、そうです」

はあ〜と、ルイズは頭痛を耐えるように頭をおさえた。

「しょうがないですね、国を滅ぼす訳にもいきませんし……………、ついでに反乱軍も潰して来ましようか？」

「……………はい？」

「……………と、その前に、そろそろ出てきなさい」

と言ってルイズはいきなりドアを開けた。

「きゃっー！」

「……………っ！」

キュルケとタバサがルイズの部屋へと雪崩れ込んでくる。

「あはは……………」

「……………修行しに来た」

キュルケは苦笑を浮かべ、タバサはいつも通りの無表情だ。

「やれやれ、私もたるんでるわね。　で？　どこから聞いてたの？」

「えーと、ルイズが昔話をしてた辺りからかな？」

「ほとんど全部じゃない」

結局、タバサとキュルケがついてくることになった。

「では、明日の朝から、アルビオンに向かって出発するします」

「ウエールズ皇太子はアルビオンのニューカッスル付近にいると聞き及んでいます。それとこれを持って行ってください」

アンリエッタは封蝋で封印された手紙と指輪を手渡した。

「母君から頂いた【水のルビー】です。せめてものお守りです、お金が心配なら売り払って旅の資金にしてください」

「わかりました。必ずや、この依頼成功させましょう」

こうして、新たなルイズの冒険が始まるうとしていた……。

第10話 依頼(2)

「さて、んじゃ行きますか！」

「これから戦場を突っ切るうってのにやけに生き生きしてるわねルイズ」

朝もやの中、ルイズ、キュルケ、タバサ、エヴァの四人はタバサの使い魔、風竜のシルフィードに乗って、先ずはアルビオンへの船が出ている、ラ・ロシエールの街に向かおうとしていた。

「フツ、昔を思い出してるんだろ」

エヴァが言った。　キュルケはその話に興味を持ったらしい。

「何よ、昔って？」

「そんなすぐに話せるような話じゃないわ。　そうね、物凄く要約すると、八人で世界中と闘ったってところかしらね」

「どんな冒険よ、それ……」

「ま、暇があればいつか詳しく話してあげるわよ。　タバサ、そろそろ行きましょ」

「了解」

「さて、これから苦しい戦いになるかも知れないけど、皆必ず生きて帰ってくるわよ！　それじゃ、出発！」

「「「おー！」「」」

「ちょっと、いいかい？」

ルイズが気合いを入れていると、朝もやの中から一人の長身の貴族が出てきた。　貴族は羽帽子をかぶり、グリフォンを連れていく。

「誰ッ！」

ルイズの声に全員が構える。

「待ってくれ！　僕は敵じゃない。　姫殿下より、君たちと同行を命じられてね。　お忍びの任務であるゆえ、一部隊つけるわけにも

いなくてね。そこで僕が指命されたってワケだ」

ルイズが良く見ると、姫の近くに控えていたあの何処かで見覚えがある貴族だった。

「すまない、婚約者を驚かそうと思ったんだが、警戒されてしまったようだね……………」

「……………へ？ 婚約者？」

ルイズは誰がこの人の婚約者なのか考えた。

（キュルケとタバサは留学生だし……………。エヴァは論外、てことは……………私？）

「ルイズ、あんた婚約者がいたの？」

キュルケの問いにルイズは顔をひきつらせる。

（ルイズ……………、忘れてたな）

と、三人は内心思った。

「そうだ、じ、自己紹介を皆にしてくれませんか？」

ルイズが誤魔化しながら言った。

「そうだね、僕はワルド。　女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ」

「そ、そう！　ワルドさまよねッ！　お久しぶりでございます」

ルイズはやっと思い出したようだ。　しかし、それもしかたない事だった。　異世界で過ごした濃密な十年、さらに六歳の頃に会っただけなのだから、二十年ぶりと言うことになる。

「さ、さあ！　それじゃあラ・ロシエールに向かって出発しましょう！」

【サイド・ルイズ】

魔法学院を出発して以来、ワルドはグリフォンを疾走させっぱなしであった。　タバサ、キュルケ、エヴァがシルフィード、私とワルドがグリフォンに乗り、ラ・ロシエールへ向かっていた。　さすがのシルフィードもこの人数を乗せて、アルビオンのニューカッスルへは行けないようだ。

「それにしても、何でルイズは剣なんかを背負ってるんだい？」

ワールドが話し掛けてきた。

「いまだに私、魔法が成功しなくて……」

「大丈夫だよ、ルイズ。君はまだ自分の才能に気付いてないだけなんだ」

「私にそんな才能があるかしら……」

まあ、ハルケギニアの魔法じゃないけど、マスタークラスになれたわね……。師匠ナギのおかげでもあるけど。ワールドと思い出話や、そんな話をしていっていると、その日の夜中にはラ・ロシエールの入り口に私達はついた。流石にグリフォンと風竜は速いわね。

そのとき

不意に、私達目掛けて、崖の上から松明が何本も投げ込まれた。たまらずとまるグリフォンとシルフィード。そこを狙って、何本もの矢が夜風を裂いて飛んできた。

「ちッ！」

私はデルフを抜こうとするが、次の瞬間には一陣の風が舞い起こり、小型の竜巻が現れた。竜巻は飛んできた矢を巻き込むと、あさつての方向へ吹き飛ばす。

「大丈夫かい？」

ふと見ると、ワールドが杖を掲げている。

「ええ、助かったわ」

特に、何もしなくても、私が常時張っている障壁で防げたけどね……

カツ！ ドガガガッ

つと、そんなことを考えていたら、エヴァ達、シルフィード組がさっさと殲滅を開始した。

「ふむ、君の友達達は強いね。特に、君の使い魔である、あの金髪の少女なんか別格じゃないか？」

そりゃそうでしょ、エヴァと渡り会える奴はこの世界にそうはいないわね。 それにしても……

「私、貴方に彼女が使い魔だっていったかしら？」

「なに、少し噂で耳にしたんだよ」

噂、ね……

【サイド・アウト】

途中、襲われたルイズ一行であったが、ものともせず、ラ・ロシエールで一番上等な宿、【女神の杵】亭に泊まることにしていた。今、ルイズ達は一階の酒場でくつろいでいる。

【女神の杵】亭は貴族を相手にするだけあって、豪華なつくりである。テーブルはピカピカに磨きあげられ、顔が映るぐらいだ。

「まったく、アルビオンに渡る船が明後日にならないと出ないなんて、ツイてないわね」

「ルイズ、仕方がないよ。明後日に最もラ・ロシエールにアルビオンが近づくんだから」

ルイズのぼやきにワルドが答えた。

「さて、暇が出来たことだし、トランプでもやりましょうよ?」

何処から取り出したのか、キュルケがトランプをテーブルの上に置いた。

ポーカーをやった五人だったがタバサが強かった。無表情だから、手札がどんなのかまったく予想が出来ない。それに何より様になっていた。ルイズ達が、賭博場で働いていたのか? と疑う程のカード捌きである。一通り楽しむとワルドが言った。

「さて、今日はもう寝よう。部屋は取った」

鍵束をテーブルの上に置く。

「キュルケ、タバサ、エヴァが相部屋だ。そして僕とルイズが相

部屋」

「もうワルド、私達、結婚してる訳じゃないのよ？」

「大事な話があるんだ。二人で話したい」

【サイド・ルイズ】

大事な話って言ってたから、どんなことかと思っただらプロポーズしてきた。確かに年齢的には同じぐらいだけど、今、私の外見は十代半ばのはずよ？もしかしてワルドってロリコ……。

それにしても近くで見ると気づいたけどワルドの目は冷たい。

顔は笑っているけど、目が氷のようなのだ。そのせいかまったく冷めた私がいる。プロポーズされたんだから嬉しいハズなのに……

「ごめんなさいね、ワルド。会ってなかった期間が長すぎて……、整理がつかないの」

「そうか……わかった。急がないよ、僕は」

外見は少女であるエヴァのことをまるで見たことがあるかのよ

うに使い魔だと言ったり……。少しワールドは警戒した方が
いいかも知れない。

【サイド・アウト】

翌日の昼、ワールドとエヴァはかつて陛下の閲兵を受けたという
練兵場で、二十歩ほど離れて向かい合っていた。

「で？　なんでこんなことしてるのよ」

ルイズが言った。

「なに、少し君の使い魔と手合わせをしたくてね」

「だそうだ、私も暇だったからな」

（まったく、なんなのよもう）と、ルイズは思いながら溜め息
をついた。

「では、介添人も来たことだし、始めるか」

ワルドは腰から、杖を引き抜いた。 フェンシングの構えのよ
うに、それを前方に突き出す。

「フンッ、遊んでやる。 さっさとかかってこい」

エヴァは何処から取り出したのか、鉄扇を持っている。

「いくぞッ!」

ワルドが掛け声と共に一足飛びに飛んで切りかかった。

「ハッ!」

一息に三連撃、切っ先が空間を切り裂きながらエヴァに迫るが・
・・・

「フンッ」

難なく、エヴァは鉄扇で三連撃を受け流し、瞬時に突いてきた
腕をとり投げる。

鉄扇・逆腕絡み

「ぐッ」

地面に顔から叩きつけられるワルド。

「へ、エヴァって体術も凄いわね。あれって合気柔術だったけ」

観戦していたルイズが言いと、背負っていたデルフが言った。

「姐さんは、普通じゃねえからな。暇潰しに百年ぐらい鍛えたらしいぜ」

「へ、百年……って百年ッ!？」

そうこうしているうちに、再びワルドが突くが、またもや投げられ、今度は積み上げられた樽に激突した。

「ぐッ」

すかさずエヴァが追撃するように無詠唱で呪文を発動する。

魔法の射手 闇の九矢

ガガガガカッ

樽の残骸が吹き飛ぶも、なんとかワルドは転がりながら避ける。避けながら呪文を唱えていたのが見えない巨大な空気の槌がエヴァに迫るが……

「氷楯」

パキイイイン

エヴァの氷の楯に止められてしまう。

「なにッ！」

ワルドが驚いた一瞬でエヴァは後ろに移動し、鉄扇を突き付ける。

「まだやるのか？」

「……いや、僕の完敗だ。参ったな、結構自信あったのに」

「フツ、まあ私に挑むのは百年早かったな」

こうして決闘は終わった。

その日の夜

修羅場だった。いきなり玄関から現れた傭兵の二団が、一階で飲んでいたルイズ達を襲ってきたのだ。

「楽しくなってきたわね」

ルイズの言葉にキュルケが頷く。

「そうね、やっぱりこう言う緊張感が良いわ」

「行く」

「オッケー」

タバサとキュルケが駆け出す。魔力による身体強化と【高速歩法・瞬動】によって、まったく反撃を許さず傭兵達を殲滅していく。しかし、ラ・ロシエール中の傭兵が束になってかかって来ているらしく、なかなか数が減らない。

「いいか、諸君」

ワルドが低い声で言った。

「このような任務は、半数が目的地に着けば、成功とされる」

ワルドが言おうとしていることに気づいたルイズは言葉を遮り言った。

「ワルド、この程度で何を弱気な事を言ってるのよ。エヴァ、殺っちゃって」

「いいんだな？」

「私達の道に立ち塞がる以上はやむを得ないでしょ……それなのに、私の両手はもう血にまみれてるわよ。殺すのは好きじゃ無いけど……」

「……………ならいいさ」

テーブルの陰に隠れながらルイズは叫んだ。

「傭兵達ッ！ これから大規模な魔法攻撃が行くわよ！ 死にたくなければ今すぐ立ち去りなさいッ！」

エヴァが詠唱を始める。

「来たれ氷精 闇の精！
闇を従え 吹雪け 常夜の氷雪・
……………」

エヴァの突き出した手に闇が生まれる。

「【闇の吹雪】！！！！」

ゴッ！！

直撃した傭兵達は漆黒の竜巻に呑み込まれ、跡形もなく消え、周りのものたちもその衝撃波だけで吹き飛び、戦闘不能になった。

「凄まじいな……、僕はこんな奴に決闘を挑んだのか」

ワルドが呆然としている。この地獄絵図のような状態を見てルイズ達と言うと、キュルケは案外平気だった。流石はゲルマニアの軍人の家系だ。タバサはいつも通りの無表情。ルイズは自分が命じたことだからか、少し眉を歪めてた。

「さあ、早く船のところへ行きましょう。多分いまの奴らはアルピオン反乱軍の妨害よ、船が心配だわ」

こうして、ルイズ達一行は棧橋へと急いだのだった。

第11話 依頼(3) (前書き)

感想、どうもありがとうございます！

まだまだ未熟な文章力ですが、期待に応えられるように頑張ります。

第11話 依頼(3)

ルイズ一行はアルビオンに向けて飛び立っていた。【風】の魔法力を蓄えた石、【風石】がアルビオンまで最短距離分しかなく、足りない分をワルドが補っている。

「アルビオンにはいつ着くの？」

ルイズが尋ねると

「船長は、明日の昼過ぎには、スカボローの港に着くと言っていたよ」

と、ワルドが答えた。そんなことを話していると、キュルケが小声でルイズに聞いてきた。

「ねえねえ」

「なによ？」

「あんたの転移魔法とかでいつきにニューカッスルまで行けないの？」

「そりゃ、出来たら最初からやってるわよ。 転移する距離には限度があるし、土地を知ってないと出来ないのよ…… 一回家族で旅行に行ったことがあったけど、かなり曖昧だから無理ね」

「あーそう、残念」

そんな二人の元にワルドが寄ってきた。

「船長に聞いてみたが、ニューカッスル付近に陣を配置した王軍は、包囲されて苦戦中のようだ」

「ウエールズ皇太子は？」

ルイズの問いにワルドは首を振る。

「わからん。 生きてはいるようだが……」

ルイズは少し考えて頷いた。

「やっぱり、陣中突破しかないでしょ。 スカボローからニューカッスルまで、馬で一日……、シルフィードなら五、六時間ぐ

「らいかしら」

ちなみにシルフィードは大きいので、船の後ろについてきている。人を五人乗せてはアルビオンまで行けないが、身一つなら大丈夫なようだ。

「やはり、それしかないか。隙を見て、包囲網を突破し、ニューカッスルの陣へと向かう。ただ夜の闇には気をつけなといけな
いかな」

「よしッ！ やることが決まったらトランプでもして、リラックス
しましょうか」

「ルイズ、余裕だな」

「こつ言うのは心配してもどうにもならないのよ、ワルド」

船員達の声と眩しい光で、ルイズは目を覚ました。青空が広がっている。

「アルビオンが見えたぞー！」

鐘楼の上に立った見張りの船員が、大声をあげた。 ルイズ
の隣にはエヴァが座っている。

「まるでオスティアだな」

エヴァが言った。

「まさか、落っこちないでしょうね……」

かつての戦いを思い出し、ルイズ呟いく。

その時、鐘楼に上がった見張りの船員がまた大声をあげた。

「右舷上方の雲中より、船が接近しています！」

「……ねえ、エヴァ」

「なんだ？」

「前に、私は巻き込まれる星の元に生まれた、とか言ってたじゃない

い？」

「そうだな」

ルイズはにやりと笑いながら言った。

「そのとおりかもね」

甲板にルイズ達が出てみると船員が大騒ぎしていた。

「どうするッ！ 奴ら多分空賊だぞ！」

「くそッ、もうすぐ着くのに……」

「逃げる！ 取り舵いっぱいッ！」

船長が船を空賊から遠ざけようとするが、時すでに遅し。黒い空賊の船が併走しはじめた。脅しの砲弾が、ルイズ達の船の進路目掛けて放たれる。

「停船命令です、船長」

船員の言葉に船長は顔を歪める。それを聞いていたルイズがエヴァに言った。

「エヴァ、あの黒い船の甲板を氷漬けにしてくれない？ それで砲弾は使い物にならなくなるハズよ」

「しょうがないな……。来たれ氷精 大気に満ちよ 白夜の国の 凍土と氷河を 【こおる大地】！」

エヴァの魔法により空賊の船は減速を始めた。

「最近の貴族様はあんなことも出来るんですか？」

船長の言葉にルイズは

「そうなのよ、新しく開発された魔法なの」

と、嘘八百なことを返した。

五時間後

無事、アルビオンに到着したルイズ一行は、軽い昼飯を食べた後、早速包囲網の突破に挑んでいた。現在はシルフィードに乗って、弾幕の中を突き進んでいる。

「なんで、こんなことになってるのよッ！ 【ファイヤ・ボール】
バレないようにニューカッスルまで行くハズじゃなかったのッ！」

キュルケが襲いかかって来る、竜騎士に魔法を放ちながら叫ぶ。それにルイズも叫びながら返す。

「そんなの、無理に決まってるでしょうがッ！ 【錬金】
そもそも、包囲網がそんな簡単に突破出来たら、【錬金】
包囲網って言わないわよッ！」

失敗魔法と言えども、その威力は中々のもので、一発で竜騎士二、三人は巻き込んで墜落させて行く。ルイズとキュルケが近づいて来る竜騎士を攻撃。ワルド、タバサ、エヴァの三人は飛んでくる魔法や弓矢を弾き落としている。

「もうすぐニューカッスルだッ！ あと一踏ん張り、頑張るんだ」

一時間後

「あれがニューカッスル城ね」

見事に包囲網を突破したルイズ達がいた。

「まったく、生きた心地がしなかったわよ。 ってルイズ、あんた大丈夫？」

キュルケが言った。ルイズを見ると顔と胸を抑えていたが、なんでもなかったように顔をあげる。

「. 大丈夫よ。 少し、昼飯を食べ過ぎたの。 さあ、降りましょ」

アンリエッタが渡してきた【水のルビー】のおかげで、疑われずに大使としてルイズ達は城に入ることが出来た。

「え？ ウェールズ皇太子がいない？」

「はい。 ウェールズ様は所業がありまして、少し城から出ているのです。 もうすぐで戻って来るでしょうから、少し待っていてください」

背の高い、年老いた老メイジがルイズ達に言った。 案内された居室で待つこと三十分。 ウェールズ皇太子が入ってきた。

「待たせてすまないね。 アルビオン王国皇太子、ウェールズ・デューダーだ」

「トリステイン大使のルイズ・ド・ラ・ヴァリエールです。 アンリエッタ姫殿下より、密書を言付かって参りました」

ルイズが、優雅に頭を下げて言った。

「ふむ……」

ルイズから受け取った手紙を真剣な顔で読むウェールズ。 そのうち顔を上げた。

「姫は結婚するのか、……私の愛らしい……。 了解した。 姫は、あの手紙を返して欲しいとこの私に告げている。 何より大切な、姫から貰った手紙だが、姫の望みは私の望みだ。 そのようにしよう」

「ありがとうございます」

ルイズが言つとウェールズは首を振った。

「なに、大したことではないさ。 ついて来たまえ」

ルイズはウェールズに従い部屋から出ようとするが、振り替えて言つた。

「なんか、祝宴があるらしいから、皆は先に行つていいわよ」

「オツケー、早く済ませなさいよ」

キュルケの返事を聞くと、ルイズは部屋から出ていった。

【サイド・ルイズ】

私が案内されたのは王子の部屋とは思えない、質素な部屋だつた。 ウェールズ皇太子は首からネックレスを外し、その先についていた小さな鍵を宝石が散りばめられた小箱に差し込み、箱を開けた。

「宝物だね」

中から何度も読み直したらしい、ボロボロの手紙を取りだし、いとおしそうに口づけたあと、開いてゆっくりと読み始めた。読み終わると、彼は再びその手紙を丁寧にあたみ、封筒に入れ、私に手渡した。

「これが、姫からいただいた手紙だ。この通り、確かに返却したぞ」

「ありがとうございます」

私は深々と頭を下げる。伊達に異世界で戦争してきた訳じゃない。彼がトリスティンに亡命しないことは分かっている。でも、聞いてしまっじゃない？もしかしたらって。

「殿下、私は姫の友達だと自分で思っています。なので、私が持ってきた手紙に書かれていたことも、大体は予想がつきます。いいのですか？」

「……ありがとうございます。君は優しいね。だが、私は王族だ。勇敢な死に様を反乱軍の奴らに見せてやるさ」

ああ、やっぱりこの人は王族だ。アリカ王女のように、最後

の最後まで、王としての道を貫くのだろう。 なら……

「ならば、私が言うことはありません……。 御武運を」

彼は微笑んだ。 白い歯がこぼれる。 魅力的な笑みだった。

「そろそろ、パーティーの時間だ。 我らが王国が迎える最後の客だ。 是非とも出席してくれ」

「分かりました。 ……もうひとつ宜しいですか？」

これからする事は指示を受けていない……。 だけど、このままじゃ、あまりにも姫様が可哀想に思えた。 だから、これはサービスだ。 なんて言っただって、私は姫様の友達なんだから……

【サイド・アウト】

パーティーは城のホールで行われた。 簡易の王座が置かれ、王座にはアルビオンの王、年老いたジェームズ一世が腰掛け、集まった貴族や臣下を目を細めて見守っていた。

「明日でお仕舞いだつてのに、随分と派手ね」

「………終わりだからこそ」

キュルケの言葉にタバサが答える。なにやら思つところがあるようだ。辺りは喧騒に包まれる。ふと、ルイズは何をやっているのか気になったキュルケが辺りを探すと、ルイズの背中がバルコニーの方へ向かつて行くのが見えた。

(何やってるのかしらね)

見に行こうとするも、キュルケはアルビオンの貴族たちに酒や料理を勧められ、見失つてしまう。

エヴァは独り、喧騒から離れて、酒を飲んでいた。

「国の滅び………か。いかな、この身は人造霊と化しているのに、少しばかり感傷的になつたか………」

何を思い出しているのだろうか。彼女がまだ人間だった頃のことでも思い出しているのだろうか。

ワルドはウェールズと、話していた。

「なにか御用がおりかな？ 子爵殿」

「恐れながら、殿下に明日、お話したいことがございます」

「今でもいいが……」

「いえ、今日はこの祝宴をお楽しみ下さい。では、明日の朝、礼拝堂に……」

その頃

ズグンッ

「くっ……う……ぐ……」

「あ、相棒……」

「……大丈夫よ、デルフ」

ルイズはバルコニーに出て、フェンスに寄りかかっていた。
身体から黒い霧のようなものが湧き出ている。

(なんでかしらね……この前、闇の魔法を使ってからおか
しかったけど、これは酷いわ……。戦場の空気に触発され
たのかしら)

こっぴどく、アルビオンでの一日は過ぎていった。

第12話 依頼(4) (前書き)

闇の魔法がオリジナル設定になっています。

第12話 依頼（4）

翌朝……

「さて、トリステインに戻りましょうか」

ルイズ達は鍾乳洞に作られた港の中に集まっていた。

「それにしても、こんな所に港があるなんてね」

キュルケが鍾乳洞を見渡し言う。 どうやら、この港は秘密の抜け道になっているらしい。 近くにはニューカッスルから疎開する人々が列をつくっている。

「そう言えば、ワルドとか言う奴はどうしたんだ？」

「ああ、それならばウェールズ様に話があるので、礼拝堂に来るよ
うに昨日言っていたのを聞きましたよ」

エヴァの問いに見送りの貴族が答える。

「変ね、私は何も聞いてないわよ……。 ちょっと行ってみ

ましよ。 嫌な予感がするの」

ルイズの言葉で一行は礼拝堂へと向かった。

一方………。

こちらは礼拝堂。 二人の男が話し合っている。

「それで、用事とはなんだい？」

「それが、……失礼とは思いますが、どうしてもいただきたい物がございました」

「なんだい？ こんな、今にも滅びそうな国にあるもので良ければ何か持っていてもいいが………」

「それでは、……あなたの命を」

訝しそうにしていたウェールズがその言葉を聞き、杖を構えようつとするが………

「がはッ」

ワルドの青白く光る杖が一瞬早くウェールズの胸を貫く。

「き、貴様……、反乱軍……、【レコン・キスタ】か……」

ウェールズの口から鮮血がどっと溢れる。彼は無念に顔を歪め床に崩れ落ちる。

「ありがたく、頂こう」

ワルドが笑みを浮かべたのと、ルイズ達が礼拝堂の扉を開けたのは、同時だった。

ルイズ達が礼拝堂に入ると、そこには床に赤い染みをひろげ、倒れ伏すウェールズと血のついた杖を持ちながら笑みを浮かべるワルドの姿があった。

「ワルド…… あなた、反乱軍だっタノネ」

胸を抑えながらルイズが呟く。

「そうとも。 いかにも僕は、反乱軍【レコン・キスタ】の一員さ」

ワルドは冷たい、感情の籠らない声で言った。

「昔は、ソンな風じゃなかったわ。 何があなたをかエタの？」

「月日と、数奇な運命さ。 今ここで語る気にはならぬ。 話せば長くなるからな」

ルイズの蒼白な顔を自分に恐怖したのかと勘違いしたワルドは再び杖を掲げる。

「本当なら、君が欲しかったんだが、こんなところを見られては従うまい……………。 残念だが死んでもらおう」

ワルドが呪文を唱える。

「……………ルイズ、お前」

エヴァが訝しげに呟くのとワルドの雷撃の魔法が迫って来るのは同時だった。

「【ライトニング・クラウド】！」

ガッ

「なにッ！？」

そこには直撃を受けたのにも関わらず、その場に立っているルイズがいた。良く見ると黒い霧が身体中から湧き出している。

「……………クロス」

周りに構わず衝撃波が生まれキュルケやタバサを吹き飛ばす。

「きゃっ！」

「……………っ！」

「……………チッ」

城を吹き飛ばすそうとしたルイズを間一髪でエヴァは外に投げ飛ばした。壁に大きな穴があく。

「おいキュルケ、タバサ。私はいつを正気に戻してくるから、そのバカはお前たちが相手をしろ。仮にも私の弟子なのだから、敗北などしないだろ？」

そう言い残し、エヴァはルイズを追い外に飛び出して行った。

「ふっ、良くわからんが好都合だな。あの使い魔からどう逃げようか考えていたところだったのだが」

「あんた、逃げられると思ってるの？ 一対一でも負ける気はないけど、二対一よ？」

突然のルイズの暴走に驚きながらも、キュルケは言った。杖を構え、ワルドは薄く笑う。

「ふん、ならば私の本気を見せよう。何故、風の魔法が最強と呼ばれるのか、その所以を教育してやる」

ワールドが呪文を唱えると、身体がいきなり分身し、本体を合わせて、五人のワールドがキュルケとタバサを取り囲んだ。

「風のユビキタス……」

「いかにも。風の吹くところ、何処となく現れ、その距離は意志の力に比例する」

タバサの呟きに答え、杖を構えるワールド。いつせいに、先程ルイズに放った【ライトニング・クラウド】を唱え始める。

「キュルケ」

「なに？」

「私が防ぐから本体を狙って。分身も私がやる」

「オツケー。あそこが一番離れてる奴ね」

タバサの提案をつけ、瞬時に本体を見抜くキュルケ。タバサは頷きながら、身長と同じ程の長さの杖を構える。

「『『『『『『『『』』』』』』』』」

「【アイス・シールド】」

五本の雷撃がキュルケ達に迫るも突然現れた氷の障壁に全て防がれてしまう。

「なッ！」

「はあああッ！」

驚いた一瞬の隙にキュルケはワルドの本体に迫る。

「くッ！」

反射的に突きを出すワルドだが僅かに顔をそらしただけで、キュルケは避ける。

「これでも、くらいなさいッ！」

渾身の魔力が籠った拳をくりだす。

「なめるなッ！」

当たる寸前でなんとか飛び退き、呪文を詠唱する。

「【ウィンド・ブレイク】！」

捉えたとワールドが思った瞬間、キュルケが瞬動で後ろに回り込む。常人には見えない程の速さだがワールドには見えたようだ。

「後ろかッ！」

振り向き様にウエルズを貫いた呪文【エア・ニードル】を唱え、切り裂こうとするが、キュルケも杖に【ブレイド】の魔法で赤い刀身の剣を纏わせ対抗する。

バチバチバチッ

魔力どうしが反発し、派手な音を立てて火花がちる。

「ぐッ」

魔力で身体能力を上昇させているキュルケの怪力に思わずよるける。十合、二十合と斬り結び合うも徐々に押されてしまつワルド。

(なんで、こんな娘にこんな力があるんだ……)

「考え事かしら？」

ワルドの一瞬の隙をつき、キュルケは死角に動いていた。鞭のような蹴りがワルドの脇腹に叩き込まれる。

「ぐあッ」

吹き飛ぶワルドにキュルケは追撃をかける。まともに入っていれば戦闘不能になっていただろうが、ワルドはとっさに自分から横に飛び、威力を弱めていた。

「とどめッ！」

低い位置から伸び上がるように振られた魔力刃がワルドを襲う。体勢を崩していたワルドは仰け反るように避けようとするも、かわしきれずに左腕が切り裂かれる。

「ぐッ……この【閃光】がよもや遅れを取るとは……」

「

ガガガガッ バキバキッ

「突かば槍、払えば薙刀、持たば太刀 杖はかきにもはずれざりけり……」

決めゼリフを言ってタバサが近づいてきた。

「さあ、終わりよ。 降伏しなさい」

「まあ、目的が一つ果たせただけでよしとしよう。 どのみちこころはすぐに我が【レコン・キスタ】の大群が押し寄せろ。 ほら！ 馬の蹄と竜の羽の音が聞こえてきただろう！」

確かに、外から大砲の音や火の魔法が爆発する音が聞こえてきた。 キュルケ達はその音に気をとられているうちに、ワルドは壁にあいた大穴の側に移動していた。

「しまッ」

「さらばだ！ 縁があればまた会おう」

そう言い残し、大穴からワルドは飛び去って行った。 見ると

グリフォンに乗って逃げている。

「しまった〜 これじゃ追いつけないわね。 . . . ルイズが心配だわ。 ここにいたら大群が押し寄せて来るし、探しにいきましようか」

キュルケの言葉にタバサは頷いて、口笛を吹いた。

「きゅいきゅいー!」

空からシルフィードが飛んで来る。

「行く」

その頃

「闇の魔法の副作用か ? 何故、今になって」

エヴァが呟く。 ここはニューカッスル城付近の森のなか。
いや、森だった場所と言っべきか。 辺りには破壊され尽くした森

と【レコン・キスタ】の一部隊が転がっている。

「適正の問題か？ いや、そもそも人間が闇の魔法を使うことに無理があつたか……」

エヴァの前には氷漬けになつたルイズがいた。魔獣のように爪が尖り、尻尾のような物まで生えている。

「ふむ、魔族化か……。自分に喰われるなよ、ルイズ。喰い尽くせ。喰われたら戻ってこれなくなるぞ」

ピキピキッ パリイイイン

氷の檻を突き破りルイズが再び飛び掛かつて来る。

「ガアアアアあッ」

ルイズは幻想空間で自分と闘っていた。すでに、体感時間で十時間以上闘っている。

「はあああッ！」

「ガアアアアッ」

場所はルイズの故郷。よく、魔法が成功せずに泣いていたルイズが逃げ込んでいた、小舟がある辺りだ。

「ワタシはゼロなんかじゃナイツ!!!」

「いい加減にしなさいよッ！ そんなことはとっくの昔にわかってるわ！」

周りを破壊しながら、ルイズとルイズはぶつかり合う。その余波だけで地面は割れ、大気が揺らぐ。

(トラウマは乗り越えたと思ってたんだけど……。どうやら心の奥ではまだ思ってたのかもね……自分がゼロだって。この世界に帰ってきて余計にその思いが膨れ上がったのかもね……未だに、こっちの魔法は使えないし)

「でもッ！」

「ガアアアアッ」

拳と拳がぶつかり合い、空気が破れる。

「私はあなた（私）を倒して……いえ、受け入れて、前に進むッ！」

ルイズがそう叫んだとき、ぶつかり合っていた拳同士が混ざり合い、ルイズとルイズが二つになっていく。混ざりあっていくうちに、わかってしまった。自分が人間から魔族に近づいて行くことに……

「……アリガトウ」

化け物と化していたルイズが口を開く。

「礼なんていらないわよ。あなたを心の底に閉じ込めていたのは私なんだから……」

世界が崩れていく。ルイズが自分を本当の意味で受け入れたからか……

「さて、戻りましょうか。あれからどうなったか気になるし」

そして幻想空間は消え去った。

「やっとか………?」

こちらは現実世界。エヴァの前には立ち尽くす魔族化したルイズがいた。

ズズズズ………

黒い霧がルイズを覆ったかと思うと、人間形態に戻っていく。

ドサッ

倒れるルイズ。エヴァが近づき、声をかけた。

「気分はどうだ?」

「………悪くないわね」

「そうか」

「……私、人間辞めちゃった」

「……そうか」

「後悔はないわよ？」

「……フンッ、そうか」

その時、空から風竜が飛んで来た。

「おーい、こんなところにいたのね」

キュルケが叫んでいる。降りて来た彼女はまずルイズに指輪を手渡した。

「はい」

「これは……【風のルビー】？」

「ええ、【レコン・キスタ】なんかより、姫様にあげたほうが喜ぶでしょ」

「気が利くわね」

エヴァがキュルケに尋ねる。

「ところで、ワルドはどうした？」

「……う、それが……」

「なにッ、逃がしただと？ ふふふ、どうやら修行を更にハードにするしかないようだな」

「え、それだけは勘弁してちょうだいよ」

ニューカッスルから離脱した、ルイズ達はシルフィードに乗ってトリステインの王宮を目指していた。ルイズは内在闘争のせい
か、随分とぐったりしている。

「ええッ！ 人間辞めちゃったってどう言うことよ!？」

「いや、まあ【闇の魔法】ってやつで副作用で……」

「……で？ 具体的にどう辞めちゃったの？」

「うーん、詳しくは調べないと分からないけど、とりあえず寿命が無くなったわね。あと、ちょっとやそつとのケガはすぐに治っちゃうわ。化け物の姿になることも出来るけど、これは怖いからあんまり使わないわね」

「……そう、でもあんた普段からデタラメだからね。それが凄くなったと思えばいいか……」

呆れた顔でキュルケが溜め息をつく。

「さて、さつさとこの手紙を姫様に届けて、一杯飲みにいきましょう。

【紅き翼・ハルケギニア支部】の初任務成功を祝って」

「なによ、それ」

「え？ 私達のチーム名」

「フツ、【紅き翼・ハルケギニア支部】か、面白い」

エヴァが苦笑しながら言った。

「なんで私とタバサが入ってるのよ」

「当たり前だろ、お前達は私の弟子なんだからな」

「……………ダメだったかしら？」

ルイズが捨てられた子犬のような目でキュルケとタバサを見る。

「……………はあ、良いわよ別に」

「良い」

「本当ッ！ やった！ これで私の夢に一步近づいたわ」

「夢？ どんな夢なの？」

興味を持ったキュルケがルイズに尋ねる。

「ふふふ、それはね……、何でも屋ギルドを作ることよッ、それも少数先鋭。 国家間の大事から町のペット探しまで、手広くやるわよ！」

ルイズがない胸を張って言った。

「……そう。 なかなか面白そうね」

「でしょ！ それでね……」

いつの間にか夢の話にすりかわった話はとまることなく続いた。ふと、ルイズは振り返った。

(ウエールズ皇太子、あなたの誇りは忘れません。 例え、誰もが忘れたとしても決して……)。 だから、安らかに眠って下さい。 【レコン・キスタ】をこのまま好きなようにはさせません。 どうか……)

遠ざかるアルビオン大陸を見上げ、黙禱を捧げる。 そして、一行はトリステイン王宮を目指したのだった。

第13話 伝説

無事、トリステイン王宮にたどり着いたルイズ達は警備の魔法衛士隊に囲まれていた。

「密命だから言えないのです」

「では、殿下に取り次ぐ訳にはいかぬ。要件も聞かずに取り次いだ日には、こちらの首が飛ぶからな」

ごつい体にいかめしい髭面の隊長が、困ったような顔で言った。すでに同じような問答を十分近く続いている。と、そこへ、鮮やかな紫のマントとローブを羽織った人物が顔を出した。

「彼らはわたくしの客人ですわ。隊長殿」

「……………さようですか」

「道中何があったのですか？ ……とにかく私の部屋でお話ししましょう。他の方たちには別室を用意します。そこでお休みになって下さい」

キュルケとタバサ、そしてエヴァを謁見待合室に残し、アンリエッタはルイズを自分の居室に入れた。

ルイズはこの次第をアンリエッタに説明した。

「そんな……、あの子爵が裏切りものだったなんて……。まさか、魔法衛士隊に裏切りものがあるなんて……。」

アンリエッタはかつて自分がしたためた手紙を見ながら、はらはらと涙をこぼした。

「皇太子はもとよりあの国に残るつもりでした。姫様のせいではありませんよ。」

「あの方は、私の手紙をきちんと最後まで読んでくれたのかしら……。ウエルズさまはわたくしを愛しておられなかったのね。」

アンリエッタのそんな言葉を聞いて、ルイズは彼女の両肩を掴んで揺さぶる。

「姫様ッ、その言葉は皇太子の思いを……貫こうとした誇りを……。いえ、彼からあなたに届け物があります。」

そうやってルイズは懐から【風のルビー】と一枚の手紙を手渡した。

「……………これは」

ぼんやりとした顔でルイズ見るアンリエッタ。

「皇太子から預かった【風のルビー】と……………魔法の手紙です」

「魔法の手紙……………?」

「はい。開いて見れば分かります。外に居るので、終わったら呼んでください」

「……………分かりました」

そうやって出ていくルイズ。アンリエッタが手紙を開いてみると……………

「これを読んでいると言っことは僕はやっぱり死んでしまったようだね」

「…………ツ、ウエールズさま」

そこには手紙から立体映像のように、浮き出るウエールズ皇太子がいた。

三十分後

呼ばれたルイズが部屋に入ると、そこにいたのは、先程までの弱々しい姫ではなく未熟ながら威風堂々とした王女の姿があった。

「ありがとう、ルイズ。あなたには感謝しても、しきれません」

「……………いえ」

「私は、ウエールズさまに恥ずかしくないよう、勇敢に生きてみようと思います」

決意が籠ったアンリエッタの言葉をルイズは聞いた。

(少しは王女らしくなったかしらね……………)

「ならば、私は手伝わせてもらいますよ……。なんて言っ
たって、友達ですからね」

「……本当にありがとう」

ルイズ達が帰還してから三日後に、正式にトリステイン王国王
女アンリエッタと帝政ゲルマニア皇帝、アルブレヒト三世との婚姻
が発表された。式は一ヶ月後に行われ、それに先立ち、軍事同盟
が締結されることになった。アルビオン新政府樹立の公布がな
されたのは、同盟締結式の翌日。両国の間には、すぐに緊張が走
ったが、アルビオン帝国初代皇帝、クロムウエルはすぐに特使をト
リステインとゲルマニアに派遣し、不可侵条約の締結を打診した。
両国は協議の結果これを受け入れ、ハルケギニアに表面上の平和
が訪れたのだった。

一人のスレンダーな少女が、肩を震わせていた。桃色がかっ
たブロンドの髪に、大粒の鳶色の瞳。ルイズである。

「ふ、ふふふ、ふふふふふ……」

ここはルイズの部屋。なにやら古ぼけた本を読みながら奇妙な笑い声を上げている。よこでゲームをしていた金髪の少女、エヴァが訝しげに尋ねた。

「…………どうしたルイズ？ その白紙の【始祖の祈祷書】とやらに、何か面白いことでも書いてあったか？」

結婚式の時、式の詔を読み上げる巫女にアンリエッタに選ばれたルイズは自分の机に座ってうんうん唸っていたのだが…………。

「…………ふふふ、私が伝説の系統か」

「……………はあ？」

「なんか書かれてるのよッ！ 虚無の系統ッ！ 私は始祖を越えたッ！ なんか、呪文とその説明も書かれてるわッ！」

「……………で？」

「え〜と、まず【エクスプロージョン】 広範囲を殲滅できるמידいだわッ」

「…………お前、広域殲滅魔法が使えたよな」

「…………あとは、【イリュージョン】　なんか幻影を作り出せるみたいだわ」

「作り出せたよな」

「…………それから、【世界扉】　思い描いた場所に転移出来るわッ！　世界も越えられるみたい」

「転移魔法が使えたよな。　また、他の異世界に行きたいのか？」

「…………大して使えないわね。　なんか燃費も悪いみたいだし…………」

先ほどまでの興奮は何処かに行ってしまったようだ。　せつかく自分の系統がわかったのに、その魔法が既に自分が出ることなんだから分からなくもないが…………

「あつ、もうひとつあった、【ディスプレイ】魔法を解除する魔法ね」

「ほ、魔法無効化能力みたいだな」

「……………と言っても、詠唱が長すぎだわ。 実戦じゃちょっとね……………。 やっぱり使えないわね」

「……………それより、詔はいいのか？ お前、そっちの才能無いんだから」

「ああッ！ 思い出させないでよ…！」

「……………数日が過ぎていった……………」

第14話 息抜き

見渡す限りの砂漠……。ここはトリスティンより遙か東、エルフ達が住む場所。ハルケギニアの人間からは【聖地】と呼ばれている。

なんの前触れもなく、突然、灰色の制服をきた白髪の青年が現れた。

「復活出来たのは僕達だけかな？ デュナミス」

「そのようだな」

いつの間にか、白髪の青年の横には黒いローブを纏った男が立っている。

「造物主はあの中か……。厄介な」

黒ローブが見つめる先には半透明の巨大なドーム状の結界が張られている。その中には巨大な石碑が突き立っており絶えず発光していた。

「……。紅き翼の奴らには手痛くやられたからね、復活出来ただけでも幸運だったよ」

「しかし、どうやってアレを破る？　いかに我々でも、少々難しいぞ」

「……………。どうやらここは異世界のようだ。　この世界をまわって、方法を探すしかないだろうね」

「……………いたしかたあるまい。　全ては造物主の復活の為だ」

黒ローブの男がそう言ったとき……………

「そこに居るのは誰だッ！」

線の細い雰囲気の若いエルフの男が近寄ってきた。　エルフがその場所に着いたときには、白髪の青年も黒ローブの男も、最初からいなかったかのように姿を消していた。

「もっツッ！　誰もいないじゃない、アリィー」

金髪の少女が後から着いてきた。

「…………おかしいな、確かに気配がしたハズなのに」

「もういいわ！ 統領に呼ばれてるんだから、早く行くわよ」

アリイーを置いてきぼりにして、金髪の少女は行ってしまふ。

「ああッ、待ってよ、ルクシャナ！」

後に残ったのは、照りつける日差しに熱せられる砂漠の砂だけだった…………。

一方こちらはトリスティン魔法学校。今は昼時のようだ。
ルイズはいつものメンバーで昼飯を食べている。

「で？ 詔の出来映えはどうなのよ、ルイズ？」

キュルケの言葉に顔をしかめるルイズ。

「うっ、…………ま、まあまあかしらね」

「あーそう、なんか授業中も全然集中できてないみたいだったけど？」

「……。。 まだ出来てないわよ。 悪かったわね、私に詩心がなくてッ！」

「ふうん、まだ出来てないんだ。 結婚式まであと二週間ぐらいよ？ 大丈夫なのかしら？」

「ぐッ」

ルイズは結婚式で変な事を言う自分を思い描いて、心に致命的なダメージを受けた。

「そんなあなたにはこちらッ、私たちと一緒に宝探しツアーなんていかがでしょうか？」

なにやらキュルケが地図を何枚もひろげはじめた。

「……いいかもね、気分転換でいいアイデアが思いつくかもしれないし。 まあ、授業はいいか。 退屈なだけだしね」

「あッ、それなら私も連れて行って下さい！」

何処からともなくシエスタが現れて言った。

「もう、酷いですよ！ なにか手伝えることがあったら、何でも言っ
て下さいねって言ったのに、この前は置いてきぼりなんですから」

「あゝ、この前は悪かったわよ。何も言わずに行っちゃって。

でも、メイドの仕事とか大丈夫なの？」

「コック長に『エヴァさんの手伝いをする』って言えば、大丈夫です！
なんて言ったって、エヴァさんはコック長と、飲み仲間ですから」

ルイズがエヴァにその事を聞くと

「ああ、あいつはなかなか良い奴だよ。オマケに料理の腕もいい
しな」

と、返してきた。

「じゃあ、皆で行きますかね。ところで」

「何よ」

「もし宝が見つかったら、分け前は、私が半分、残りを皆でわけてね！」

「ふざけんじゃないわよ？　どうやら詔を考え過ぎて、頭がおかしくなっちゃったみたいね」

その後、しばらく分け前の話で揉めたが、結局、平等に分けることになったのだった。

「じゃあ準備して。　そうと決まったら出発よ！」

ルイズ達は打ち捨てられた開拓村の寺院に来ていた。　どうやらそこはオーク鬼の住みかだったようだ。　体長二メートルほどの二本足で立った豚のような化け物だ。　ルイズ達はそのオーク鬼に襲われて……いや、襲っていた。

「シエスタ、そっち行ったわよ」

「はい、……せいやッ！」

シエスタの拳とオーク鬼の棍棒がぶつかり合う。すると、吹き飛んだのはオーク鬼の方だった。

「ぶぎい！　びぎっ！　んぎいいッ！」

「【疾空・黒狼牙】！」

数十匹の狼をかたどった、影のかたまりが、オーク鬼の命を刈り取る。

「【浄化の剣】！」

「【魔法の射手　氷の二十九矢】」

「【アイス・ストーム】」

「【フレイム・ボール】！！！」

ドゴオオオンッ

数十匹のオーク鬼がルイズ達を囲っていたのだが、五分もせず
に全滅した。

ルイズ達は昼飯を食べることにした。

「だ〜、偽物ばかりね〜。これで七件目じゃないのよ」

ルイズが言うのも無理はない。見つかるのはせいぜい銅貨
が数枚なのである。

「仕方ないですよルイズさん。宝の地図なんて、大体が偽物なん
ですから」

「じゃあ次で最後ね、……………これなんてどうかしら？」

「なにになに……………」

ルイズはキュルケの出した地図を覗く。

「竜の羽衣？」

「ゴホッ　ゴホッ」

ルイズの言葉になぜかシチューを食べていたシエスタが咳き込む。

「そ、それホントですか？」

「なによあなた。知ってるの？　場所は、タルブの村の近くね。タルブってどこら辺なの？」

「ラ・ロシエールの向こうです。　広い草原があって……、わたしの故郷なんですよ」

翌朝、一行はシルフィードに乗って、タルブへと向かった。シエスタによるとインチキな、名ばかりの【秘宝】らしいが、とりあえず見に行こうと言うことになったのだ。

「……………これが空を飛ぶの？」

「……………さあね」

ルイズとキュルケがいぶかしげに【竜の羽衣】を見る。　タバ
サは好奇心を刺激されたのか興味深そうに見ている。

「ああ、それは飛ぶぞ」

エヴァが言った。

「たしかルイズが跳ばされた世界と繋がっている旧世界の方で使われていた飛行機械だったと思うぞ」

「へー、ってなんでそんなものがここにあるのよ？　それにこつちの一日は向こうの十年なのよ？　良く考えたらそんな昔に機械なんてないでしょうが」

「そんなこと私に言われても知らんわ。　世界を渡る時に、なんかズレが生じたりするんじゃないか？」

「……………」

沈黙するルイズにキュルケが話しかける。

「まあ、良いじゃないの。珍しいものが見れたんだし。細かいことは気にしちゃダメよ?」

「それもそうね」

その日はシエスタの実家に泊まることになった。

「そろそろ学院に戻ろうかしらね」

キュルケが言った。

「もう、一週間経ったんだ……。あゝ、結局、詔がまだ出来てないわ」

ルイズが頭を抱えて暴れます。そんなルイズを見かねたのか、タバサが言った。

「手伝う」

「しょうがないわね。なんて言ったって、トリスティンとゲルマ

ニアの同盟なんだから、失敗される訳にはいかないわ」

「……………タバサ、キュルケ……………あんた達は命の恩人よ」

「大袈裟ね」

こうして、ルイズ、タバサ、キュルケ、エヴァ、シエスタによる詔創作作戦が夜を徹して進められたのだった。

翌朝

「な、なんとか形にはなつたわね」

キュルケが目を半分閉じながら言った。

「みんな、本当にありがとう……………。今日、学院に帰ろうかと思っただけど、明日にしようかしらね……………」

ルイズの提案に全員頷き、早速ベッドに直行した。ひとつのベッドを奪い合う醜い争いが、この後起きたとか起きなかったか……………

第15話 侵攻

トリステイン魔法学校に、アルビオンの宣戦布告の報が入ったのは、結婚式を二日後に控えた朝のことだった。

ルイズとエヴァは魔法学校の玄関先で、王宮からの馬車を待っているところであった。ゲルマニアヘルイズたちを運ぶ馬車だ。キュルケとタバサもついて行くつもりらしく、シルフィードに乗り、待機している。しかし、朝もやの中、魔法学校にやって来たのは息せききった一人の使者だった。

彼はオスマン氏の居室をルイズたちに尋ねると、早足に駆け去って行った。王宮で何があったのだらうと気になったルイズたち四人は、使者の後を追ったのだった。

昼を過ぎた。王宮の会議室には次々と報告が飛び込んで来ていた。

「タルブ領主、アストン伯戦死！」

「偵察に向かった竜騎士部隊、帰還せず！」

「未だアルビオンより、問い合わせの返答ありません！」

「残りの艦をかき集める！ 全部！ 全部だ！ 小さかろうが古かろうがなんでもいい！」

「特使を派遣しましょう！ 攻撃したら、それこそアルビオンに全面戦争の口実を与えるだけですぞ！」

一向に会議はまとまらない。マザリーニも、結論を出しかねていた。未だ彼は、外交での解決を望んでいるのであった。

怒号が飛び交う中、アンリエッタは、薬指に嵌めた【風のルビ】を見つめた。ウェールズの形見の品だ。それを自分に託した唯一の親友の顔を思い出す。

（こんなことでは、ルイズやウェールズさまに笑われてしまいますね。それに、このまま指をくわえて見ているだけでは、あのときの勇敢に生きると言う誓いを破ってしまいますね……）

「タルブの村、炎上！」

その急使の声で、考え込んでいたアンリエッタは我に返った。

「あなたがたは、恥ずかしくないのですか」

「姫殿下？」

「国土が敵に侵されているのですよ。同盟だなんだ、と騒ぐ前にすることがあるでしょう」

「しかし……、姫殿下、誤解から発生した小競り合いですぞ」

「誤解？ どこに誤解の余地があるのですか？ 礼砲で鑑が撃沈されたなど、言いがかりも甚だしいではありませんか」

「しかし……」

アンリエッタはテーブルを叩き、大声で叫んだ。

「あなたたちは怖いのでしょうか。なるほど、アルビオンは大国。反撃をくわえたとして、勝ち目は薄い。責任をとらされるであろう、反撃の計画者にはなりたくないと言っているのですね？」

「姫殿下」

マザリーニがたしなめる。しかし、アンリエッタは言葉を続けた。

「ならばわたくしが率いましょう。あなたがたはここで会議を続けなさい」

アンリエッタは会議室を飛び出し、宮廷の中庭で叫んだ。

「わたしの馬車を！ 近衛！ 参りなさい！」

アンリエッタは誓いに従い、勇敢に生きる道を選んだのだった。

そのころ魔法学校では学院長室の扉に張り付き、聞き耳を立てていたルイズ達が戦に向かう準備をしていた。

「さて、準備はいいわね」

ルイズの言葉にキュルケ、タバサ、エヴァ、シエスタが頷く。

「これから私たちが行くところは戦場よ。……最悪、死ぬかもしれないわ。強制はしないわよ？」

「水くさいわよルイズ。　ここまで来て引き返したら、私じゃないわ」

「行く」

「私も行きますよッ！　自分の故郷が襲われていて、黙ってはいられません」

「フンッ　まったく、お前といると、本当に飽きんな」

ルイズはやれやれと首をふり、言った。

「それじゃあ……、勝ちに行きますか」

ルイズ達がタルブに転移すると、そこは無惨な戦場に変わり果てていた。草原には大部隊が終結し、港街、ラ・ロシエールにたてこもったトリステイン軍との決戦の火蓋が切られるのを待ち構えていた。

「先ずは、そこら中に飛んでいる羽虫を落としましょうか」

一緒に転移してきたシルフィードに乗りながら、ルイズが言っ

た。

「落としましようかって、百匹はいるはわよ？」

「問題ないでしょ。むしろ少ないわね。私たちを止めたいなら、
これの十倍はいないと」

そのとき、こちらに気づいたのが、近づいて来る。

「まずは、一匹目」

「風竜一匹とはなめられたものだな」

竜騎士が相棒の竜にブレスを命じる。

「三匹目だ」

次の瞬間、光の奔流に呑み込まれ、竜騎士は意識を失った。

味方の竜騎士が撃墜されたのをみた他の騎士たち、ルイズ達に向かって来る。

「ふふふ、敵は選り放題みたいね」

ルイズの呟きに、キュルケが答える。

「なに、余裕かましてんのよ。行くわよ!」

そう言うと、キュルケはシルフィードの背中から、【フライ】で飛び上がった。タバサもそれに続く。

「【ファイヤ・アロー】ッ!!!」

キュルケの周囲に数個の火の玉が浮かんだと思うと、凄まじい速度で竜騎士たちに向かって飛んで行った。

「あれ? いつの間に、【フライ】と他の呪文が同時に使えるようになったの? それに、今の魔法って……」

二つの魔法を同時に使うのは至難の技なのである。

「ああ、それ? あの、地獄の修行の成果ね。あと、あんた達が使う【魔法の射手】、だっけ? それが応用がいろいろ効いて便利

そうだから、エヴァにちょっと考えてもらったのよ」

「ふん。まあいいわ。どんどん来るから、気を抜くんじゃないわよ？」

「それはこっちのセリフよ！」

そう言っているうちにも次々に竜騎士を撃墜していくルイズ達。

「はあああッ！ 【疾空黒狼牙】！」

シエスタは両足に黒い車輪のようなものを着けて、縦横無尽に空を飛び回る。

「フッ、相手が悪かったな」

エヴァは口の端をつり上げながら、無詠唱で十メートルはあるうかと言う、鋭く尖った氷の柱を何本も作り出し、投擲していく。

「【アイス・アロー】」

タバサも追尾効果のある魔法の射手を連発し、撃墜していく。

「みんなやるわね。それじゃあデカイの一発いこうかしらね」

そう言っつて、ルイズは呪文を詠唱しはじめた。

「契約に従い我に従え 高殿の王 来たれ 巨神を滅ぼす 燃え立つ雷霆」

ルイズの周囲に雷が生まれる。

「百重千重と重なりて 走れよ稲妻！」

異常を察知したのか、詠唱を止めようと、竜騎士たちが迫るがもう遅い。

「ナギ、得意技借りるわよ！ 【千の雷】！！！」

ドオオオオオオオオオ

ルイズが手を振り降ろすのと同時に広範囲雷撃殲滅魔法がとき放たれた。視界に映る限りの竜騎士たちが黒こげになって墜落していく。

「あゝ、久々に大魔法使ったわ」

肩を叩きながら、ルイズが振り返ると、キュルケ達が呆然としていた。

「……………おい お前、【千の雷】も使えたのか？」

「あれ？ エヴァは知らなかったっけ？ 私は全属性の魔法が使えるわよ。 まあ、得意なのは光と闇だけど」

「……………」

こうしてタルブ上空にいた竜騎士、百五十騎は十分に撃墜されたのだった。

「さて、次はあの艦隊ね。 こっからが本番よ！ みんな、気合い入れてね！」

ルイズは前方に見える戦艦を見据え気合いを入れた。

「全滅だど……、わずか十分の戦闘でか？」

鑑砲射撃のため、タルブとラ・ロシエールの間位置する場所、上空三千メートルに遊弋していた『レキシントン』号の甲板で、トリスティン侵攻軍司令官、サー・ジョンストンは伝令からの報告を聞いて顔色を変えた。

「はい。先ほどの落雷でほとんどが撃墜されてしまいました」

「……なんなんだ一体。あれは敵の攻撃なのか？」

「……」

ラ・ロシエールの街に立てこもったトリスティン軍は浮き立っていた。つい先ほどまで何百発もの砲弾が、自分達を襲い、瓦解しかけていたのだが、タルブの方向で落雷が落ちたかと思うと、砲弾がやんだのだ。

「一体何があったのでしょうか？」

アンリエッタがマザリーニに問い掛けるも彼は首をふる。

「わかりません。しかし、敵も予期しないことが起きたのは確かでしょう」

ルイズ達は敵の艦隊に向かっていった。何故か皆、大人の姿に変装している。

「それにしても、それがあなたの本当の姿なのよね」

キュルケがからかうように言った。

「えーそーですよ。どうせ、胸は大きくなりませんでしたよー」

目の端に光るものが見えたのは気のせいだろうか。

「来る」

タバサの言葉と同時に、シルフィードの周囲に展開していた障壁に何かがぶつかった。

「散弾ね。その程度じゃ、私の障壁はビクともしないわよ。せめて砲弾が直撃でもしないと」

「さっきの魔法と言い、本当にデタラメね」

キュルケが呆れたように呟く。そうしている間にも散弾が当たっているが、すべて障壁に弾かれる。

「まあいいわ、それよりショータイムよ！」

「ざっと見た感じ、大小合わせて、五十隻くらいかしらね」

ルイズとキュルケが話していると、エヴァが言った。

「まずは、小さいのから落としていくか」

そう言って、エヴァは魔法の射手を艦隊に打ち始める。

「さうして、ラ・ロシエール防衛戦の始まりよッ！」

ルイズの言葉で各々が戦艦に攻撃を始めた。

「どんどんいくわよッ！ 光の精霊千一柱 集い来たりて敵をうて
【魔法の射手 光の千一矢】！」

瞬く間に戦艦が半分以下になっていく。 敵の艦隊も反撃しようとするが、シルフィードのスピードを捉えることが出来ない。

「さて、こんなもんかね。 最後に広範囲殲滅魔法をもう一発いってどうかしら。 こっちの戦艦って障壁ないから、デカイ的なよね。」

ルイズの指示で、一番大きな戦艦、『レキシントン』号の真上にシルフィードは向かった。 そのとき……

「来たわね」

ルイズの言葉にキュルケ達が後ろを見ると、一騎の竜騎士が、烈風のように向かってくる。 ワルドであった。

「ルイズ……か？」

「しぎげんよう、ワルドさま。悪いけど、ウェールズ皇太子の仇をとらせてもらつわ」

そう言つて、シルフィードから降り、浮遊するルイズ。背中
に背負つたデルフを抜く。

「相棒ッ！　なんか最近、出番少なすぎじゃないかッ？」

「うるさいわねッ、だって素手のほうが早いじゃない。それにこ
うやって締めで使つてあげるんだから、文句言うんじゃないわよッ
」！

「……………ッ！」

ルイズが剣を抜いたと思つたら言い争いを始め、呆れかけてい
たワルドだが、次の瞬間、ルイズが消えた。

「それじゃ、さようなら。　ワルド」

神鳴流　　雷光剣

「ぐあああッ」

雷を纏った剣が、ワールドを袈裟斬りにし、彼は竜と共に墜ちていった。

「…………ふんッ」

ルイズは何かを振り払うかのように首を振ると、呪文詠唱を始めた。

「契約に従い 我に従え 混沌の英雄 来たれ 始原の胎動 滅びの衝撃 湧き出でろよ 天地を産み出し虚無の光 破壊は再生 再生は破壊なり 【揺らぐ大気】！」

この魔法は光と闇が得意なルイズが独自に編み出した、広範囲殲滅魔法である。ルイズは掌を『レキシントン』号に向けた。宙の一点が歪んだと思うと、不可視の衝撃となり、周りを巻き込んで、球体状に破壊の嵐を巻き起こす。

ゴゴゴゴゴッ

余波が収まると、そこにあったハズの『レキシントン』号は跡形もなくなっていた。

アンリエッタは信じられない光景を目の当たりにした。今までさんざん自分達を苦しめた艦隊が……一瞬にして吹き飛んだのだ。

地鳴りを立てて、艦隊は地面に滑り落ちた。

「諸君！ 見よ！ 敵の艦隊は滅んだ！ 伝説の竜によって」

「で、伝説の竜だって？」

動揺が走る。

「さよう！ あの空飛ぶ翼を見よ！ あれはトリステインが危機に陥ったときにあらわれるという、伝説の竜ですぞ！ 各々がた、始祖の祝福は我らにあり！」

すりとおちらこちらに歓声が漏れ、すぐに大きなうねりとなった。

「うおおおおっ！ トリステイン万歳！ 伝説の竜万歳！」

アンリエッタはそっとマザリーニに尋ねた。

「枢機卿、それはまことですか？ 伝説の竜など聞いたことがあります」

「なあに、嘘か真かなど誰も気にしませんよ。気にしているのは生きるか、死ぬかですぞ。つまり、勝ち負けですな」

マザリーニはアンリエッタの目を覗きこんだ。

「使えるものは使う。政治と戦の基本ですぞ。覚えて起きなさい殿下。今日からあなたはこのトリスティンの王なのだから」

アンリエッタは頷いた。

「殿下。では勝ちに行きますか」

アンリエッタは再び頷くと、水晶の光る杖を掲げた。

「全軍突撃ッ！ 我に続けッ！」

「さてと。 終わったわね……」

ルイズが溜め息まじりに言った。

「もう呆れるしかないわね。 なんてデタラメな……ってどうかしたの？」

キュルケがルイズの溜め息に気付き、問い掛ける。

「いやね、これから面倒なことになるかもなと思ってね……私の力は一国が持つには大き過ぎるかもしれないわ。 むこうではこんなこと無かったのに……」

「……どう言うこと？」

わからないらしいキュルケにエヴァが説明する。

「つまりだな、この力がバレると、こいつの力を狙って、各国の上層部が動き出すかもしれないと言うことだ。 他の国だけじゃなく、この国でも危ないかもな。 あの小娘が王女なんだろう？」

「私は友達を信じるわよ。 でも、他の貴族は違つかもね。 まあバレないように今まで以上に注意しないとね。」

バレたらバレたで、言いなりになるつもりはないけど」

「あんたバカね。それじゃあ何でもつと分かりにくい変装しなかつたのよ？」

「……………」

「大人の姿じゃ、怪しまれるかもよ？ バカでしょ」

「……………かはっ、変装したときはそこまで考えてなかったのよ……………」

そんなことを言っているとシエスタが割り込んでくる。

「さっきから聞いてましたが、それなら早くここから離脱したほうがいいんじゃないですか？」

「それもそうね。じゃあ帰りましょうか」

こうしてシルフィードに乗った一行はルイズの転移魔法で学院に戻って行った。

第16話 女王

アルビオンの侵攻から一週間がたった。

トリステインの王宮で、アンリエッタは客を待っていた。

戴冠式が終わり、正式に女王となってからは朝から晩まで国内外の客の接客が続いていた。

しかし……、今度の客はそのような作った表情と態度を見せないですむ相手だった。部屋の外に控えた呼び出しの音が、アンリエッタに客の到着を告げる。入って来たのはルイズとエヴァだった。

「久しぶり、姫さま、いや、もう女王さまですか……」

「いえ、いつも通りでいいですよ。他人行儀は嫌ですから」

「ならば、いつものように、姫さまと呼びますよ」

「そうしてちょうだい。ああルイズ、女王になんてなるんじゃないな
かったわ。 退屈は二倍。 窮屈は三倍。 気苦労は十倍よ」

アンリエッタはつまらなそうに呟いた。ルイズは黙ってアンリエッタの言葉をまっただが、なにも言っていないので、当たり前障りなく言った。

「このたびの戦勝、おめでとつございます」

「ふふ、ありがとうルイズ。ところで、いつの間にあんなに凄い魔法が使えるようになったの？」

「はい？ まあ、あの程度なら……っつて！」

ルイズは顔をひきつらせた。エヴァはこんな初歩的な誘導尋問に引っかけたルイズに首を振りながら溜め息をつく。

「やっぱり、あなただったのね」

「さ、さあ何のことやら」

ルイズはとぼけようとするも、アンリエッタが微笑みながら手渡してきた報告書を見て、溜め息をつく。

「さすがにバレましたか」

「あれだけ派手な戦果をあげておいて、隠しとおせるわけがないじゃないの」

それからアンリエッタは、今まで蚊帳の外だったエヴァの方を向いた。

「あなたも、多くの竜騎士隊を撃滅したとか。厚くお礼を申し上

げますわ」

「ふつ、なに、そこまでのことはしてないさ。それに、私はルイズの使い魔だからな」

「本当に大きな戦果ですわ。ルイズ。あなたと、その使い魔、そして仲間たちが成し遂げた戦果は、このトリスティンはおるか、ハルケギニアの歴史でも、類を見ないほどのものです。ルイズ、あなたは一体……」

ルイズはアンリエッタに見つめられ、溜め息をついた。

「……もう、しょうがないですね。私も隠し事は上手くないし、早いか遅いかでしょうからね」

そう言って、ルイズは始祖の祈祷書のことを語り始めた。

「……それでは、あれは【虚無】の魔法なのですか？」

ルイズは考えた。ここで本当のことを話してもいいと……

(……なるようになるわよね。嘘をつくのはなんか嫌だし)

「実は、あの魔法は【虚無】ではありません」

「 ……え? 」

ルイズがやるうとしていていることに気付いたのか、エヴァが問い掛ける。

「 いいのか? 」

「 まあ、なるようになるでしょ 」

「 どう言っているんですか? ルイズ? 」

ルイズは目をつむったあと、アンリエッタを見た。

「 本当は教えようか迷っていたのですが …… 友達だと信じ
て教えますね 」

「 ……わかりました。お願いします 」

アンリエッタが頷くと、ルイズは呪文を唱え始めた。

「ムーサ達の母　ムネーモシユネーよ　おのがもとへと　我らを誘え」

「ル、ルイズ。　これは？」

足元に現れた魔方陣に驚き、アンリエッタは狼狽した。

「ふふ、少し記憶に付き合ってもらいますよ」

「……………」

アンリエッタが気が付くと、辺りは鬱蒼としげる森だった。ちなみに服はちゃんと着ている。その辺は、ルイズの腕といったところか。

「……は、最初の使い魔召喚で私が跳ばされた場所です」

いつの間にかアンリエッタの横にルイズに似た、大人の女性が立っていた。エヴァもいる。

「……ルイズ、よね？ どうしたのその姿」

「実はこっちが本当の姿なんですよ」

『もっツ！ ここは何処よッ！』

そんな声にアンリエッタが振り返ると、そこにはルイズがいた。

「ルイズ」

アンリエッタが触れようとすると、まるで幽霊みたいに通り抜けてしまった。

「ちなみにここでは物に触れませんからね」

「一体ここは何なんですか？」

「ふふふ、私の記憶ですよ。 使い魔召喚の直後ですかね」

『きゃあああッ』

アンリエッタが話をしていると、記憶の方のルイズが巨大な竜に襲われている。

「ああッ！ ルイズが！」

「大丈夫ですよ」

カツ　ゴゴゴゴゴゴッ

突然、空から雷が降ってきて、竜を倒してしまった。すると赤毛の、まだ少年といってもいいような男の子が降りてくる。

『よう、嬢ちゃん。』

「こんなところでなにやってんだ？」

「………彼は？」

「あの人は、私の恩人であり、師匠でもある。　この世界の英雄、

【千の呪文の男】 ナギ・スプリングフィールドですよ」

「こんなことがあったのですか……。 ルイズ、あなたは……」

「まあ、大分要約しましたが、こんなところですね」

ルイズが異世界へ飛ばされてから帰ってくるまでをかなり要約されたが、垣間見たアンリエッタ。

「……これはルイズ、あなたに対するみかたを考えなければなりませんね。 救国どころか、救世の英雄達の仲間だったとは……」

ルイズはきっぱりと言った。

「姫さま。 私は自分が信じるもののために、この力を使います。 姫さまが道を誤らないかぎり、力をかしましょう」

「ありがとう、ルイズ。 あなたは一番の友達。 どうか私が道を

外れようとしたら、叩いてでも正気にもどして下さいね」

「当然です」

「ルイズ、これだけは約束して。決して【虚無】と異世界の魔法の使い手だということを口外しませんように。あなたの力なら大丈夫でしょうが、用心にこしたことはありません」

「わかりました」

「あなたにはわたくし直属の女官になってもらいたいのです……
・ 共にこの国をより良くしていきましょう」

220

「……わかりました。なにかようがあれば報せをください。
私たち【紅き翼・ハルケギニア支部】が全力でサポートしましよ
う」

アンリエッタは羽ペンをとると、さらさらと羊皮紙になにかをしたためた。それから羽ペンを振ると、書面に花押がついた。

「これをお持ちなさい。わたくしが発行する正式な許可証です。
自由がなければ仕事もしにくいでしょうから」

ルイズは礼をして許可証を受け取ったのだった。

「ふふふっ、同い年かと思っていたら、いつの間にか抜かされていたのね」

「もう、からかわないでくださいよ」

二人は笑いながら、握手した。

「これからよろしく願いしますね」

「じちらこそ。 お願いします」

第17話 秘密(前書き)

ご指摘ありがとうございます。

参考になるので、ご意見がありましたら、感想をお願いします。

第17話 秘密

「タバサ、ほら見て！　すごい！　牛よ！　ほら！　あんなにたくさん！」

キュルケとタバサ、そしてルイズとエヴァは馬車に揺られて魔法学校から延びた街道を南東にくだっていた。

「それにしてもものどかね」

「たまにはこう言うのもいいかもな」

ルイズとエヴァが王宮から帰ってくると、ちょうどキュルケとタバサが馬車で出かけるところだったのだ。　聞くと、タバサの実家に行くとのことだったので、ルイズたちもついてきた。

「ねえ、タバサ。　せっかく学校さぼって帰省するんだから、もっとはしゃいだ顔をしなさいよ」

キュルケが話し掛けるも、タバサは見向きもしない。　相変わらず本を読んでいる。

ルイズとエヴァが王宮に呼ばれている間、キュルケはタバサの部屋に遊びに行った。　驚いたことに、タバサは荷物をまとめてい

るところだった。旅行？ と、キュルケが尋ねると、タバサは実家に帰ると答えた。いつもの無口なタバサだったが、その様子になにか感じるところがあったキュルケはついてきたのだった。

「あなたの国がトリステインじゃなくて、ガリアだって初めて知ったわ。あなたも留学生だったのね。なんでまた、留学してきたの？」

キュルケが尋ねるも、タバサは答ええない。じつと本を見ている。そのとき、キュルケは本のページが発したときから変わっていないことに気がついた。

（観光気分だったけど、これは何かあるかもしれないわね……）

国境まで二泊して、ゆるゆると四人旅は続いた。関所でトリステインの衛士に通行手形を見せて石の門をくぐると、そこはガリアだった。石門を挟んで、ガリアの関所があった。そこから出てきたガリアの衛士に交通手形を見せる。

「ああ、この先の街道は通れないので、迂回して下さい」

と、言いにくそうに衛士が告げた。

「どう言ひなすか？」

キュルケが尋ねる。

「ラグドリアン湖から溢れた水で、街道が水没してしまったんです」

ラグドリアン湖はガリアとトリステインの国境沿いにある、ハルケギニア随一の名勝と名高い大きな湖だ。

それから三十分ほどでタバサの実家が見えてきた。

「お嬢様、お帰りなさいませ」

執事であろう老人が出迎えた。やがて屋敷の玄関が見えてきた。そこに掲げられているのはまがうことなきガリア王家の紋章。しかし、その紋章には大きな×印の傷が刻まれていた。

「ちょっと用事がある。 後で」

「皆様はごちらへどうぞ」

中に入つてすぐ、タバサは一行から離れ、残りの面々は老執事の案内で、客間に通された。屋敷は大きいのに、まるで物音がしない。どうやらほとんど人がいないようだ。

「申し遅れました。私はこの屋敷の執事務めております。ペルスランと申します。皆様はシャルロットお嬢様の御友人であらせられるのですか？」

「ええ、私はキュルケ・フォン・ツエルプストー。タバサの親友で、他の皆も仲間よ」

一番仲のいいキュルケが返事をした。

「そうですね……。お嬢様は【タバサ】と名乗っているのですか」

溜め息をつく執事。

「なんである子は、偽名を使って留学してきたの？ なにも話してくれないのよ」

「……わかりました。お嬢様が心を許す方々なら、構いま

すまい」

そうしてペルスランは深く一礼すると語りだした。

王家の争い　その間で心を狂わされた母親　そんな相手に母のために仕えるタバサ……シャルロットの話を

扉が開き、タバサが入ってきた。　意外にも最初に話し掛けたのはエヴァだった。

「話は聞いた。　タバサ、お前に慰めは必要か？」

「……………　　必要ない」

「……………そうか。　ならば私は力をくれてやろう。　どうするかはお前次第だ」

ルイズはエヴァの会話を聞き、黙って考え込んでいる。　すると、ペルスランが一礼して、苦しそうな表情を浮かべ、懐から一通の手紙を取り出した。

「王家からの指令でございます」

タバサはそれを受けとると、無造作に封を開き読み始めた。

「いつごろから取りかかられますか？」

「明日」

「かしこまりました。……御武運をお祈りいたします」

そう言い残し、ペルスランは厳かに一礼し、部屋から出ていった。

タバサは一行の方を向く。

「ここで待ってて」

これ以上はついてくるなど言いたいのだろう。しかし、一行は首を横に振った。

「あなたは【紅き翼】の一員よ。……私は仲間が困っているのに、何もしないほど腐っちゃいないわ」

「そうよ。それに、ここで引いたら、私は胸を張ってあなたの友達と言えないわ」

「……………危険」

そう言っつて俯くタバサにルイズが言った。

「ふふ、一緒に戦場まで行っつておいて今さらよ」

「……………ありがとう」

下を向きながら、タバサは呟いた。

「そつだ、病状を見せてもらっつてもいい？　もしかしたらどうにか出来るかもしれないわ」

ルイズの言葉に下を向いていたタバサは顔をあげた。

「大気よ　水よ　白霧となれ　彼の者等に一時の安息を　【眠りの霧】」

眠りをもたらす霧が発生し、青い髪の女性を眠らせた。

「……………どう?」

タバサが僅かに期待のこもった目でルイズを見る。

「うーん、混乱を抑えることは出来ると思うんだけど……………記憶がね……………、エヴァはどう?」

「……………私でも完治は難しいな。せめてどんな薬が使われたのかわからんと」

どうやらルイズでも完治させることは出来ないらしい。タバサは無表情だが、どこことなく落ち込んでいるようだ。

「安心しなさい。私のプライドにかけても、あなたの母親は治すわ。諦めたらダメよ」

そうして部屋から出ていく一行だが、最後にタバサが何かを呟いた。

「あなたの夫を殺し、あなたをこのようにした者共の首をいずれここに並べに戻って参ります。その日まで、あなたが娘に与えた人

形が仇どもを欺けるよう、お祈り下さい」

この眩きを聞きとれたのはエヴァだけだった。

「さてと、任務の確認だけど、この増水を止めればいいのね？」

「そう」

「どつする？ この湖全体を攻撃すれば、水の精霊とやらが出てくるか？」

そう言って、何やら唱え出したエヴァをルイズが止める。

「契約に従い 我に従え 氷の女王 来たれ とこしえのや・・・
・むぐ」

「いやいやいや、そんなことしたら出てきても、お願い聞いてくれないでしょうがッ！」

「でも、どうするの？ 水の精霊を退治しないと、タバサの立つ瀬がないし……」

「キュルケまで……。なんで闘うのが前提で話してるのよ？」

苦笑まじりの溜め息をつき、ルイズは言った。

「なによ？ あんたにはいい案があるの？」

「そうだぞルイズ。私は泳げないんだ。その辺考えてるよな？」

そんなキュルケとエヴァにタバサも加わる。

「私が風で空気の球体を作る。それで湖に入って、キュルケ達が攻撃」

「いい案ね！ さすがタバサ」

「当たり前だろキュルケ。何てったって、この私の弟子なんだからな」

そんな三人を見かねたのかルイズが湖に近づきながら言う。

「あゝも、だからなんで闘うのが前提なのよ？ 交渉しなさいよ、交渉！」

「はあ？ どうやって？」

「どろちゃってって、ころちゃって」

そう言つと、ルイズは湖に腕を突っ込んで魔力を通しはじめた。

「ちよつ、バカ、あんた知らないの？ 水の精霊は心を操れるのよ！？」

「ふふん、なめんじゃないわよ。 そんな精神攻撃、私が防げない
とでも思つてんの？」

そう言い争っているうちに、水面が盛り上がり、いかにも水の精霊！ という感じの人形になった。

「……………私の常識がどんどん壊れていくわ……………」

「ほう、何かに呼ばれたかと思えば……、お前、人ではないな」

「……そうよ。お願いしたいことがあって来たの。いいかしら？」

「なんだ？ 外れし者よ」

どうやらルイズの言葉を聞いてくれるようだ。

「なぜ水かさを増やすの？ 理由があれば教えて欲しい。私たちに解決出来ることなら解決するから、水かさをもとに戻して欲しいの」

ルイズの言葉に水の精霊はゆっくりと大きくなった。そして様々なポーズをとる。ふと、動きを止めるとエヴァをみた。

「ふふふ、今日は久しく珍しい日だな。我と同じような存在に会うとは……」

「ふん、同じではないさ。 私は人造だからな」

しばらく沈黙し、水の精霊は語りだした。

「月が三十ほど交差する前の晩、我が暮らす水の底から、秘宝が盗まれたのだ」

「……二年ぐらい前ね」

キュルケが呟く。

「ゆっくりと水が浸食すれば、いずれ秘宝に届くだろう。 そうすれば、我は秘宝のありかを知るだろう」

「……そう。 それでその秘宝の名は？」

もはや人の道を外れたルイズは水の精霊のようになる可能性も無くはなかったため、他人事ではなかった。

「【アンドバリ】の指輪。 我が共に時を過ごした指輪だ」

「どこかで聞いたことがあるわね」

「水系統の伝説のマジックアイテム。確か、偽りの命を死者に与えるという……」

キュルケの呟きにタバサが答える。

「……で、誰が盗んだかわからないの？」

「確か、個体の一人が【クロムウェル】と呼ばれていた」

「聞き間違いじゃなければ、アルビオンの新皇帝の名ね」

キュルケが言った。

「……そう言うこと。アルビオンの反乱にはそういう経緯があったのね」

ルイズはウェールズ皇太子を思いだし、忌々しげに言った。

「……水の精霊。提案があるわ」

「何だ？」

「私たちが探して、あなたに秘宝を返すわ。私がどういふ存在かわかるなら、どれだけ時を重ねても、約束を果たせるとわかるでしょ？」

水の精霊がふるふると震えた。

「わかった。お前たちを信用しよう。指輪がもどるなら、水を増やす必要はない」

そう言って、水の精霊はごぼごぼと姿を消したのだった。

ルイズ一行はこれからのことを話ながら魔法学校に帰ってきた。

「それにしても、水の精霊と会話するなんて、なかなか珍しい体験させてもらったわ」

「そうね〜」

そうキュルケに返しながら、ルイズはなぜか遠くを見ている。辺りはすでに暗い。

「タバサの母親のこともあるし、これからいろいろ調べないとね。ま、今日はさっさと寝ましようか」

「そうね……………っは」

異常な気の高まりを感じたルイズは馬車から飛び出た。……………するとそこには鬼が立っていた。

「ルイズさん……………、また置いてきぼりですか……………。私、仲間かと思ってたんですけど？」

遅れてキュルケ達も出てくるが、あちゃ〜、と言う表情を浮かべた。

「ごめんごめん。本当にごめんって。許してちょうだい。……………ひい」

ルイズが顔をあげると、シエスタが右腕に狗神（影で出来た狼）を集中させていた。

(し、死ぬ？ この私がこんなところで……でも置いてきぼりにした私が悪いし……、いやいや、まともに受けたらミソチになるわよこれは……)

と、そのときフクロウが飛んできて、一枚の手紙をルイズに投げ渡し、飛び去って行った。

「……ごめんね、シエスタ。でもわざとじゃないの、許して。それに急用が出来たみたいだから」

その手紙はアンリエッタの筆跡であった。余程あわてて書いたのか、かなり字が荒いがなんとか読めた。そこには一言、『助けて』とあった。

第18話 襲撃

王宮に急いだルイズ一行はアンリエッタ直筆の許可書のお陰で情報をもらい、今はシルフィードに乗って、先行したヒポグリフ隊を追っていた。

「まったく、まさか姫さまが誘拐されるとわね」

「見えたぞ、あれじゃないか？」

エヴァの言葉に、目を細めると、無残に人の死体が転がる光景を見つけた。風竜を止め、その上から降りた。

「ひどいわね」

キュルケが呟く。焼け焦げた死体や原型をとどめていない死体がたくさん転がっている。先行していたはずのヒポグリフ隊だろっ。

「まだ生きてる人がいます！」

シエスタの声に一行が駆け寄る。腕に深い傷を負っているが、

命に別状はなさそうだ。

「大丈夫？」

ルイズは魔法で傷を癒し、問いかける。

「すまない、……大丈夫だ。あんたたちは？」

「私たちも、誘拐した一味を追って来たのよ」

そう言うと、騎士は助けが来たと言う安心感からか、何かを咳き気絶してしまった。

その瞬間、四方八方から魔法の攻撃が飛んできた。ルイズは気絶した騎士を安全な場所に転移させると、まるで踊るかのよう
に軽やかなステップですべての攻撃を避けた。キュルケ達も余裕
绰々で回避や防御をしたようだ。

草むらから、ゆらりと影が立ち上がる。その中にウェールズ
皇太子の姿を見つけたルイズは顔を歪めた。

「……ウェールズ皇太子」

水の精霊に指輪の話聞いた時から、なかば予想していたが、

直に見ると、余計にルイズは胸くそが悪くなった。

「まったく……、死者を愚弄して……」

アンリエッタを探すと、他のアルビオン貴族に引き連れられていた。どうやら気絶しているようだ。

『姫さまの確保が最優先。　いくわよ』

『オツケー』

『しかたないな』

『わかりました』

『了解』

ルイズの念話に皆が答える。

「姫さまを返してもらいますよ」

「ミス・ヴァリエール、取引をしよう。ぼくたちは馬を失ってしまった。朝までに馬を調達しないといけないし、道中危険もあるだろう。魔法はなるべく温存したい」

タバサが呪文を詠唱した。氷の矢がウエールズの体を貫いた。しかし、みるみるうちに傷口は塞がってしまった。

「無駄だよ。君たちでは、ぼくを傷つけることは出来ない」

「け……すな」

ルイズが俯き、拳を握りしめる。

「なんだい？」

「皇太子の魂をそれ以上汚すなッ！」

その叫びと共に戦いの火蓋は切手落とされた。

魔法が飛び交う中、ルイズは一足飛びにアンリエッタの元に向かった。目の前に敵が立ち塞がるが、

「邪魔だッ」

ルイズの拳で吹き飛ばされる。

「姫さまッ！」

アンリエッタを抑えこんでいたアルビオン貴族を器用に無詠唱の【魔法の射手】で排除し、駆け寄る。

「う、うーん。…………ルイズ？」

「良かった…………」

そのとき、キュルケの声が聞こえた。

「こいつら、炎が効くわ！」

一旦キュルケの側に皆が集まり、一掃することした。

「【ファイヤ・アロー】ッ！」

数十個の炎の矢が生まれ、生ける屍となった、哀れなアルビオン貴族達を燃やしていく。

「くそッ」

ウェールズ皇太子が毒づく。そんな姿を見て、ルイズは彼の魂を眠らせることにした。

「今度こそ、安らかに眠って下さい」

背負っていたデルフを抜く。

神鳴流奥義

斬魔剣 弐の太刀

デルフから飛んだ斬撃はウェールズの体を傷付けることなく通り抜けた。

ドサッ

ウェールズが倒れる。

「……………終わったわね」

キュルケが呟く。

「……………ええ、そうね」

「まったくだよ、【光と闇の女帝】に【闇の福音】の分身体までいるなんて聞いてなかったよ」

「……………!!?!?」「……………」

その声が聞こえて来たのは、アンリエッタがさっきまで立っていたところだった。

障壁突破 石の槍

「がはっっっ」

ルイズの胸に石の槍が突き刺さり、彼女は血を吐いて膝をつく。

「ルイズッ！」

「……………」

「貴様ッ！」

「よくもッ」

驚愕さるキュルケとタバサ、エヴァとシエスタは即座に反撃するが避けられる。

襲撃者は制服をきた白髪の青年だった。

「あ、あんた……【土】の……アーウエ……リンクス……？
バカな」

ルイズが鮮血を溢しながら息も絶え絶えに言った。

「ほう、今の一瞬で急所を避けたのかい？」

「私をなめるなッ！」

断罪の剣

「はああああっ」

狗音爆碎拳

「【ファイヤ・アロー】」

「【ウィンディ・アイシクル】！」

エヴァ、シエスタ、キュルケそしてタバサの攻撃が集中する。 捉
えたかと思えば……………

「ふふふ、流石に多勢に無勢。 今日のところは引くよ」

白髪の青年は水になって消えた。

「……………幻影か」

エヴァが呟く。

「ルイズッ！ 大丈夫なのッ」

「くッ、魔族・・・の再・・・生能力を・・・なめないでもらおうかしら。魔族化すれば・・・問題ない・・・わ」

黒い霧がルイズを包むと、身体が黒く変化していく。髪の毛の色が桃色から銀色に変わり、手足の爪が獣のように、鋭く伸びた。

「・・・・・・・・ふう、今はなかなかヤバかったわ、ってどうしたの？」

エヴァ以外の全員が呆然としている。

「・・・・・・・・あんだ、ホントに人間辞めてたのね」

「へ？ あ、そうか。この姿は初めてだったわね。今、戻るわよ」

再び霧がルイズを包みむ。立っていたのはいつものルイズだった。傷は完全には治っていないが、血は止まっていた。

「……いろいろツッコみたいけど、とりあえず姫さまをさがしましょ」

アンリエッタはすぐに見つかった。近くの草むらからに横たわっていたのだ。

「……そうでしたか。本当にありがとうございました。ルイズ、そして【紅き翼】の皆さん。一度ならず二度までも、助けて頂いて」

それから……一行は敵味方問わず、死体を木陰に運んだ。後で埋葬するにしても、このままではいけないと思ったのだろう。アンリエッタは最後にウェールズを運ぼうとした。すると、ウェールズの睨が弱々しく開いたのだ。

「……アンリエッタ？ 君か？」

神の気まぐれか、ルイズの【斬魔剣 弐の太刀】が偽りの命を消し飛ばしたとき、わずかに残っていたウェールズの生命の息吹に火をともしたのかもしれない。

「ウエールズさま……………」

アンリエッタの目から、涙が流れる。

「おお、なんとということでしょう。どれほどの時を待ち望んだか」

驚いた顔の一行が目丸くする。アンリエッタはそのときになって、赤い染みがウエールズの白いシャツに広がるのを見つけた。偽りの生命によって閉じられていた、ワルドの傷が開いたのだ。アンリエッタは慌ててその傷をふさごうとして、呪文を唱えた。しかし、残酷なことに、その傷は塞がらず、血の染みは大きくなるばかり。

「ウエールズさま、そんな、いやだ、どうして……………」

「無駄だよ……………、アンリエッタ。一度死んだ肉体は蘇りはしない……………」

本来ならここで、ウエールズの命は終わっていただろう。しかし……………、ここにはルイズがいたのだ。

「……………そうですね。ウエールズさま、あなたはここで死にます」

突然喋りだしたルイズに皆が注目した。

「皇太子としてのあなたはここで死にます。　なので、これからは
姫さまの恋人として、生きて下さい」

「ミス・ヴァリエール？」

「ルイズ……あなたまさか！」

「完璧完全に死んでいない限り……」

そうして目を閉じ、ルイズは詠唱を始めた。　なにせ九分九厘
死んでいる人間を蘇らせるのだ。　とてつもない魔力がルイズから
発せられる。

「……世界はアイオンの内を歩き　時は世界の内を巡り
世界は時の内に生ず　……我に応えよ　十二の聖地　……
・扶余　洛陽　雲崗　アンコール　……生は意識を定めず
意識が生を定めるなり　生は他ならぬ魂なりて、魂は意識なり」

惑星規模で集められた、魔力の渦が世界を越え、ルイズに集中
する。　時期や時間、場所などをまったく考えずに発動したため、

そこまでの大魔法を発動させることはできないが、それでも十分な魔力だ。

「汝が為に ユピテル王の祝福あれ 【完全回復】」

眩い光がウェールズを包み込んだ。光がおさまると、さっきまでの青ざめた顔色が赤くなっている。

このあと、アンリエッタとウェールズに泣きながら感謝され、ついには王位を譲るだかなんだか言い出したアンリエッタを落ち着けるのに朝までかかったらしい。

第19話 帰省（前書き）

感想ありがとうございます。 いつの間にか二十万PVを越えました。 読んで下さった方々に感謝です！ それでは19話です。

第19話 帰省

「さて、明日から夏期休暇なんだけど」

ルイズは周りで好き勝手やっているいつもの面々を見回しながら言った。ここはルイズの部屋。誘拐事件があったから一週間が経っていた。

「よっッ、ほっ それ」

ピロロン ピロロン

「おッ、思ったよりやるな……だが」

ピロロロロン ピロロロ

「あゝ、負けた」

エヴァとキュルケはゲームでなにやら対戦している。タバサはいつも通り本を読み、シエスタは掃除をしていた。

「……。。ちゅーもくッッッ！」

まとまらない仲間に、ルイズが叫ぶ。

「さて、明日から夏期休暇な訳なんだけど、ちょっと情報集めをしたいと思うの」

ようやく、話し合いが始まった。ルイズの言葉にキュルケが返す。

「まあ、私は帰省もしないし、べつにいいんだけど。なんでそんなことするの？ もしかして、このまえの誘拐事件絡み？」

「そのとおり。あいつがいたとなると、アルビオンがかなり怪しくなるわね」

ルイズは顎に手を添え、考え込む。

「あいつって、あの白髪の奴よね？ なかなかカッコ良かったわ・・・」

「で？ 何者なの？ あんた、知ってるみたいだったけど」

「あいつの名前は【土】のアーウェルンクス。私が跳ばされた世界で、【完全なる世界】って言うテロ組織の幹部をやったのよ…… ナギが倒したハズなんだけど……」

「なぜか蘇って、こっちの世界に来ていたってわけね」

そこで黙っていたタバサが尋ねた。

「強いのはわかる。 どれほど強いのか？」

「……そうね、ナギが苦戦したくらいだからね……今の私でも倒せるかどうか……微妙だわ」

「げっ、そんなに強いのか？」

予想外だったのか、キュルケが驚く。タバサやシエスタも声には出さないが、驚いているようだ。

「……そうね、ラカンじゃないけど、分かりやすく強さ表を作ってみましようかね」

ルイズは羽ペンを掴んで、羊皮紙になにやら書き始めた。

-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
普通の人	10								
ありし日の私	30								
学院生(平均)	70								
一般的メイジ(平均)	100								
火竜	500								
フーケ	600								
ワールド	700								
キュルケ・タバサ	1000								
シエスタ	1200								
戦艦(標準)	1500								
戦艦(巨艦)	2000								

~~~~~

私・エヴァ（精霊） 8000

アーウエルンクス ？

（7000～10000）

ナギ・ラカン・エヴァ（本体） 10000～

-----

「まあ、闘いは相性とかいろいろな条件で勝ち負けが変わるから、この表通りになるとはかぎらないわよ？ キュルケだって、やりよ  
うによつては戦艦とか沈められるでしょ？」

「戦艦つて………。 あいつこんなに強いのか！？」

羊皮紙を握りしめ、キュルケが言った。

「私つて、こんなに強いんですか？」

「シエスタは獣化も入れたら、倍ぐらいになるんじゃない？ 私は  
魔族化したら、10000行くかしらね……？」

「………なんだか凄いわね」

「強い」

キュルケが呆然と、タバサは悔しそうに言った。

「あ、キュルケとタバサはまだまだ成長途中だから、これからもつと上がるわよ」

一息ついて、ルイズが話始めた。

「とまあ、話がズレたけど、怪しい奴が暗躍してるみたいだし、情報集めとか修行を兼ねて、みんなでも屋を開きましょうッ！もう姫さまにお願いしてトリステインに場所を借りてるし」

キュルケが呆れた顔をする。

「手が早いわね。 . . . . 私はいいけど、タバサとシエスタは？」

「いい。 強くなりたい」

「私も良いですよ。 この前、故郷に帰ったばかりだし、面白そうですからね」

ルイズは返事を聞き、ガッツポーズをした。

「オツケーッ！ それじゃあ、一週間後の朝にトリスティンの王宮前に集合ね！ そこから借りてる場所に案内するわ」

「一週間後？」

キュルケはきよとんとした。

「ちょっと用があつてね……。。十年ぶりに帰省しようと思つてるのよ」

ルイズはどこか寂しげな顔をして、目を瞑る。

「………そっか」

「と言つわけだから、一週間後にね！」

そこで話は終わり、解散になったのだった。

【サイド・ルイズ】

あれから一日経った。今、私はエヴァと共にラ・ヴァリエール家の屋敷の前に転移してきている。

事前に今日行くと手紙を送っておいたから問題ないだろう。家の使用人達が驚いていたが気にしない。

屋敷に入りながらエヴァが話し掛けてきた。

「おい、大丈夫なのか？」

まあ、そう言われるのも無理はない。なんてったって私は戦闘でもないのに冷や汗をたらたらしているのだから。

「大丈夫よ。問題ないわ」

しばらくするとエヴァは別室に案内されて行った。エヴァを見送った私は深呼吸し、目の前の道を見据えた。ただの廊下だが、私にとっては酷く恐ろしい。脳裏に幼い頃の記憶が……、つまりトラウマな訳だが。

「……………大丈夫よルイズ。　ふふふ、私は【光と闇の女帝】と

まで言われたのよ？　そう、私は【落ちこぼれ】でも【ゼロ】でもないわ」

記憶を振り払い、気合いを入れ直す。　なんてっ たってこれまでの事を説明しなければいけないのだ。　こんなことでどうする。

「……………よし」

「ルイズッ！」

「その声は……………ちい姉さま!？」

振り返ると、そこにいたのは私と同じ桃色の髪の女性、カトレア姉さまだった。　ちなみに私にはもうひとり、エレオノールと言う姉がいる。　ちい姉さまは優しいのだが、エレオノール姉さまは昔の私をさらにきつくした感じだったと覚えている。

「ルイズ。　あなたが帰って来ると聞いて、楽しみにしてたのよ？」

私とちい姉さまは抱き合った。　実に十年ぶりの家族との再会だ。　涙が少し出たのは仕方ないでしょ？　この姉に会えただけでも、帰ってきて良かったと思う。



「でも良かった。ルイズ、あなたすっかり落ち込んでいると思うから……」

「どっして？」

「ワルド子爵。彼、裏切り者だったのでしょ？ 婚約者がそんなことになって、あなた傷ついたでしょ？」

「……ああワルドのこと？ 大丈夫よ」

まあ、存在自体を忘れてたしね。そう言えば生きてるのかしら？ 私の【雷光剣】で切り刻んだけど、生死は確認してないわね……。まあいつか。そんな事を考えるとちい姉さまが激しく咳き込み始めた。

「あつ姉さま！ 汝に ユピテル王の恩寵あれ 【治癒】」

ちい姉さまに回復魔法を施した私は、今日のもうひとつの目的を思いだし、懐の薬瓶を確かめた。

「ありがとう、ルイズ。あなた魔法が使えるようになったのね！ それにしても今の呪文は……」

「事情があるのよ。今日はその説明の為に来たから、後で話すわ」

重い……、なんて重い…… 私はいつもこんな雰囲気の中で、食事をしていたの？

一通り食事が終わると、父さまが声をかけてきた。

「それでルイズ。話したいこととはなんだね？」

私は召喚の日に起きたことや、異世界に行ったことなどを家族に話した。魔族化のことは面倒なので話さなかった。なぜ姫さまにしたように記憶を見せなかったかと言うと…… 礼儀にうるさい両親が怖いわけじゃないわよ！？

私が語り終わると、家族が絶句していた。そして父さまが口をひらく。

「……ルイズ、大丈夫かい？ 頭でも打ったのか？」

「……まあそう思うでしょうね。それじゃあこれを見てく

ださい」

そう言って、私は変身魔法を解いたのだった。

「それじゃあ、ちい姉さまの病を治したいと思います」

懐から薬瓶を取り出して言った。私が変身魔法を解いてから大変だった。父さまは魔法が使えるようになったのを知って、大喜びだったし、母さまやエレオノール姉さまには初めてほめてもらった気がする。家族に認めてもらうことがこれほど嬉しいとは・・・

「そんな事が出来るのか!？」

父さまが驚いたように言う。数々の医者が匙を投げたほどのだからあたりまえか。

百万ドラクマもする【イクシール】に私なりに改良を加えたの

だ。これで治らなかつたらお手上げだ。

「ちい姉さま、これを飲んでください。それで姉さまの身体は元気になるハズです」

「ありがとう、ルイズ」

そう言つて、ちい姉さまは【イクシール・改】を飲んだ。すると姉さまは涙を流し始めた。やばい、何か配合を間違えたのかしら!?

「大丈夫ですか、姉さま!」

「……大丈夫よルイズ。とっても体が楽よ。嬉しくつて  
つい」

涙を拭うちい姉さま。

「カトレア! 大丈夫なの!?!」

近くで見ていたエレオノール姉さまが、声をかける。

「大丈夫よ、姉さん。 今までにないくらい調子が良いわ」

こうして、ちい姉さんの病は治り、その日は宴会が開かれたのだった。

翌日、私が久しぶりの自分の部屋でくつろいでいると、母さまが魔法衛士隊の装備をして入ってきた。

「ど、どうしたのですか母さま？」

「昨日の話だと、ずいぶんと強くなったようですね？ 少し実力が見たいから中庭に来なさい」

「……………どうやら面倒なことになったようだ。 確か、母さまは若い頃は【烈風】のカリンと呼ばれ、数々の伝説を作っていたはずだ……………」

中庭に行くと、何故か父さまや姉さま達もいた。

「なんているんですか？」

「なに、かわいい娘が魔法を使えるようになったんだ。見てみたいだろう?」

そう父さまは言うが、完全装備の母がやって来るのを見ると、絶対闘う本人は見たいだけじゃないと思う。なんと言うか、気迫が違った。ワルド? え? 誰それ? ってぐらいのプレッシャーだ。

私と母は十メートルほど離れて相對した。

「はじめ!」

合図役の侍女が大きな声で腕をふりおろす。その瞬間、私と母の間のプレッシャーが爆発的にふくれあがった。

【サイド・カリン】

昨日のルイズの話聞いていたが、まさかこれ程とは……

「【魔法の射手・光の二十九矢】!」

聞き慣れぬ呪文と共に光の矢が私に向かって飛んでくる。

「はあッ！」

避けながら、私は【ブレイド】をかけた杖剣を握り締め、ルイズに詰め寄る。ルイズも手に光の剣を纏わせ突っ込んできた。

ガガガガガガッ！！！！

数瞬の間に何十合も斬り結び、飛び退いた。久しく眠っていた血が疼く。

「やるわねルイズ！」

「母さまも。正直、予想より全然強いです」

自然と顔が笑みを浮かべる。【エア・カッター】を連射しながらさらに斬り結ぶ。ルイズも光の矢で相殺しながら応戦してくる。

「はああああッ！！」

【サイド・ルイズ】

なんでこんなに強いのか？  
と云うかなんで私の動きについてこれるのが疑問だ。

「はあッ！」

「ふッ！」

短い呼気と共に、もう幾度目かもわからない斬り合いが続く。  
ラチがあかないと思ったのか、母さまが距離をとっても呪文を唱える。

「……………へ？」

おかしい。使った魔法は単純に竜巻を起こす【ストーム】の  
ハズだ。なのに規模が全く違う。天に届くかと思うほど巨大な  
竜巻が迫ってくる。やばいわね。

「来たれ 裁きの光 薙ぎ払え 【浄化の剣】！！！」

巨大な光の剣で相殺しようとしたが……………しきれない！

「くッ……………」



咄嗟に障壁を張り耐える。母さまからラカンやナギみたいな、デタラメな雰囲気を感じるのは気のせいだろうか……。だっ  
ておかしいでしょ？　なんでラインクラスだっけ？　そんな魔法が  
スクエアクラスを越えてるのよ！？　でも、まだまだ負けないわよ。

「陽射しを遮る　一条の影　我が手に宿りて敵を喰らえ　【黒き閃  
光】！」

闇の奔流が母さまに突き進む……。が、いきなり凄まじい  
暴風が吹き荒れ、逸らされてしまった。……。絶対におかし  
い。　なんで【ウインド】であんな強風が？

「さて、ルイズ。　そろそろ決着といきましょうか」

母さまの言葉と共に、さっきの【ストーム】より数段大きな竜  
巻が発生した。　あれはスクエアクラスの【カッター・トルネード】  
だろう。　もう当初の少し実力を見るとい言葉は何処かに忘れ  
去られている。

「来たれ光精　闇の精　万象を従え　吹きすさべ　混沌の嵐　【虚  
無の疾風】」

真空の刃が吹き荒れる竜巻と、私の白と黒が入り交じった竜巻  
がぶつかり合う。

カツ!!!!!!!!!!!!!!

.....

「強くなりましたね、ルイズ。 久しぶりに心踊る闘いが出来ましたよ」

「いえ.....まさかこれ程とは思いませんでした」

私は母さまの言葉に中庭を見渡しながら答えた。 中庭は戦場の方がまだととのってるんじゃない？ ってぐらいの荒れようだった。 父さまや姉さま達が近寄ってくる。

「英雄になったと言うのは半信半疑だったのだが.....凄まじいな」

「あのちびルイズが母さまと渡り合うなんてね」

「凄かったわよルイズ！」

こうして予想外の闘いもあったが、無事に帰省を終えたルイズ

だ  
っ  
た。

## 第20話 夏休み(前書き)

いつの間にか二十話目です。最近忙しくて、更新のペースが遅くなってしまう。週一ぐらいで更新していくつもりなので、よろしく願います。

それではどうぞ。

## 第20話 夏休み

王都トリステインの片隅に二階建ての質素な建物があった。その建物の前には看板が立ててあり、こう書かれている。

解決率10000% 【何でも屋・紅き翼】 どんな難問でも、おまかせください

「ホラホラ、二人がかりでこの程度？ もっと気張りなさいッ」

ルイズの叫びと共に、無数の【魔法の射手】がキュルケとタバサに降り注ぐ。ときには避け、ときには払い、二人は虚空を蹴つてルイズに飛び掛かる。

「【紅き焰】ッ！！！」

「【氷槍弾雨】」

ドゴツツッ！！！

浮遊していたルイズに特大の火炎弾と数十本の氷槍がぶつかる。

「や、やった？」

「甘いッ！」

いつの間にか背後に移動していたルイズによってキュルケは吹き飛ばされてしまった。

「ッ！」

その隙にタバサはルイズの背後に回り込み、魔力の籠った杖を振り降ろす。しかし、ルイズは後ろ向きのまま、手に魔刃を纏って、防ぐ。

ガキッ　　バチバチバチッ！

ルイズの手から伸びる光の剣とタバサの杖がぶつかり合い、火花を散らす。

そのまま、空中を縦横無尽に駆け回り何合も斬り結ぶ二人。

「はッ」

「うッ」

ドゴッ

一瞬の隙を突かれ、脇腹に蹴りをもらったタバサは地面に叩きつけられてしまう。しかし……

「【魔法の射手・火の二十九矢】！」

地面から突然放たれた火の矢に、たまらずルイズは避ける。

「はああああッ！」

避けたところに、先ほど吹き飛ばされたキュルケが赤い魔刃を杖に纏わせ、突っ込んでいく。

ガガガガッ

「ぐッ！」

そのままつばぜり合いになるも、首を掴まれ、タバサのいるところに投げ飛ばされるキュルケ。

「これで終わりね 【右腕解放 魔法の射手・光の百一矢】」

無数の光の矢がキュルケとタバサに飛来する。

「・・・・・・・・げ」

「・・・・・・・・ツ」

ガガガガガガガガガガ・・・・・・・・

「なんか最近、修行ばっかりしてないかしら？」

キュルケの言葉にルイズが横になって涼みながら返した。



「んなこと言っただって、依頼がこないんだからしょうがないじゃない。……にしてもあついわね。タバサ、もう一回冷して」

王都トリステインの片隅で何でも屋を開いてから、すでに一週間が経過していた。最初の三日ほどは、貼り紙を貼ったり客寄せに精を出していたルイズ達だったが、今のところ一人も客が来ない。そこで最近ではエヴァの【別荘】で修行尽くしなのであった。

「ねえ、情報を集めるとか言っただけじゃなかった？」

「そこら辺は姫さまに頼んだわよ。こんな少人数で手がかりを探すより、よっぽど正確でしょ」

「……じゃあ何のためにこんな店を開いたの？まさか、楽しそうだからとか言わないわよね？」

「……」

その時、ドアがノックされ、二人のメイド姿の女性が入ってきた。一人はシエスタでもう一人は

「きゅい、冷えたジュースを持ってきてやったのね」

「ありがとう、シルフィード。それでお客さんは来た？」

もう一人はシルフィードであった。ルイズとエヴァが待ち合  
わせの場所にいくと、タバサと同じ蒼髪の女性がいた。ルイズが  
尋ねると、実はタバサの使い魔の風竜はただの風竜ではなく、人間  
を越える知能を持つ韻竜だと言うのだ。この姿は韻竜やエルフ等  
が使う先住魔法によって、変化した姿だ。

「いつも通りなのね。人っ子一人こないのね」

わかっていたらしいルイズは頷き、氷が浮くコップを手取る。

「あゝ生き返るわゝ」

「それにしても、なんで誰も来ないのよ？」

キュルケが愚痴る。

「まあまあ、その代わりに修行がたくさん出来るじゃないですか。  
異世界の魔法も大分使えるようになったのでしょう？」

「…………まあそうだけどね、流石にこのまま夏休みが終わるのはさ〜」

シエスタの言葉にキュルケは納得できないようだ。

「まあそのうち来るわよ。姫さまにもなんか厄介な事件があれば手紙をくださいって言っておいたしね」

ルイズが言ったたちょうどその時、窓から一羽の鳥が入って来たかと思うと、真ん中から半分に割れた。

中には手紙が入っていて、タバサが拾い、読み始める。

「……………任務」

「待つてました！ やつと実戦が出来るわね！」

「初仕事なのね！」

「それで？ 相手は何？」

ルイズがタバサに尋ねる。みんな着いて行く気満々だ。

「正体不明の竜族討伐」

じゃんけんの結果、タバサ、キュルケ、エヴァ、シルフィード  
が行くことになり、ルイズとシエスタは店番になった。

「さてと、それじゃルイズ、シエスタ、店番よろしくね。」

「ふん、キュルケ。 あんたこそへまして死なないようにね？ ま  
あエヴァもいるし、大分強くなったから大丈夫だと思うけど。」

「大きなお世話よ。」

こうして居残り組と任務組に別れたのだった。

「………暇ね。」

「それじゃあ模擬戦でもやりますか？」

キュルケ達が出発してから数時間。

ソファーに寝そべり、情

眼を貪るルイズがいた。 太陽はまだ真上である。

「そうね、やりましょうか」

その時、店の呼び鈴がなった。

「……………まさかの初依頼かしら？」

「そうみたいですなルイズさん」

ルイズとシエスタが一階の事務所に向かうとそこにいたのは一人の少女だった。

「ようこそ【紅き翼】へ。 どういった依頼ですか？」

柄にもなく敬語で話すルイズ。 話を聞くと、飼い猫を探して欲しいらしい。 泣きそうな目でこちらを見る少女。

（うっ……………そんな目で見られたら断われないじゃない。 仕方ないわね）

「分かりました。その依頼、受けましょう。報酬はこのお店のことを噂するだけでいいですよ」

ルイズは少女にウィンクをする。どことなく緊張していた少女は笑顔でお礼をしたのであった。

(そういえば、今頃キュルケ達はどうしてるかしらね)

「ヘックションッ！」

「……風邪？」

ここはガリアの火竜山脈付近。タバサ、キュルケ、シルフィード、エヴァの三人？ と一匹は目的地を目指して歩いていた。ちなみにシルフィードは何故か人間形態である。

「大丈夫よ」

「ふんッ、こんな暑いのに風邪なんかひくか」

「きっと誰かが噂してるのね」

「いやね、誰かしら？ まさかふつた男達かしらね？」

そうこうしているうちに、一行は目的地の村に着いた。

「いやー、よく来てくれたね」

一行を出迎えたのは宿の女将していると言つ老女だった。

「花壇騎士タバサ」

女将の話によると、一ヶ月ほど前から火竜山脈から黒い巨大な竜がときたま降りて来て、暴れているらしい。

「皆、怖がって引越して行ってね。今じゃ一ヶ月前の半分も住んでいないんだよ。こんな田舎の村じゃなかなか討伐隊も来てくれないし困っていたんだよ」

女将に情報をもらい、一行は火竜山脈へと向かった。

その頃ルイズは

「居ないはね。ちい姉さまならすぐに見つけられるんだろうけど……」

飼猫を探していた。

「やっぱり大通りには居ないですよ」

ルイズとシエスタはかれこれ一時間は探していたが、いまだに見つからない。

「確か、黒猫だったっけ？」



「はい、名前はクロ。赤い首輪を着けているそうです」

なかなか見つからないので、路地裏に入っていくルイズ達。

「クロ、出てきなさい。ご主人が困ってるわよ」

「クロちゃん。出てきたら、お菓子あげますよ」

するといつの間にか目をキラキラ輝かせる野良猫の集団がルイズとシエスタの行く手を阻んでいる。嫌な予感がして、冷や汗が垂れて来る。

「…………シエスタ」

「…………ルイズさん」

来た道を引き返そうとするも、そこにも野良猫の集団で埋め尽くされていた。

「……………？」

「ぎゃああああッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

一方キュルケ達と言うと、こちらは大ピンチだった。周りは数十匹の成体の火竜に囲まれる、火炎放射が目の前を通り過ぎて行く。

「ちょっとちょっとちょっと、なんなのこれ!? 今までで一番ピンチじゃないの!」

「……………危険」

「ふむ」

「きゅい ふむ、じゃないのね。なんでこんなに火竜が襲って来るのね!?!」

そうこう言い争っているうちに、十メートルはあるつかと言つて巨大な火竜達がブレスや体当たりをしてくる。キュルケ達は岩影に隠れた。

「……どつやら何かが命令しているようだな」

「多分、目的の黒い竜」

「お姉さま、もう帰るのね。　　こんな無理なのね」

シルフィードが涙目で懇願する。

「ダメ」

「こうなったらガチンコよ！　　正面突破でその黒い竜のどこまで行くわよ！」

キュルケがやけくそ気味に提案する。

「ふむ、それもいいな。　　お前たちなら不可能ではないだろう。直撃をもらったら死ぬから注意しろ。　　私が好きなゲームだと、ボスは一番上にいるものだから、山頂に居るだろう」

シルフィードはその言葉を聞くと、ガツクリと膝を着いた。

「……お父様お母様。先立つ不幸をお許しなのね。イルククウは、しゃべることすら出来ない、下賤な火竜の手にかかって、はかなくこの世を去るのね……。きゅい」

「なにバカなことやってんのよ。やるからには勝つわよ！修行の成果が試される時だわ」

「勝つ」

「ふっ、それじゃあ行くか」

キュルケ達は山頂目指して、火竜の群れに突撃して行くのだった。

「はあ……。はあ……。はあ、酷い目に会ったわ」

一方ルイズ達は何とか襲いかかってきた無数の猫達を撒いて、へたりこんでいた。引つ掻き傷だらけだ。

「そうですね、なんで襲って来たんでしょう？」

「……………多分、私達がただの人間じゃないってわかったんじゃないかしら？ 私は魔族だし、あんたも半分狗族でしょ？」

「そうですね、でも馬とかに恐がられたこととかないですよ？」

「うーん。なんでかしらね」

その時、ルイズとシエスタの間を一匹の黒猫が通った。

「……………ルイズさん」

「なに？」

「あの猫って……………」

ルイズがよく見ると赤い首輪がしてあるのに気がついた。

「ターゲット発見！」

捕まえようとしたルイズだが、逃げられてしまう。

「待て待て待て〜！」

「あッ、ちょっとルイズさん。置いてかないでくださいよ！」

追い付くとそこにはまたもや猫の集団がいた。

「……………げ」

「……………っ」

ルイズとシエスタは立ち止まり、飛び掛かって来るのに備える。実際二人が本気を出したら、一秒もかからずに抹殺出来るのだが、可愛い猫にそんなことは出来ない二人だった。

（来る！！！！！！！！）

身構える二人に、一匹の猫が前に出る。依頼された飼い猫だった。

「私に何かようかな？」

「！！！！！！！！！！」

「ぜえ……ぜえ……、皆、生きてるわよね？」

「……無事」

「いや、もう死んじゃうのね、きゅい」

「なかなかの動きだったぞ。 【魔法の射手】 の応用もそれなりに  
さまになっていた」

キュルケ達は火竜山脈の山頂付近にたどり着いていた。 火口  
からの噴煙で、少し薄暗い。





「ちっ」

迫り来る巨大な尻尾を身を捻って避けるエヴァ。黒龍が黒いブレスを溜めている。

「これは久しぶりに本気を出さないといかんか」

身体を強化する魔力の密度を跳ね上げて黒龍に突撃する。

「はッ！」

顔を蹴り飛ばし、ブレスを逸らさせる。一本が十メートルはある氷の槍を瞬時に作り出しぶつけるが分厚い鱗に阻まれ、僅かに傷をつけるだけだ。

「ガアアアアアア」

黒龍はその巨大な翼を羽ばたかせ、エヴァに暴風を叩き付ける。

「くっ」

怯んだ隙をつき、ブレスを放つ黒龍。 虚空を蹴り、何とか避ける。

「……………面白い。これに耐えられるか？」

エヴァは右腕に魔力を集中させ、十メートルにとどくような【断罪の剣】を纏う。

「【エクスキューショナー・ソード】！！！！！！」

「ガアアアアアアッ」

渾身の魔力がこもったエヴァの魔刃と黒龍のブレスが衝突し、爆音が響きわたる。

「……………なんかもう怪獣大決戦ね」

「おっす」

「きゅい。 凄すぎてもう良くわかんないのね」

煙が晴れると、吹き飛ばされた黒龍が地面に倒れている。

「はあ・・・はあ・・・はあ、なかなかだったぞ。恨みはないがこれで終わりだ。契約に従い 我に従え 氷の女王 来たれ ところしへのやみ えいえんのひょうが 全ての命ある者に 等しき死を 其れは安らぎ也 【おわるせかい】」

黒龍の周囲が凍りつき、完全に凍結する。

「ふっ、砕ける」

エヴァの言葉と共に黒龍は粉々に砕けてしまった。

「流石に・・・疲れた・・・な」

一方ルイズは

「ふむ、我が主が探していたか。それは悪いことをしたな。少しばかり古巣の様子を見たくてな」

ルイズ達は突然しゃべりだした猫に啞然としながら、飼い主のところへ帰るように説得していた。なぜ喋れるのか聞くと「喋れられないのか？」と言われてしまった。

「そうか、迷惑をかけたな、すぐに戻るとしよう」

そう言つとクロは歩み去って行った。周りの猫達もぞろぞろと消えていく。

「なんだか不思議なことがあるものね」

「そうですね。猫って喋れたんですね」

そんなことを話しているとクロが何かをくわえて戻ってきた。

「忘れていた。今回のお礼にこの御守り（紐が着いた鈴）をやるう。一度だけ、あらゆる災厄から護ってくれるだろう」

そう言い残し、クロは今度こそ去って行った。

「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」

後にこの御守りがルイズ達を救う……かもしれない。

翌日、キュルケ達が帰って来た。ルイズは昨日の猫のことを考えていたがどうにもならないので、頭を切り替えて、初依頼達成とタバサの任務達成を祝うことにした。今は皆で買ってきたケーキを食べている。

「やっぱりマルトーの奴が言っただけあって旨いな」

「エヴァ、あんた何個目よ？」

「……………十個目だが？」

「……………」

エヴァの返事に呆れるルイズ。

「いいじゃないのルイズ。 エヴァ「師匠と呼べ」・・・師匠はすごい活躍だったわよ？ でっかい竜を倒したり」

「へへ、貰いつ」

「きゅいつ それは私が狙ってたやつなのね！」

「早い者勝ちよー！」

シルフィードとケーキを取り合うルイズであった。 ころし  
て夏休みは過ぎて行く・・・

## タバサと闇の魔法（前書き）

祝三十万pv突破!!!

自分が書いたものを読んでもらうと言うのは嬉しいもんですね！

今回の主人公はタバサになります。この小説を書く前から、タバサに闇の魔法を使わせたい！と思っていたので、願いが叶いました。 それではどうぞ

## タバサと闇の魔法

ルイズやキュルケに連れられて何でも屋を開いてから数週間がたった。私、タバサことシャルロット・エレーヌ・オルレアンの実力も着々とついていった。しかし、最近になってルイズや師匠エウアとの間に越えられない壁があるように感じられた。このままでは私はルイズや師匠、そしてあの白髪の青年のような本物には届かない。今でもあの男を殺せるかもしれないが、もっと確実にしたい。

そんなある日、今の實力から一段階上にいきたかった私は皆が集まっているところで尋ねてみた。

.....

すると、師匠がしばらく考えるように目を閉じた。

「.....あることにはある。私が編み出した【闇の魔法】と言う技法だ」

「その技を教え、しかし、邪道だぞ？ ルイズもだが、最終的には人間という枠から外れることになる」

「.....」



そこで脇で聞いていたルイズが話に入ってきた。

「選ぶのはあなたよ。 まともな道もいいと思うわよ？ 何か困ったことがあるなら、私達の力を借りて乗りきればいいし。 それにあなたでも五年や十年の歳月をかければ、まともな道で私やエヴァクラスになれるかもしれないわよ？」

「……確かにその通りだ。 仲間の力を借りれば良いのかもしれない。 でも私の目的のためには一国を敵に回さなくてはいけないかもしれない。」

結局その日はもう少し考えるところになり、眠りについた。

翌朝

私は考えがまとまらず、二階のコテージで体術や杖術の鍛練をしていた。 一通り汗を流すと、キュルケがやって来た。

「朝からせいが出るわね」

「……」

「……どうしても自分の手で復讐をしたいの？」

「・・・・・・・・ツ！」

「ふふ、なんで分かったって顔よ。・・・・・・・・あなたの実家に行ったとき、事情は大体聞いたって言ったでしょ？ その話を考えれば、あなたの目的ぐらいわかるわよ」

「・・・・・・・・そう。確かに私の目的は・・・・・・・・」

その時、キュルケが遮るように巻物を投げ渡してきた。

「もし光の道を行くなら開けるな、闇の道を選ぶなら開けてみる。だってルイズが言ってたわよ」

その巻物からは禍々しい魔力が感じられた。確か、ルイズが使い魔の召喚で呼び出したもののハズだ。

「タバサ、これだけは言っておくわよ」

「・・・・・・・・なに？」

「あなたには仲間がいる。たとえ光を選ぶほうが闇を選ぶほうが、そして国を敵にまわそうがね」

「……………」

驚きだった。そして、嬉しかった。その時、ふと昔を思い出した。あれは一番最初の【キメラドラゴン討伐】任務で絶望していたときだったか……………」

『なんでこんな森をほつつき歩いてんだい？』

『あーはっはっはっ！ 武者修行だって？ あんたみたいな子供が武者修行するにはちよつと荷が重すぎるんじゃない？』

『死にたいだなんて贅沢なんだよ』

『もし、戦うつもりがあるなら、狩りの仕方を教えてやるよ』

『あたし、あいつを殺る』

『キメラドラゴンに決まってるだろ？』

『手を出すな。これはあたしの戦いなんだ。これだけは……………』

『……ねえシャルロット。あんたはあたしみたいになつちや駄目だよ？……あんたにはきつと仲間が出来るさ。だから……そいつらとやりな。貴族のあんたならきつとできる。父さんの仇を討つことだって……、母さんの心を取り戻すことだって……』

そうか、私には仲間ができたんだ……

「それで？ どっちにするか決めた？」

周りには皆がいる。私は頷き、巻物を開こうとするが、手が止まってしまう。本当に開いてしまっていないのだろうか……仲間と共に進むというのも悪くないと思う。ならば、リスクを負うことはないのではないか。しかし、皆と共に行くには……

「タバサ」

キユルケが声をかけてきた。

「結果がどうであれ、私はちゃんと見届けるわよ？」

「……………」

そして、私は巻物を開いた。すると巻物から師匠が出てきた。

「ふっ、闇を選んだか。お前のことは気に入っているから手加減してやりたいが、それは出来んだ」

師匠が私の頭に手をあてる。

「打ち勝って見せる。耐えられなければ死ぬぞ」

そこで意識が途絶えた……………

「……………」

目を覚ました私が回りを見渡すと、そこ真っ白だった。

「……は……………」

「構エ口」

後ろに誰かが現れる。

「構エネバ死ヌゾ」

「……………師匠？」

「精神ノ死ダガナ」

ガキイインッ

ギギギギギギギギ

いきなり斬りかかってきた師匠の【断罪の剣】を杖で止める。

凄まじい力だ……一瞬でも気を抜けば吹き飛ばされる。

「ホオ、ナカナカダナ」

「ぐっ」

蹴りを入れられ吹き飛ばされる。急いで起き上がると、そこは先ほどの真つ白な空間ではなく、どこかの屋敷の中庭だった。よく見るとガリア王家の紋章が掲げられている。ガリア王子、オルレアン大公家の、父の住居だった。多分、ここは私の頭の中のハズだ。あの師匠やこの場所は私の記憶とイメージから作られた幻想にちがいない。

「闇ト八何ダ？ タバサ」

問い掛けながら呪文を詠唱している。なんて器用なんだ……

「光ニ対スル影 正ト邪 善ト悪 条理ト不条理 ダガココデオマ  
工に必要なノはモットシンプルな力サ」

コオル大地

地面が凍てつき、私に迫って来る。 まともにもらえば、身動

きがとれなくなるか、鋭い氷の槍に貫かれるだろう。　なんとか飛び上がり、ギリギリで回避した。

「其八全てを飲み込ム暗き穴ニして始マリの闇・・・始原ノ混沌ダ」

氷爆

ズンツツツツツ

爆発を障壁でなんとか逸すが、吹き飛ばされてしまう。

「コノ意味ガワカラナケレバオマエハ死ヌ」

全てを飲み込む始まりの闇・・・、どういった意味だろ・・・

「もっとも、お前はその意味を既に知っているハズだがな」

「・・・えっ」

言葉に気をとられた隙を突かれ、懐に飛び込まれてしまった。  
不味い！



ザンッ

「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ」

気力、体力共に限界が近い。一体どうすれば・・・

「ハハハハ、どうした？ たかだか数百時間でもう終わりか？」

大木ほどもある太さの氷槍が飛来してくる。ギリギリで回避するが接近され、肉弾戦になる。この師匠は私の影のハズだ。ここで勝つことは私自身の影に勝つと言つこと・・・一体どうやって勝てば・・・

「しまっ」

上から落ちてきた屋敷の壁に気づかず、師匠を見失い、壁と共

に吹き飛ばされてしまった。

### 魔法の射手・風の九矢

私は直ぐに【魔法の射手】を杖にのせて振り下ろし、壁を弾き跳ばす。するとその後ろから師匠が現れ鋭い手刀を繰り出してきた。なんとか杖でいなすがしきれずに皮膚が裂ける。私も受けてばかりではなく、杖の先が分裂して見えるほどの速度で突きを出す。が全て避けられ、屋敷の屋根に蹴り跳ばされてしまった。

「う……ぐく……」

「くくく、まだこれほど動けたとは驚いたぞ」

私の顔を踏みながら師匠は言葉を続ける。

「この眠ることも死ぬことも許されぬ幻想空間でここまで持ち堪えるとは奇跡に近い見事な意志力だ。だが限界が近いだろう？　これは何回目だ？　五十回ほどかな？　次は再び立ち上がれるか？　タバサ」

ザンツ

「かはっ」

「……ふん、もう終わりか」

マダ終わレナイ。 アノ男ヲ殺スマデ……

【サイド・アウト】

「ほう、まだ立つか」

エヴァの前にはボロボロになりながらも再び立ち上がるタバサがいた。一瞬でタバサは背後に回り込み杖で一閃した。

「なっ……」

今までに倍する速度、力を持ってタバサが詰め寄る。

「ハハハハッ、やっと互角か!？」

笑いながらもエヴァは迎え撃つ。

「……………だが、それでは私には勝てん。残念だったなタバサ」

ザンツ

エヴァの手刀により、袈裟斬りにされたタバサは血を吹き出しながら、落ちて行った。

「来たれ氷精 闇の精！！ 闇を従え……………」

エヴァは止めの呪文を詠唱しはじめる。

【サイド・タバサ】

もう駄目なんだろうか…………… 勝てない。ここで終わるか……………  
諦めかけたそのとき、ふと頭に声が響いた。

『もう諦めちゃうの？』

ジル……………

『せつかくここまで来たんだ。 あんたの底力を見せてやんなさいよ』

でも、もう身体が動かない……

『動かすんだよ！ ここで終わったら復讐もあんたの母親を治すことも、何にも成し遂げらんないよ！ それにやっとなんか仲間が出来たんだろ！ 一緒に進んで行く』

そうだ、私は死ねない。 あの男を殺すまで。 母の心を取り戻すまで。

ありがとう、ジル。

『ふんっ、気合いを入れな！ ……あんたは一人前の狩人なんだから』

気づくと私は落下している最中だった。 師匠が呪文を詠唱している。 あれを喰らえば、もう立ち上がれないだろう。 一体どうすれば…… 全てを飲み込む始まりの闇…… 飲み込む…… 飲み込む…… 包み込む？

ふと脳裏によぎるのはキュルケと友達になった日のこと……

『本ぐらいによ。 私が本の代わりに友達になってあげるわよ』

今でも覚えている。 こんな自分を受け入れてくれるのかと思つて…… その言葉が自分の心に吹きすさぶ雪風をわずかに溶かしてくれたような気がして……

「終わりだ、タバサ！」

### 闇の吹雪

ドオツツツツツツ！！！！

迫り来る、【闇の吹雪】に私は手を伸ばした。

ガキユキユキユキユキユッ

「何！」

【闇の魔法】とは全てをありのままに受け入れ、飲み込む力・  
・  
・

掌握

ゴォッ！

身体中が痛い。身体を起こすと、包帯だらけになっていた。  
まだ血も滲んでいるようだ。

「きゅい！ お姉さまが目を覚ましたのね！ よかったのね〜！」

周りには心配そうにこちらをみる皆がいた。

室内なのに、雨でも降っているのだろうか、歪んで見える。

そして、自分が本当に久しぶりに涙を流していることに気が付いた。

「……………みんな……………ありがとう」

「タバサ〜！」

「お姉さま〜！」

シルフィードとキュルケになすがままにされながら、私は極度の疲労で眠りについた……………



## 第21話 人質（前書き）

今回は間が空いたくせに短いです。  
来ると思います。

次はもう少し早く投稿出

では二十一話です。

## 第21話 人質

アルビオンへの侵攻作戦が魔法学院に発布されたのは、夏休みが終わって二ヶ月が過ぎた頃だった……。アンリエッタや、それを陰ながら支えるウエルズ、オスマンなどは包囲作戦を提案したのだが、王軍の将軍たちに推しきれられ、何十年ぶりかの遠征軍が編成されることになったのだが、士官不足のため、学生を士官として登用することになった。

アンリエッタ直属の女官である【虚無】の担い手ルイズには、侵攻作戦にあたり、特別の任務が与えられたのだが……

「この国、潰そうかしら」

ルイズは魔法学院の中庭でお茶をしていた。今は休み時間である。

「い、いきなりだわね……。どうして？」

キュルケはいつもなら生徒たちで賑わっているはずの中庭を見渡して言った。今は学院の半分の生徒、つまり男子生徒が士官不

足の王軍に志願したのである。

「いやね、なんか私に戦争してこいって王軍からの召集命令が来たのよ」

「それで？」

「もちろん、ふざけんなって断ったわよ。私の力の使いどころは私が決めるんだから。でもあんまりしつこいと考えちゃうじゃない？ 潰そうかなって」

「……わかるかも」

冷静なタバサの同意に、ずっとこけるキュルケ。最近になって、タバサは無口ではあるが、感情を表にだすようになったのである。

「あんたらね……それじゃ私達で世界征服でもする？」

溜め息まじりに呟くがどこかまんざらでもないキュルケだった。

まともな授業の時間が減った魔法学院に、騎馬隊の一団が現れたのは、そんなある日の午後だった。門から入って来たのは、最近になって作られた銃士隊の面々である。学院に居残った女子たちは、騎乗した近衛隊の姿に驚いた。いったい何事だろうと、首をかしげる。そんな中にルイズたちの姿もあった。

「なんだか面倒なことになってきたわね」

キュルケが呟く。

323

「まったく。戦争だからって、学院まで巻き込むとは……。この国も、腐ってるわね。国の上層部ってだいたいそうだけど……。姫さまの味方って少ないからね」

「同感」

そう話していると、学院長のオスマンが、銃士隊を迎えにやって来た。

「アニメス以下銃士隊、ただいま到着いたしました」

「お勤め、ご苦労さまなことじゃな」

と髭をしごきながらオスマンは複雑そうな顔で呟く。

「戦とは言え、惨いもんじゃのう」

「こたびの戦を王政府は総力戦と呼んでおります」

「なにが、総力戦じゃ。もっともらしい呼び方をすればいいと言  
うものではない。女子供まで駆りだす戦に正義があるものか」

アニエスは冷たい目でオスマンを見つめる。

「では、貴族の紳士や兵隊が死ぬ戦いには正義があるのですか？」

オスマンは言葉につまった。

「死は平等です。女も子供も選びませぬ。それだけのこと」

アニエスはつかつかと本塔に向かって行った。

## 【サイド・コルベール】

研究室に戻り、椅子に座る。

私はしばらく考え事をしていたが……、いろんなものが雑多に積み上げられた机の引き出しを、首に下げた鍵を使って開けた。

その引き出しには小さな箱が入っている。その箱を取り上げ、蓋を開く。炎のように赤く光るルビーの指輪があった。目を凝らすと揺らめく炎がルビーの中に見える。

その炎を見ていると、二十年前の出来事がありありと蘇ってくる。脳裏に映る光景は、未だに色あせることなく鮮やかだ。その鮮やかに光る炎が……、私を責めさいなむ。一瞬たりとも、忘れることのなかった光景……。

私は研究室内を見回した。外観はみすばらしい掘っ立て小屋だが、ここには私の先祖伝来の屋敷や財産を売り払って手に入れた様々な道具や秘薬で溢れている。

それを見つめながら私は呟く。

「破壊だけが……、火の見せ場ではないのだ」

それを信じて、ここまで来た。そしてこれからも……私の罪が消えることはないが、それでも私の奪った命の十倍、

百倍の人間を助けたい…………。

「…………授業だな」

こうして私は研究室を後にした。

### 【サイド・アウト】

銃士隊の宿舎として割り当てられた火の塔の前に、銃士隊の隊員二人が見張りにマスケット銃をかついで立っていた。軍務で駐屯する以上、歩哨を立てるのは当然の措置である。月明かりの下、何か動く気配がした。二人の隊員は気配に気づき、銃に弾をこめて、暗闇に目を凝らす。誰何しようと口を開いた瞬間、二人同時に喉を風の魔法で切り裂かれ、崩れ落ちる。どすん、と倒れそうになった体が物陰から出てきた人影に支えられ、音を立てぬように地面に横にする。

「隊長、こいつら女ですぜ。しかもまだ若え。もったいねえことしましたね」

一人が笑みを浮かべて隊長と呼ばれた男に告げる。

「俺は昔の貴族のような、男女差別論者じゃない。平等に殺すしてやるわ」

「貴族のガキどもは殺しちゃダメですよ隊長。人質に取るんですから」

「それ以外ならいいだろう?」

隊長と呼ばれた男は杖を弄りながら、楽しそうな声で呟いた。  
地図を持っていた隊員が告げる。

「隊長、目標は三つです。本塔、そして寮塔、そして、こいつらが駐屯しているらしきこの塔です」

「寮塔は俺がやる。ジャン、ルドウィヒ、ジェルマン、ついてこい。ジョブニ、四人を連れて本塔をやれ。セレスタン、残りを連れてこの塔だ」

メイジたちは頷いた。



タバサは妙な気配に目を覚ました。　急いでキュルケの部屋へ向かうタバサ。　するとちょうど、キュルケも出てくるところだった。

「なんか、来たわよね？」

「変な気配がする」

「………みたいね」

二人は頷きあつて、とりあえずルイズの部屋へ向かった。

部屋の前にきたキュルケとタバサは扉を叩いた。

「うーん。　何よこんな遅くに、用があるなら明日にして」

寝惚けた声が返って来たので、キュルケは扉に【アンロック】をかけて、入った。

部屋に入るとベッドに膨らみがある。

「ルイズ起きて、なんか変よ」

「うーん。 何よこんな遅くに、用があるなら明日にして」

さつきと同じ言葉が返ってきたので、キュルケとタバサは怪訝な顔をする。

キュルケが膨らみをゆする。

「うーん。 何よこんな遅くに、用があるなら明日にして」

「……………!」

流石におかしいと思ったキュルケがシーツをはがすと……………

「うーん。 何よこんな遅くに、用があるなら明日にして」

妙な字が書かれた紙が大きな人形に張られて寝かされており、紙から声が出ていた。

「……………なによこれ？」

「おそらく、どこかに出掛けた。これは身代わり」

「まったく……まあ良いわ。私達だけでも、軍隊が相手でもない限り、大丈夫でしょ。一旦様子をみましようか」

「賛成」

そう言つと、二人は夜の闇に紛れていった。

一方、部屋に居なかつたルイズは何処に行つたかと言つと……

とある場所にある酒場。そこに、長身の女が一人現れた。

女はフードを目深にかぶつていたので、顔の半分しか見えなかつたが、それだけでもかなりの美人に見えた。こんな汚い酒場に、こんな綺麗な女が一人でやつてくるのは珍しい。店内の注目が彼女に注がれる。しかし、そんな視線を意に介した風もなく、ワインと肉料理を注文すると、隅っこの席に腰掛けた。

幾人かの男達が目配せをしながら立ち上がり、女の席に近づいた。

「お嬢さん。一人でこんな店に入っちゃいけないよ」

「そぞ。 あぶねえ連中が多いからな。 でも、安心しな。 俺たち  
ちが守ってやるからよ」

下卑た笑いを浮かべながら、男が女のフードを持ち上げた。  
切れ長の目に、細く、高い鼻筋。 そこにいたのは、ルイズたちによつて捕らえられたハズの【土くれ】のフーケであった。

「こりゃ、上玉だ。 見るよ、肌が象牙みたいじゃ……」

男は最後まで言葉を言えなかった。 いつの間にか、喉に杖が突きつけられていたからだ。 同時にフーケから、プレッシャーが発せられる。

「ひっ」

「……失せな」

そう言うと、男たちは逃げていった。

運ばれてきた料理を食べていると、テーブルの向かい側に、桃色の髪の女がやって来た。 ルイズだ（大人の姿）。

「お待たせ、マチルダ。 待たせたかしら？」

「ふん。それほどでもないよ」

ルイズは追加で料理を注文し、一緒に食べ始めた。一通り食べ終わると、フーケ・・・マチルダが話始めた。

「どうする？　ここで話しちゃ不味いんじゃないかい？　部屋に移動するか？」

「問題ないわよ。　ただの世間話にしか聞こえないようになってるわ」

「フ・・・まあいいよ。　じゃあ仕事の話だ。　クロムウエルは【アンドバリ】の指輪で、どうやら軍を操っているようだ。　本人は【虚無】だといっていたがね。　それと、さらに裏にはどうやらガリアの影が見え隠れしているようだよ」

「やっぱりガリアか・・・。　となるとアーウエルンクスは・・・まあ良いわ。　それで今、クロムウエルは何処に？」

「アルビオンの首都ロンディニウムの南側にあるハヴィランド宮殿にいたね。　多分今は指揮のために、戦場に近い、赤レンガの指令部にいるハズだよ」

「・・・わかったわ。　ありがとう。　これが今回の報酬よ。」

それともう密偵もいいわ。 孤児院に顔を出してあげなさいよ」

「そうかい……ってこんなにいいのかい？」

「ふふふ、指輪のありがたかっただけで、十分なのに、裏まであ  
ばいてくれたからね。 それにそれなりに危険だったでしょ？」

「それじゃありがたく使わせてもらおうとするよ」

「……それじゃ、学院を抜け出して来たから私はこれで。  
また縁があれば会いましょ」

そう言っつてルイズは立ち上がった。

「……ふん。 それじゃあね。 あんたには感謝してるよ」

マチルダの言葉に、ルイズは振り向かず、手を上げて答え、夜  
の街に紛れて行ったのだった。

## 第22話 人質(2)

「聞け！ 賊ども！ 我らは陛下の銃士隊だ！ 我らは一個中隊で貴様らを包囲している！ 人質を解放しろ！」

アニエスは十人ほどしかいないのを誤魔化し、はったりをかけるが、食堂に立てこもった賊からは笑い声が聞こえる。

「銃士ごとき、一個中隊いても痛くも痒くもないな！」

「その銃士に貴様らは四人失っているんだぞ。 おとなしく投降すれば命までは取らぬ」

「投降？ 何をいつている、今から楽しい交渉の時間ではないか。 さて、ここにアンリエッタを呼んでもらおうか」

「陛下を？」

「そうだ。 とりあえず、アルビオンから兵をひくことを約束してもらおう。 我が依頼主は土足で国土を汚されることが嫌いらしいのでな」

通常、人質程度で軍が引き返すことはない。しかし、さすがに貴族の子弟が九十人以上も人質にとられては、話は別だ。本  
当に撤退もあるかもしれない。

「覚えておけ！　ここに呼んでいいのは、枢機卿かアンリエッタだけだ！　それ以外がきたら一人につき、一人殺す。いいな？　五分で決める！　アンリエッタを呼ぶのか、呼ばないのか。五分たつても返事がなければ一分にことに一人殺す」

アニエスは唇を痛くなるほど噛み締めた。

その時、後ろから声がかげられた。

「隊長殿」

アニエスが振り返ると、そこにはコルベールが立っていて、呆然とした様子で食堂を眺めようとした。

「いったい何事だ？」

「見てわからんか？　お前の生徒が、アルビオンの手のものに捕まったのだ」



「コルベールはひよいと顔を出して、食堂の前に立ったメイジの姿に気づき、顔を蒼白にした。」

「さがつている」

うるさそうに、コルベールを下がらせるアニエス。

「ねえ、銃士さん」

ついで後ろから声がかげられた。 キュルケとタバサの二人が立っている。

「お前たちは生徒か？ よくもまあ無事だったな」

「あたしたちにいい作戦があるんだけど……」

「作戦？ どうするんだ？」

キュルケとタバサは、アニエスに自分たちの作戦を説明した。聞き終わったアニエスは、にやっと笑った。

「面白い。それでいくか」

話を聞いていたコルベールは反対する。

「危険すぎる。相手はプロだ。そんな小技が通用するとは思えん」

「でも、このまま何もしなければ、誰かが殺されるわよ？」

キュルケの返答にコルベールは言葉を詰まらせた。

椅子に座っていた隊長と呼ばれる男は、テーブルに置かれた懐中時計を見つめた。針ががちりと動く。

「時間だ。返事はまだこないな……恨むなよ」

そう言って杖を掲げた。その瞬間、食堂の中に小さな紙風船が飛んできた。全員の視線がそこに集中する。

カッツツツツ

風船が爆発し、激しい音と光を放つ。 まともに光を見てしまったメイジが何人が顔を押しさえる。 そこに、キュルケとタバサ、マスケット銃を構えた銃士隊が飛び込もうとした。 作戦は成功するかに見えたその時、キュルケたちがけて、炎の弾が何発も飛んできた。 キュルケとタバサは舌打ちをしながら避けようとしたが、炎の弾は至近距離で爆発し、衝撃波で吹き飛ばされてしまった。

地面を削りながらキュルケとタバサは着地した。

「くっ」

「・・・ッ」

しかし、二人は膝をつく。 障壁を張っていれば、結果は違っていただろうが、今の二人の肉体強化では先ほどの衝撃に耐えられなかった。 脳が揺らされ、立ってられない。

「回復する際はやらんよ」

男が詠唱する。 その時、キュルケは気づいた。 男の眼球がびくりとも動かないことに。

（ッ!?!? 盲目ですって!）

炎の弾が再び放たれる。 キュルケは腕に魔力を集中。 交差させ、衝撃に備えるが…… 炎の弾は襲って来なかった。

「わたしの教え子から、離れる」

キュルケが横を見ると、コルベールが杖を構え、立っていた。

「おおおお……この温度はコルベール。 コルベールではないか」

コルベールの表情は変わらない。 かたくなに男をにらんでいる。

「俺だ！ 忘れたか？ メンヌヴィルだよ隊長殿！ おお！ 久しぶりだ！」

「貴様……」

「何年ぶりだ？ なあ！ 隊長殿！ 二十年だ！ そうだ！」

どういうことだ？ と生徒たちの間に動揺が走る。



いた。

「最高の舞台を用意してやったぞ！ 隊長殿！ もう逃げられない！ 身を隠せる場所もない！ 観念するんだな」

コルベールは大きく息を吸い込んだ。そして、闇の中のメンヌヴィルに向かって口を開いた。

「なあメンヌヴィルくん。降参してほしい。わたしはもう、魔法で人を殺さぬと決めたんだ」

「おいおい、ボケたか？ この状況が理解出来ないのか？」

「………ダメかね」

「しつこいやツだ。指先からローストしてやる」

そう言って、メンヌヴィルは呪文を唱え始める。哀しそうに首を振り、コルベールは上空に向けて杖を振った。小さな火炎の弾が打ち上がる。メンヌヴィルの呪文が完成しようとした瞬間……。空に浮かんだ小さな火炎が爆発した。一瞬で巨大に膨れ上がる。

【錬金】により、空気中の水蒸気を気化した燃料油に変え、空

気と攪拌する。そこに点火して、巨大な火球を作り出す。巨大な火球はあたりの酸素を燃やし尽くし、範囲内の生き物を窒息死させるのだ。【爆炎】と呼ばれる残虐無比な攻撃魔法。呪文詠唱で口を開いていたメンヌヴィルは、一気に肺の中から酸素を奪いとられ、窒息した。

口を押さえながら身を伏せていたコルベールは体を起こし、倒れたメンヌヴィルに近寄った。

「……………蛇になりきれなかったな。副長」

隊長が倒されたことを知ったメンヌヴィルの部下たちは動揺した。その隙を逃さず、再び突入する。一人、また一人と食堂に立てこもるメイジたちは倒されていった。

その中で、アリエスは一人のメイジに剣を突き立てるが、抜けなくなってしまう。そんなアリエスの背に向けて呪文が飛ぶ……………。キュルケもタバサも他の銃士たちも、咄嗟に反応出来ない。そこに黒い影が飛び込んできた。アリエスの前に立ち塞がり、体で魔法の矢受けて、呪文を唱える。杖の先から出た炎の蛇が、魔法を飛ばしたメイジの杖を焼き尽くす。

「……………大丈夫か？」

アニエスは思わず頷いた。瞬間、コルベールはごぼっと血を吐いて地面に倒れこむ。生徒たちが慌てて駆け寄り、【治癒】の呪文をかけるが、深手である。そんな中、我に返ったアニエスがコルベールに剣を突きつけた。

「ちょっと！ 何してるのよ！」

キュルケが怒鳴る。

「貴様が……魔法研究所実験小隊の隊長か？」

コルベールは頷く。

「教えてやろう。わたしはダングルテールの生き残りだ」

「……そうか」

「なぜ我が故郷を滅ぼした？ 答えろ」

「やめて！ 怪我してるのよ！ しゃべらせないで！」



必死に魔法を唱えていたモンモランシーがわめく。

「答える！」

少しの間をおき、コルベールは答えた。

「……………命令だった」

「命令？」

「……………疫病が発生したと告げられた。焼かねば被害が広がると、そのように告げられた。仕方なく焼いた」

「バカな……………。それは嘘だ」

「……………ああ、後になって知った。要は新教徒狩りだったのだ。女も子供も見境なく焼いた。許されることではない。わたしは軍をやめた。二度と炎を……………、破壊のためには使うまいと誓った」

「……………それで貴様が手にかけて人が帰ってくると思うか？」

コルベールは首を振り、ゆっくり目を閉じた。

周りで魔法をかけ続けていた「水」の使い手も、次々に精神力をきらして気絶していく。

アニエスはコルベール目掛けて剣を振り上げた。しかし、コルベールを庇うように、キュルケが覆い被さった。どこまでも真剣な顔で、キュルケは言った。

「お願い、やめて」

「どけ！ 二十年だ！ 二十年もこの日を待っていたんだ！」

「お願いよ。 お願い」

「どけ！」

アニエスとキュルケがにらみ合った。キュルケがはつとした顔になり、コルベールの手首を握った。

「どけと言っている！」

アニエスの言葉にキュルケは首を振り呟いた。

「……死んだわ」

その言葉にアニエスは膝をついた。その体が小刻みに震えている。

「恨むなどは言わないわ。でも、せめて祈ってあげて。確かにコルベール先生はあなたの仇かもしれないけど……、あなたを救った命の恩人でもあるハズよ」

アニエスは力なく立ち上がり、一言三言、言葉にならない何かを呟く。そして剣を振り下ろした。剣はコルベールの横の地面に突き刺さる。きびすを返し、アニエスはゆっくりと歩き去った。

アニエスが歩き去ったあと、キュルケはコルベールの体を運ぼうとして、その指に光るルビーの指輪を見つけた。そのルビーをみていると、キュルケの目から涙がこぼれた。あんなに小バカにしていた自分を「わたしの生徒に手を出すな」と言っただけで、守ってくれたのだった。素直な気持ちで、キュルケはしばらく泣いた。

とある街のとある通りをルイズは歩いてた。深夜で他に誰もいない。

「で？ どうするんだ相棒？」

背負ったデルフリンガーが問いかける。

「そうね……。この戦争の裏にアーウェルンクスがいることはわかった。【アンドバリ】の指輪のこともあるし、終わらせに行きましようかね……。」

「へっ、戦場行きか！ 俺を使ってくれよ。最近全然出番がないんだよ！」

「そうね、自分の腕に魔力刃纏わせるのも面倒だし、これからは出来るだけ使ってあげるわよ」

「そうかそうか」

「ところでデルフ」

「なんだ相棒？」

「あんだ、魔法を吸収出来るでしょ？」

「ああ？ …… あゝ確か出来たかしんね。忘れてたぜ」

「まったく、ボケてるわね」

「そりゃ、しょうがねえよ。なんせ、六千年前に作られたんだからな」

「へ」。ま、わたしは実際、素手での戦いのほうが慣れてるからね。本当に強い相手のときは使わないかもしれないわ」

「そりゃねえぜ相棒」

「……」

なにやら考え込むルイズ。そうして歩いていると、もの影から、先ほどマチルダに追い払われた、男たちが出てきた。

「へっ、こりゃ上玉じゃねえか。さっきは失敗だったが、今度はそうはいかねえ」

げらげら男たちは笑う。そんなやつらは無視するように、ルイズは通り過ぎようとした。

「まちなってんだよお嬢さん」

男がルイズの肩に手をかけようとした次の瞬間……

ドシュツ……ドカツ……バキバキツ……

「……あ」

ルイズが気づくと周りにはピクピクしている、ボロ雑巾のようなものが倒れていた。

「あ、って気づいてなかったのかよ」

デルフリンガーが呆れたように言う。

「しょうがないじゃない。足元に落ちてる小石を蹴っ飛ばしたって気づかないわよ」

「小石か……、まあ実力から言っただけのぐらい差があるな」

「んなことはどうでも良いわよ。さて、【アンドバリ】の指輪を奪還して、ついでにガリアとアーウェルンクスの動向を探るってとこかしらね、今回の目標は……」

「忙しくなるな。ま、相棒ならどおってことないか」

「どおかしらね。あいつが相手となると、一筋縄じゃいかないでしょうね……だから力を貸してねエヴァ？」

「ふん、ナギが手こずった相手か……面白い」

懐の巻物からエヴァが出てくる。

「それじゃあ近いうちに、行きましようか。 . . . . 戦場へ」

こうして二人と一本は闇に消えて行ったのだった。



## 幕間 そして戦場へ

トリステインの首都トリスタニアでは、十七歳の女王が執務室で目を瞑りながらある人物を待っていた。

「陛下。 わたしです」

枢機卿マザリーニの声だった。 アンリエッタの執務室に入ってきたマザリーニは、呼び出された理由を考えて、眉をひそめた。

「忙しいなか、呼び出してしまって、申し訳ありません」

「いえ………。 一体なんの、ご用件ですか？」

アンリエッタに促され、席に着きながら、マザリーニは問いかけた。

「いえ。 簡単なことです。 あなたが今回の戦争をどう思っているのか、聞きたかったのです」

つい先日まで戦争に反対していたアンリエッタが、急に肯定的

になったので、マザリーニは何か怪しんでいたのだ。眉をひそめながらも答える。

「昨日、我が連合軍がシテイオブサウスゴータにて、交戦を始めたとの報告がありました。．．．やはりわたしは今回の戦には反対です。今からでも包囲作戦に切り替えるべきではありませんか？」

「．．．．．そうですね」

背を向けていたアンリエッタがマザリーニに振り返る。

「．．．．．君にもやはり退場してもらおうか」

「!?!?!?!」

振り返ったアンリエッタが発した言葉は、何故か青年の声になっていた。衛兵を呼ぼうと、マザリーニは口を開くが．．．．．

「かはっ」

一瞬でアンリエッタは背後をとり、手刀で意識を刈り取った。

「……まったく。君のご主人はいつたい何を考えているんだろうね？ シェフィールド」

そこに立っていたのはアンリエッタではなく、白髪の青年アーウェルンクスであった。何もないところに話しかけた彼だったが、返事が返ってきた。

「お前がご主人様の考えをしる必要はない」

現れたのは全身にぴったりとした黒い服を着たシェフィールドと呼ばれる女だった。

「ふっ、そうかい。まあ僕たちの害にならないならどうでもいいがね」

シェフィールドは気絶したマザリーニ枢機卿の手をナイフで少し切ったかと思うと、小さな人形にその血を垂らした。すると、人形がマザリーニになる。

「これでよし。こいつは前の二人のところに送ってくれ」

「了解」

アーウェルンクスが手をかざすと、本物のマザリーニは水に包まれて消えてしまった。

「用はすんだかな？」

「ああ。お前はもうしばらく、女王に化けててくれ」

「………まあいいが。いいのかい？ 女帝が現れたら、おそろく一瞬で落とされるよ？ たしかレコン・キスタだっけ？」

「ふん。その辺は抜かりないさ。お前がくすねたあいつの血もある」

「ふむ、そうか。なら油断しないことだ」

するとアーウェルンクスはアンリエッタに変わり、シエフィールドも姿を消したのだった。

「……はは、はははは。まさか、こんなことになってるなんてね」

早朝。ルイズが学院に戻って目にしたのは荒れ果てた中庭や寮塔だった。なにがあったのか見回していると、タバサやキュルケ、重傷らしきコルベール先生がいた。周りには治療で精神力を切らしたのか、水魔法が得意な女生徒たちが気絶している。ルイズは近寄るとキュルケとタバサが気づいた。

「いったいど「ルイズツ！どこ行ってたのよ！いえ、そんなことはどうでも良いわ。コルベール先生を治して！」……わかったわ」

ルイズが【治癒】を唱える。するとコルベールの顔色が良くなっていた。

「それで？なにがあったのよ？」

ルイズの問いにキュルケが答えた。レコン・キスタの襲撃。庇ったコルベール。

「……なるほど。ふふふ、どうやらクロムウェルは命がいらないようね。わたしの生活空間にまで戦場にするなんてさ」

俯いて肩を震わせるルイズ。

しばらくするとオスマン氏がやって来て襲撃者たちの処理、学院の修復などが始まったのだった。学

夜。一通りの後始末が終わったあと、ルイズたちいつものメ  
ンバーは何故かタバサの部屋に集まっていた。ルイズがきりだす。

「わたしとエヴァは戦場に行って、ぱぱと水の精霊が言ってた指輪を取り返してくるわ。ついでにレコン・キスタも潰すけど」

自分の生活空間までちょっかい出されて、怒り気味のルイズであつた。

「キュルケとタバサはどうする？ちなみにシエスタは親戚の手伝いで、アルビオンに行ったらしいわ」

「……ごめんなさい。今回はパスするわ。ジャンの静養のために、明日からゲルマニアに戻ると思うの」

「……ジャン？ 誰それ？」

「なに言ってるのよ。コルベール先生のことじゃ決まってるじゃない」

「……まあ、あんたの好みに口は出さないわよ。タバサは？」

「行く。代わりにひとつお願いがある」

「なに？」

「水の精霊に指輪を返す時、わたしも連れて行って欲しい。母さまを治す手がかりを知っているかもしれない」

「そんなこと？ 良いわよ。って言うか、なんにもしなくても連れて行くわよ。わたしとあんたの仲でしょ？」

「感謝」

「さてと。レコン・キスタとその黒幕に一泡吹かせてやりましょ  
うか！」

自分の部屋に戻り、出発の準備をし始めたルイズが口を開く。

「へっ！ 戦場か、うでがなるぜ！」

「うでとか無いけどな」

「細かいことは気にしちゃダメですぜ。 姐さん」

「細かいはないだろ？ ところでルイズ。いきなり戦場に行つてもいいのか？ 詳しいことは知らんが、ダメなんじゃないか？」



「ふふふ。その辺は姫さまに手紙送つたらすぐに返事が来たわ。許可します、だってさ」

「……………ついこの前まで、戦争反対派だったハズだが？」

「まあ、もう始まっちゃったし。早く蹴りがつくならそれにこしたことはないと思ったんじゃない？」

こうして、ルイズはこの世界で、初めての戦場へと向かって行くのだった。

## 第23話 突入（前書き）

感想、ありがとうございます。

まだまだ文章力が拙いですが、完結目指して頑張ります！

それでは23話です。

## 第23話 突入

ルイズ・エヴァ・タバサはシティオブサウスゴータの中央広場でベンチに腰掛け、道行く人々を見つめていた。

「……………張り切って戦場に着いたと思ったら、降臨祭で休戦とか……………なんなのよ」

「不様だな」

「まったくだぜ」

「……………」

降臨祭は十日ほど続くハルケギニア最大のお祭りである。この街を占領した連合軍は、誇らしげに胸を張って歩いている。休戦期間だからか、酔っ払って羽目を外して若い娘を追いかけ回し、貴族士官に怒鳴られるものもいた。そんなのを見てみると、ルイズはむしゃくしゃしてきて、ため息をついた。なんでわたしはこんなところで座ってぼんやりしているのだろう。と言うか、あんなに羽目を外して、敵が奇襲してきたらどうするのだろうか？ まあいいや、とりあえず飲みに行こう。

そんな風に思っていると、ルイズは後ろから声をかけられた。

「ルイズさん！ それに皆さんも、来たんですね！」

振り向くと、シエスタの顔が見えた。

「シエスタ！ 親戚の手伝いで、アルビオンに行ったって聞いたけど、まさか会えるとわね」

夜空に満開の花火がうち上がった。 降臨祭が始まったのである。

その頃、ルイズたちはと言うと……

「あ、雪だわ」

ルイズは酒を飲みながら呟いた。

「わたし、雪の降臨祭って夢だったんです……」

「そうなの？」

「ええ。ほら、タルブの辺りは冬でも暖かいものですから。あまり雪なんか降らなくて……」

「へへ、ってタバサ！ つまみだけ食べないですよ」

「はがっら（わかった）」

つまみを咀嚼するタバサ。

「は、速攻でクロムウエルのところを賈め込んで、今頃はもう戦争が終わってるはずだったのに……」

「ぼやく、ルイズ。すると、エヴァがデルフを掴んで、立ち上がった。」

「あれ？ どこかに行くの？」

「少しばかり、雪を見て来る」

そう言って、エヴァは店から出て行った。片手に酒瓶を持っている。

「ところでルイズさん」

「なに？」

「この降臨祭が終わったら直ぐに、戦争を終わらせに行くんですね？」

「まあ、そうなるわね。あくまでついだけど……貴女も来る？」

「ふふふ。その言葉を待ってましたよ。わたしも【紅き翼】のメンバーなんですからね？ 仲間ハズレはごめんです」

「わかったわかった」

そう言って、また酒を飲むが、顔をしかめた。



「おい、あそこにいるのは、ロシア連隊のやつらじゃないか？」

「そうだな……、何してるんだ？」

一個小隊ほどの連中は、宿の前に集まってこそそこそと何かしていた。

「おい！　そこで何してる！」

槍を構えながら二人の兵士は肩を叩いたが返事がない。こちらを振り向いた顔に、兵士は驚いた。魂を抜かれたような無表情だったのだ。次の瞬間別の兵隊がベルトにさした拳銃を無造作に抜き、兵士に向けて、引き金を引いた。どう、と倒れる二人の兵士。

しばらくして、巨大な爆発音が起こり、兵隊ごと宿屋を吹き飛ばした。

このような反乱があちこちで急に起き、シティオブサウスゴータに駐屯していた連合軍は崩壊した。ほどなく、ロンディニウムのアルビオン軍主力が動き出したとの情報が入り、全軍の撤退命令が出されたのだった。

周りがあわてて撤退している中に、ルイズたちもいた。ちなみに、一行はアルビオン軍の主力部隊に向かっている。　ちな



「ははは、まったく楽しませてくれるわね？　まさかこんなことになるなんてね」

「どうします？　ルイズさん。　まあ、聞かなくてもわかりますが・  
・・・」

「勿論、突っ切るわよ！　前衛を攪乱してやれば、連合軍が逃げきる時間も稼げるでしょうしね」

「はっ、正面突破たあおもしれえな！　腕がなるぜ」

「腕は無いけどな」

「【紅き翼】出撃よ！　皆行ける！？」

「はい」

「おつとも」

「当たり前だ」

「余裕」

「オツケー。　そんなじゃ行きましようか！」

シティオブサウスゴータの南西百五十キロに位置する丘の上。  
ルイズ一行はシルフィードに乗り、上空を旋回していた。

朝もやの中から、ゆっくりと地響きを伴って大軍が現れた。

その数、七万。

「言い忘れたけど、ヤバくなったたらみんな逃げてね？　こんなところで死ぬなんてごめんでしょう？」

ルイズの言葉に頷く一行。

「……………それじゃあ、気前良く先々攻撃と行きましようかね」

宙に浮かぶルイズ。　首をゴキゴキ鳴らす。　そこで、タバサ

がルイズに尋ねた。

「作戦は？」

「先ずはあの大軍の前衛を攪乱。その後、司令塔に突入して、ク  
ロムウエルから指輪を奪還。そんで退却。以上」

「相棒。思ったんだけどよ。それって作戦って言わなくねえか  
？」

「……さあ！ 突撃よ！」

朝もやをついて、突っ込んでくる一匹の風竜に一番最初に気づ  
いたのは、前衛の搜索騎兵隊ではなく、後続の士官の使い魔である  
フクロウであった。

「……竜一匹に四人だと？」

敵が数人であることに驚いている間に、竜の周囲が光った。すると、前衛の騎兵隊が宙を舞う。

「なっ！！！！」

驚いている間にまたもや竜の周囲が光る。こちらに向かってくる光線に気付き、杖を抜こうとしたが、間に合わず、腹に一撃を受けた。士官は意識を失った。

「おっと、デルフ！」

「おつよー！」

ルイズは視界一面に広がる魔法の弾幕を事も無げに時には避け、障壁で防ぎ、デルフリンガーで吸収した。今のところ、ダメージは皆無である。

エヴァの【氷神の戦鎚】で、兵士達が宙を舞う。

タバサの【氷槍弾雨】により、また兵士達が宙を舞う。

シエスタは【疾空黒狼牙】や気弾で竜騎士達を撃墜して行く。

ルイズは辺りを見回した。かなりの数が戦闘不能になっている。

「よし、そろそろいいわよ！ 私が広範囲魔法使うから、そしたら司令塔の方に行きましょう！」

「了解」

「わかりました！」

「やっとか、そろそろ飽きてきたところだったぞ」

「契約に従い 我に従え 光の女神」

ルイズの周囲が輝きだす。

「来たれ 邪悪を滅ぼす 輝く聖剣……」

周囲の光が様々な剣を型どる。

「幾百幾千と重なりて 走れよ閃光…… 【聖なる剣群】！！！！」

ルイズが手を振り下ろすのと同時に、無数の剣が兵士達に降り注ぐ。一本一本が五メートルはある、光の剣が降り注いでくるのである。

ほどなくして、前衛は瓦解した……

七万の軍隊を突破し、ルイズ達は司令塔に向かった。目と鼻の先に赤レンガで建てられた司令塔があるのだが……

「……なんで守りがこんなに薄いのか？」

ルイズが呟く。まったくくない訳ではないのだが、守りが薄すぎるのである。

「反撃はないと思ったんじゃないですか？」

「うーん………？」

シエスタの言葉にルイズは首を捻るが、考えても仕方ないと言  
う結論になり、突入したのだった。

「………やっぱりね」

ルイズ一行が司令塔の正面ゲート付近まで来ると、突然地面に  
無数の魔方陣が現れたのだ。

魔方陣から無数の魔物が召喚される。

「先に行け、ルイズ。 クロムウェルとか言う奴に逃げられたら面  
倒だ」

「………わかったわ。 よろしくねエヴァ、タバサ、シエスタ」

そう言い残し、ルイズは司令塔の中に入って行った。

「さて、気を引き締める。今までの奴等とはレベルが違うぞ」

「了解」

「わかりました！」

「きゅい 私も戦うのね!!」

魔物達との戦闘が始まるうとしたその時、黒いローブに身を包んだ男が現れた。

「さて、【闇の福音】の複製か…… どれ程のものか確かめさせて貰おう……」



「貴様は……!?」

「お、お前！ 何者だ！」

「ええいつ！ 衛兵は何をしてい」【眠りの霧】！

「……」

司令塔の中にある部屋の一室にいた指揮官らしき人達を眠らしたルイズはクロムウエルを探していた。なにやら一番偉そうな格好をした男の指を見ると、かなりの魔力がこもった指輪をしていた。ルイズはその指輪を抜き取ると懐に入れた。

「ふう……、【アンドバリ】の指輪奪還成功ね」

ルイズはさっさと撤退しようとして転移魔法の準備をしていたのだが……、不意に背後に気配を感じた。

「くッ! ! ! ! !」

飛んできた拳によって、吹き飛ばされるルイズ。壁を突き破り、広いホールまで飛ばされてしまった。ガードした腕に痺れを感じ、敵の強さを感じる。

「よっこそ、【虚無】の担い手」

ホールの奥から若い女の声が響く。

「………あんたは？」

「ふふふ、私はシェフィールド。あなたには死んでもらいたくはないよ。………自分自身と戦ってね！」

すると壁の穴から桃色の髪の女が出てきた。ルイズが良く見ると、その女はルイズの元の姿をしていた。何故か黒い修道女の服を着ている。

「……私のコピー？ 厄介な」

ルイズとコピーの凄まじい気迫にホールの壁が震え、床には亀

裂が入る。

ルイズがゆっくりと背負っているデルFRINGERに手を伸ばし、抜き払う。

「……………行くわよ。　デルフ」

「おっよー！」

睨み合う二人のうち、先に動いたのはコピーの方だった。二十メートル程の距離を一瞬でなくし、光の剣を腕に纏わせ、凄まじい速度の斬撃をルイズに浴びせる。

「疾ッ！！！！」

ルイズもデルFRINGERで応戦する。常人の目には映らない程の速さ……………一瞬で数十合打ち合ったルイズとコピーはお互いに拳に魔力を集中。拳と拳がぶつかり合い、周囲に衝撃波を撒き散らす。

「ぐっ……………このままじゃ建物が持たないわねッ！　デルフッ  
「！」

「おっッ！！！！」

煙の中から黒と白の竜巻、【虚無の疾風】が飛来する。デルフリンガーの魔法吸収と障壁を全力展開し、なんとか防ぎきる。

「デルフツ！」

「何だ！ 相棒？」

「あんだ、魔法が吸収出来るんだったら、あの纏った光剣を吸いなさいよ！ そしたら一発でケリがつくわ！」

「わりつ、俺様あ言つのは吸収出来ないの。 【魔法の射手】とかが飛んでくる系のは出来るけど」

「ちっ！ しょうがないわ・・・ねツ！！！！」

数十本の光の槍をデルフリンガーで切り払い、吸収し、コピーに肉薄する。 避けきれずに数本かすめ、皮膚が裂ける。

「らいつ・・・こーけんツ！！！！！！！！」

「……………」

ルイズが放った光球とコピーの【浄化の剣】がぶつかり合い、  
辺りが光に包まれる……………」

「来たれ 氷精 風の精 氷を纏いて 吹けよ雪山の嵐 【氷結  
の吹雪】」

固定

掌握

「ぐっ……………!!!!」

術式兵装【疾風霧氷】

タバサの身体が蒼白く輝く。

周りには召喚された魔物がひ

しめいている。

「ふっ！！！」

魔力を纏わせた杖や拳で突き、風のような速さで魔物を打ち倒していく。【疾風霧氷】の効果で相手は凍りついていく。しかし……

「……数が多い」

すでに数十体を倒したタバサだったが、敵が減らない。一体どうするか迷っている。

「お姉さま、危ないのね！」

【春の嵐】！！！！

タバサの後ろに迫っていた魔物をシルフィードが吹き飛ばす。シルフィードは人間形態に変身している。持ってきた服に着替え、夏休みにルイズに教えてもらった魔法を使って奮闘している。

「助かった」

「きゅい！ まかせてなのね」

タバサとシルフィードが話していると、シエスタが現れた。

「はあああああっ 【狼牙双掌打】！！！！」

両手に狗神を集中させ、凄まじい威力の双掌打を魔物達に喰らわせる。

「まだまだ行けますよねっ？」

「もち」

「きゅいきゅいー！」

二人と一匹は背中合わせになった。

「……………あんまりやりたくはないんですけど」

狗族獣化

メキメキと音をたてながら、シエスタの身体中から獣の毛が生え、狼の耳と尻尾が出てきた。

「さて、この状態になると手加減が出来ないので、魔物さん達、ごめんなさいね？」

そして再び魔物達との戦闘が始まった。

一方こちらはエヴァ。黒ローブとの戦闘が続いていた。

(強い……な)

「ふんっ」

視界一面に影を凝縮した黒い短剣が投擲される。



「ぬッ!!! なめるなッ!!!」

【魔法の射手・闇の百一矢】！

相殺しきれなかった短剣がエヴァの足元に突き刺さる。

「メラーン・カイ・スファイリコン・デズモーターリオン」

短剣が膨れ上がり、エヴァを包み込もうとするが……

「……があッ!!!」

エヴァは突き破り黒ローブの男に接近する。しかし、男の影から巨大な腕が飛び出し、【断罪の剣】は止められてしまう。

「……複製で数段劣るとはいえ、一筋縄ではいかんか。闇の福音」

「くッ!!!」

男の影から伸びる無数の触手を跳びすさって避けるエヴァ。

【断罪の剣】を纏い、迫り来る触手を切り払う。

「ふむ……これならどうだ？」

影から巨大な腕が再び出てくる。今度は刀身が二十メートルはある片刃の剣を持っていた。

「ふん！面白い」

大気を切り裂き、大剣が振り下ろされる。

【エクスキューショナー・ソード】！

二つの刃がぶつかり合い、辺り一面に破壊の嵐を巻き起す……

・  
・

「はあ・・・はあ・・・はあ。　ふう・・・、なかなか強かったわね。　流石は私のコピー。　でもオリジナルには数段劣るような？」

ルイズは身体中に細かい切り傷を負っていた。　特に左腕は切り裂かれ、まだ血が止まっていない。　足元には真つ二つになった人形が転がっていた。

「まさか、スキルニルのコピーを倒すとは・・・。　恐ろしいわね？」

「ふん。　シェフィールドと言ったっけ？　どうする？　降参する？」

「ふふふ、まだまだよ。　一体にあなたは苦戦した。　ならば・・・  
・・・三体ならばどうかしらッ！」

女は懐から小瓶を取り出すと、スキルニルと呼ばれた人形にそれを垂らした。　ルイズのコピーが三体现れる。

「いやいや流石だよ。　私はマジックアイテムならなんでも使いこなせるハズなのに、あなたのスキルニルは三体が限界だ・・・。　いったいどうなってるんだい？」

ルイズは新たに現れた、三体のコピーを見て舌打ちした。

「まったく、切り札は最後までとっておこうと思ってたけど、そんなことも言ってもらえないわね？」

するとルイズはデルフリンガーを鞘に戻した。

「おい、相棒！ どおしたんだ？」

「……ぐっ……グ、ガアアアアッ！！！」

黒い霧がルイズを覆っていく。霧が晴れると、そこには髪が銀髪になり、魔族化したルイズがいた。

「サア、イクゾ？ 私ハ素手ノ方ガ強イカラナ？」

一瞬で光の槍を数十本形成し、コピー達に投げつける。が、コピー達も【魔法の射手】で応戦する。

コピーの一体の背後に回り込み、数を減らそうとするが、残りの二体が庇い、なかなか数を減らせない。コピー達はルイズを包囲するかのようになり、動き回った。二体がルイズの回避場所を制限し、一体がそこに強力な魔法を叩き込むのだ。

「【魔法の射手・光の千一矢】」

「クッ！」

「【雷の暴風】」

「グウウウッ！」

何とか障壁で耐えるルイズ。

「ナメルナッ！！！」

【虚無の疾風】

ルイズは魔族化で得た膨大な魔力を使い、ケリをつけようとしていた。しかし、腐っても相手は自らのコピーが三体。一体だけならば、それほど苦労しなかっただろうが、上手くコンビネーションを使われ、なかなか決めることが出来ない。

「『虚無の疾風』」

「グウウウツ!!!」

僅かに打ち負ける。

三体のコピーによる魔法で吹き飛ばされるルイズ。建物が耐えきれず、崩壊を始める。

「ここで死ぬがいい！ 虚無の担い手！ ……いや、化け物めッ」

そう言い残し、シェフィールドが姿を消す。

「チイイイツ！」

ルイズは追おうとするも、コピー達が立ち塞がる。

「ジャマダツ！」

一瞬で一体の背後に回り込み、拳を叩き込む。残り二体。ルイズが気付くと、既に光の槍に囲まれていた。

「又ウ・・・グッ」

拳で打ち払うも、払いきれずに、腹を貫かれる。しかし、ルイズはそのままもう一体に肉薄し、拳に魔力を集中。

【魔法の射手・収束・光の千一矢】！！！！

【魔法の射手】も乗せて、殴り飛ばす。残り一体。

「【闇の吹雪】」

「グッ！！！」

背後からの攻撃を何とか察知するが、避けきれず左腕がボロボロになる。この戦闘ではもう使えないだろう。

「マダ右ガアルツ！」

光の剣を纏わせ、一瞬で最後のコピーとの距離を縮めるルイズ。コピーも光の剣を纏い、ルイズに突っ込む。

「オオオオオオツ！」

「……………」

二人の影が一瞬交差する。

「……………グッ」

ルイズは肩から血を吹き出し、膝をつく。そしてコピーは……  
袈裟斬りに斬られ、元の人形に戻っていった。

「……………ふう。　なんとか倒したけど……………がはっ」

「おいつ、相棒！　大丈夫か？」

ルイズは全身に傷を負っていた。特に腹の貫通した傷と、左肩の切り傷、そして左腕が酷かった。魔力を回復に回していたが、ほとんど魔力が残っていなかったので、治りが遅い。すると外から砲撃の音が聞こえてくる。

「……………こりゃ不味いかもね……………ごほっ」

逃げようと立ち上がるが、吐血して、倒れてしまう。



「相棒ッ！！！」

天井が崩れて、迫ってくるが、ルイズは動くことが出来ない。  
その時、ルイズの懐から光が漏れだしてきた。何かと、取り出す。

「……………これはあの猫にもらった……………」

それはお守り代わりに持ってきていた、夏休みに黒猫にもらった鈴だった。

そして……………鈴が砕け、ルイズは光に包まれていった。

「ふむ。今回はこの勝負預ける。どうやら私の役目は終わったようだからな」

「……………なに？」

エヴァは怪訝そうな顔で黒ローブの男を見た。

「ふふふ、ではさらばだ」

そう言い残し、男は影に沈んでいった。

「待てッ!？」

エヴァが追おうとしたその時……、数百隻の戦艦が上空に現れた。

黒ローブの男が消えたことにより召喚された魔物達が消え、タバサやシエスタ、シルフィードが近づいてくる。

「……………あれは……………ガリアの戦艦!」

タバサが目を見開き呟く。

すると、司令塔に標的を定めたのか、無数の砲門がタバサ達の方を向く。

「ちッ! 逃げるぞ! 私に近寄れ」

「ルイズさんはどうするんですか！」

「あいつはそう簡単にくたばるたまじゃない。信じる」

影に潜って転移した直後、エヴァ達のいた場所を含む司令塔が砲撃にさらされ、瓦礫の山となった。

ルイズは光に包まれたと思ったら、辺りの景色が変わっていることに気がついた。いつの間にか、森の中にいたのだ。

「しほっ……ぐう……ここはいつたい？」

血が止まらないルイズは瓦礫に押し潰されるのは回避出来たが、そろそろ傷がヤバイと思い始めていた。

「生きてるか、相棒？」

「……生きてるわよ。こんなところでくたばってたまるもんですか。……………それにしても、あの黒猫はいつたい何者だったのかしら……………ごぶっ」

「喋るな相棒！ 今は身体の回復に専念しろッ！」

「そうね……………ぐッ」

ルイズが気に背中を預け座っていると、森の中から気配がした。座りながら、デルフリンガーを構えて身構える。

（追って？ いや、違う。でもトルル鬼とかだったらヤバいわね……………）

そんなことを考えていると、森の中から人影が現れた。その人影は金髪の少女だった。十五、六ほどだろうか。耳にかかった髪が揺れる。そこから、ツン、と尖った、人とは多少デザインが違う耳が覗いたのだが……………ルイズは少女の胸元から目を離せなくなっていた。

「……………バ」

「バ？」

ルイズの呟きに少女が反応した。

「バスト・レヴォリユーション！？ がふっ」

叫んだことにより、やっと塞がりかけていた傷が開き、ルイズは気を失った。

「え？ ちょっと、大丈夫ですか？ って、うわっ 酷い傷」

## 第24話 再会

「見事・・・、理不尽なまでの強さだ・・・」

「黄昏の姫御子は・・・どこだ？ 消える前に吐け」

どうやら決着がついたようだ。私の前にはボロボロのアーウエルンクスがナギに首を掴まれている。

「フ・・・フフフ・・・まさか君はいまだに僕がすべての黒幕だと思っているのかい？」

「なん・・・だと？」

次の瞬間、私達の目の前でナギとアーウエルンクスの二人が、閃光に貫かれる。

「!？」

「ナ・・・ナギイッ！」

「師匠っ！」

詠春の叫び声が聞こえた。私も叫びながら、ナギに駆け寄る。

「誰だ！？」

ラカンの声に振り向くと、そこには黒いローブを着た、不気味な存在がいた。凄まじい魔力を感じる。

「いかんッ」

### 最強防護

不味いと思い、私も障壁を全力展開するが・・・

ドッ！！！！ ガガガガガガガガガガガガッ！

「ぬうっっ」

「くっくっくッ！」

ナギの師匠、ゼクトの【最強防護】、私の展開した障壁、そしてラカンの両腕を吹き飛ばしても、衝撃波は止まらず、私達は吹き飛ばされてしまった。

「ぐ……バカな……」

「まさか……アレは……」

不気味な存在は転移して、何処かに向かって行った。

「待てコラてめえっ!!!!!!」

ラカンが叫ぶが満身創痍だ。私もラカン程ではないが、軽い傷を負っていた。しかし、そこで胸を貫かれた筈のナギが立ち上がった。

「任せなジャック」

「い……いけませんナギ！ その身体では」

「アル、お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」



「し、しかしそんな無茶な治癒ではッ」

「三十分もてば十分だ」

「ですがッ・・・」

すると、ゼクトも立ち上がる。

「ふふ、よかるう。ワシもいくぞナギ。ワシが一番傷も浅い」

「ふんっ、私も行くわよ！ まだまだ余裕なんだからね」

「お師匠・・・ルイズ・・・」

「ゼクト、ルイズ！ たった三人では無理です！」

「ここで奴を止められなければ、世界が無に帰すのじゃ、無理でもいくしかなかるう」



「しまっ！！！！」

全ての閃光を避けきったナギに極太の閃光が放たれた。私は満身創痍の身体に鞭を打って、なんとかナギの前に身体を滑り込ませる。

「後は頼んだわよ？」

そう言い残して、私はなけなしの魔力を全て注ぎ込み、障壁でなんとか閃光を逸らした。

「ありがとうっ！！！」

飛んでいくナギの後ろ姿を見送り、私は地面に落ちて行った・・・

「あでほっ」

と、目を覚ましたルイズは絶叫した。　　ぜえぜえ、と荒い息をついて、ほっとした声で呟いた。

「……………夢かあ」

ぼんやりとした頭で、先ほどの夢を反芻する。　　あの過去の激戦。私もなかなかヤバかったわね。　　と思いつながら、自分の状態を確認するルイズ。　　変身魔法は解け、元の二十代の姿に戻っている。　　傷はほぼ完治。　　包帯が巻かれているところを見ると、誰かが手当てをしてくれたのだろうか……

「……………それにしてもここは何処かしらね？」

そうルイズが呟いていると、部屋の扉が開き、金髪の娘が入ってきた。

「あ、目が覚めたんですね？　　調子はどうですか？」

その娘は粗末で丈の短い、草色のワンピースに身を包んでいたが、美しさを損ねるところか、逆に清楚さを際立たせていた。

「よかった。酷い傷だったから心配してたけど、こんなに早く治るなんて」

「私ってどのくらい寝てたの？」

「ほんの一日くらいですよ」

「……そう、なかなか無茶したもんね……我ながら」

小さくため息を吐いて、助けしてくれた少女にルイズは問いかけた。

「ところでここは何処なの？　っと、あなたエルフだったのね」

すると、少女は、はっ！と目を見開いた。髪の間から覗いた自分の耳に気づき、両手で隠す。

「し、しめんなさい」

「へっ？」

「でも、安心して。危害をくわえたりしないから。それに私はハーフなの」

ルイズは少し考えてから口を開いた。

「・・・ああ、別に私は種族の違いで怖がったりとかしないから安心なさい。・・・私も人間とは言えないしね」

「え？」

怖がられないことに驚いたのか、はたまたルイズの最後の言葉が気になったのか少女は目を見開いた。

すると、再び扉が開く。今度入ってきたのはルイズの知る人物だった。

「・・・やっとお目覚めかい？ まったく、なんの縁かね」

「・・・っ！ 本当、なんて偶然かしらね！ ってことは、もしかしてこの娘があなたの言ってた、ティファニア？」

入ってきたのは、【土くれ】のフーケこと、マチルダ・オブ・サウスゴータだった。

撤退したタバサ達はシルフィードに乗り、あらかじめ決めていた集合場所のラグドリアン湖周辺の宿に向かっていった。

「……ルイズさんは大丈夫でしょうか？」

心配そうな声でシエスタが呟いた。

「まったく、何度も言わせるな。お前もあいつの力は知っているだろう」

「そう。殺しても死なない」

タバサの言葉に、一行は微笑む。

「そうですね。なんたってルイズさんですもんね」

「……まあ、死ぬときは死ぬがな」

「って、そこは大丈夫って、言ってくださいよ！」

その後、エヴァの本体である巻物に刻まれたルーンを確認して、ルイズの生存を確信した一行であった。

無言。ただ無言でルイズはひたすら山のように積まれた食料を貪っていた。

「……あなた、少しはゆっくり食べないかい」

「ひがはりないのよ！（血が足りないのよ！）」

手を止めずに、マチルダの言葉に返事を返すルイズ。しばらくすると、満足したのかやっと手を止めた。

「ふ、もう食べらんないわ。これだけ食べれば大丈夫ね」



「……………その身体の何処に入るんだい？ 明らかに胃の大きさより食べてたよ？」

「女の子の身体には秘密がいっぱい詰まってるのよ」

「はっ、女の子って年じゃないくせによく言っよ」

「……………(怒)」

「んじゃあ、世話になったわね。 またなんかあったら連絡するわ」

食事が終わり、数時間。 ルイズはウエストウッド村の出入口に立っていた。 見送りにはマチルダとティファニアがきている。

「もう少しゆっくりしていかないのかい？」

マチルダが言った。

「仲間が心配してると思うからね」

「・・・そうかい。私はしばらくはこの村にいるから、用があれば連絡しな」

「わかった。それとティファニア」

「は、はい」

急に話を振られたティファニアは恥ずかしそうにしている。  
人見知りのようだ。

「ティファアって呼んでいいかしら？」

「え？」

「怪我してるところを助けてもらったしね。友達にならない？」

そう言って、手を差し出すルイズ。

「で、でも私、ハーフだけどエルフなんだよ？」

「大丈夫だって言ったでしょ。ほら」

手を差し出すルイズに、恐る恐るティファニアは手を伸ばし、二人は握手した。

「今度来るときは、私の仲間も連れて来るからね？ 大丈夫よ。そいつらもエルフかエルフじゃないかとか気にする奴らじゃないから」

「・・・あり・・・がとう」

初めて友達が出来たティファニアは目の端に涙を浮かべる。

「それじゃあ、またね」

「・・・うん。また来てね」

そして、ルイズはウエストウッド村を後にしたのだった。

## 第25話 合流

【サイド・ルイズ】

ラグドリアン湖の近くに転移して来た私は、とりあえず合流場所の【水辺の宿】と言う宿に向かった。しばらく歩き、目的の宿を見つけた私は、宿の主人に、仲間達のことを聞いた。

「女の四人組？ ああ、何日か前から二階の一番端の部屋に泊まっているよ」

「わかったわ。 ありがとう」

気の良さそうな女主人が答えてくれた。 どうやら、ちゃんと待っていてくれたようだ。 二階に上がって、一番端の部屋の扉をノックする。

「……………」

…………なぜか誰も出てこない。 しばらくしても反応がなかったから、無理やり開けようかとする、鍵がかかっていることに

気がついた。

私が部屋に入って見たものは・・・

「ルイズさんは、ルイズさんは・・・・・・・・」

「それで？」

「それで終わりです・・・・・・・・」

「そうだったのか・・・。しかたないだろう・・・・・・・・」

「あゝ、お肉がお空に飛んでるのね。きゅい」

「・・・・・・・・ZZZZ」

酔っ払いの集団だった・・・・・・・・部屋がやけに酒臭い。

シエスタとエヴァは意味のない会話をし、完全に酔っ払った状態で椅子にもたれている。人造精霊でも、酔っ払うんだと、逆に驚いた。テーブルに突っ伏して寝ているのはタバサだ。シルフイードは何やら肉がどうたらこうたらと寝言を呟き、半裸でベッドに横になっている。

いやね、心配かけたのは悪かったと思うけど、この状態はなん

なのよ・・・

このあと、全員が正気に戻るまで数時間かかった気がするの  
は私の気のせいだろうか？

【サイド・アウト】

無事合流したルイズ一行は、【アンドバリ】の指輪を水の精霊  
に返すために、ラグドリアン湖に向かった。酔っ払ったエヴァ  
たちを正気に戻すのに、だいぶ時間をとられたせいで、空には二つ  
の月がすでに浮かんでいる。

「水の精霊よ、指輪を取り返してきたわ。出てきて」

ルイズが湖の畔でそう言うと、水が泡立ち、ルイズの姿をかた  
どった水の精霊があらわれた。

「早かったな」

「あなたの時間感覚で言ったら、何でも一瞬でしょうが・・・  
はい、これがそうよ」

ルイズは懐から【アンドバリ】の指輪を取りだして、水の精霊に差し出した。すると湖から水の手が出て、指輪を取っていった。

「…………ふむ。本物だな。確かに受け取った」

そう言い残し、水の精霊は湖に沈んで行こうとした。そこでルイズが呼び止める。

「ちょっと待って。聞きたいことがあるの」

「なんだ？」

「人の心を壊す薬を知ってる？ それも、一時的にじゃなく、効果がずっと続くやつ」

しばらくの間を置いて水の精霊は答えた。

「知っている。確か、エルフの作る薬にそのようなものがあった筈だ」

「ッ……!! 本当!?!」

後ろで控えていたタバサが思わずと言ったように、声をあげる。

「本当だ。 我は人間のようには嘘はつかん。 永き時を生きる我が知らないことはないだろう」

「じゃあ、その薬の効果を打ち消すにはどうしたらいいか教えてくれない？」

「・・・ふむ、まあいいだろう。 指輪を取り返してくれたお前たちになら、教えてやってもいい。 方法は二つある」

「二つ？」

「そうだ。 ひとつはエルフが作る解毒薬を飲ませることだ」

「あいにくエルフに知り合いは・・・いない訳じゃないけどいないわね。 もうひとつは？」

ルイズは脳裏にアルビオンの森の村に住むハーフェルフの少女を思い浮かべたが、知らないだろうな、と思いを促した。



「うむ。もうひとつの方法は強い浄化作用を持つ【不死鳥の涙】数滴、【神龍木の葉】を一枚、そして我の身体の一部を調合したものを飲ませることだ。それを飲ませれば、エルフの薬を飲んだ者は治るだろう・・・ そうだな、お前たちが素材を集めるなら、我の一部をくれてやろう」

「え？ いいの？」

「ああ。お前たちには指輪を取り戻してもらったしな」

そう水の精霊が言うと、湖から掌に乗る程の大きさの小瓶が出てきて、ルイズのもとに飛んできた。

「それが我の一部だ。単なる者たちからは【水の精霊の涙】と呼ばれている」

「へ。ありがとう」

「感謝する」

「よい、これも礼だ。それではさらばだ」

そう言い残し、今度こそ水の精霊は湖に消えて行った。

「……それじゃあ一旦学院に戻って、図書館とかで材料のありかを調べましょうか」

ルイズの言葉にタバサが頷く。

「本当にありがとう。ルイズじゃなかったら、この情報を得ることはたぶん出来なかった」

「礼なんていらぬわよ。なんてったって、タバサは仲間なんだし。それに、治すって約束したしね」

ルイズの言葉にタバサは下を向いて、身体を震わせたのだった。

水の精霊に情報をもらってから三日がたった。ルイズ一行は学院に戻るとすぐに図書館にこもり、素材のある場所を調べた。その間、授業はどうしたかと言うと、戦争に行っていた男子学生達がまだ戻ってきていないため、しばらく休みになるとのことだった。なんとか不死鳥の住処と神龍木の在処を調べた一行は早速準備をして、素材を取りに行くことにしたのだった。

「何を書いてるんだ？」

エヴァが言った。時刻は早朝。ルイズは自室で机に向かい手紙を書いていた。着ている服はいつもの制服ではなく、黒のハイネック、そして黒いスカートの上からいかにも魔法使いっぽいローブ。デルフリンガーを背負い、完全装備のようだ。

「ん？ ああ、ちょっとマチルダにガリアを探ってもらおうと思っ  
てね。」

そう言うと、ルイズは伝書鳩に手紙を括りつけて飛ばした。

「ふん、ガリアか。 　　そういえば、あの司令塔を砲撃したのもガリアの戦艦だったな。」

「そうなのよね〜・・・、レコン・キスタの裏にはガリアがいた。  
なのに何で攻撃を・・・？ まあいいわ。 もう集まってる  
頃だから、正門に行きましようか。」

「ふふふ、まあせいぜい情報を集めるんだな。」

「へいへい……ほら行くわよ」

こうして、ルイズとエヴァは部屋をあとにした。

ルイズたちが正門に着くと、すでにシエスタ、タバサ、シルフィードがいた。タバサはいつも通りの制服だったが……

「うおっ、そのコート……カッコいいわね」

シエスタはいつものメイド服ではなかった。背中に【狗】と大きく刺繍が入った黒いコート、そして灰色のジーンズを着ていた。

「はいつ、今回はタバサちゃんのお母さんの病気が治るか治らないかかかってますからね！ 少し気合をいれてみました！」

全員集まったところで、ルイズがメンバーに言った。

「それじゃあ確認ね？ まず、エヴァ、タバサ、シルフィードが」

常世の森】の奥にあるって言う【神龍木】の葉を採ってきてね」

【常世の森】とはガリアとゲルマニアの国境沿いにある、広大な森だ。その広さはトリスティンとほぼ同じと言われる。凶暴な幻獣が蠢き、入った者が帰ってくることはほとんどないと言われている。

「んで、火竜山脈の最奥部に行くのが私とシエスタね！」

「はい！」

「わかったのね！」

「仕方ないな」

「了解」

「それじゃあ、期間は七日間で。見つけたら学院でまた合流ね？行くのはどっちも『行ったら帰って来れない』って言われような場所だけど、まあ私たちなら大丈夫でしょ？」

「ふっ、愚問だな」

「問題ない」

「きゅい 大丈夫なの・・・ね？」

こうして、タバサ組とルイズ組に別れ、一行は素材の採集に向かったのだった。

第25話 合流（後書き）

短いです。

第26話 素材集め(1) (前書き)

またまた短いです。



## 第26話 素材集め(1)

【サイド・タバサ】

今まで検討もつかなかった母さまの治療法が、やっと見つかった…… もう私を見てはくれないと思い、諦めかけていたけれど…… やっと見つかった希望の光、必ず【神龍木の葉】を見つけてみせる。

「お姉さま、落ち着くのね！ 魔力が漏れて、突風が吹いてるのね！」

いけない……、焦ってはダメだ。 闘いの場では焦ったものから死んでいくのだから。

「じめん」

そんなことを言いながら、私たちが【常世の森】に着いたのは昼頃だった。

「さて、着いたのはいいが、どうやって探すか？ タバサ、お前に何か案はあるか？」

エヴァが尋ねてきた。確かにこの広大な森から、たった数本しか生えていないと言う木を七日間で見つけるのは不可能に近い。しかし、私はあらかじめいろいろと情報を集めていたのだ。

「【神龍木】はこの森の奥深くにあり、強力な竜がその木を守護している」と本に書いてあった。本当かどうかは分からないけど、竜を探したほうが木を探すよりは簡単だと思う」

「ふむ……、それでは行くか。シルフィード」

「何なのね、大姉さま」

「大姉さま……、まあいい。とりあえず上空から、一通り見て見よう」

エヴァと私はシルフィードに乗り、上空から竜がいないか探すことにしたのだった。

「……いないな」

「いない」

「いないのね」

辺りが暗くなってきた。一日目と言うことで、早めに搜索を切り上げ、私たちは野営が出来るところを探すことにした。なぜ野営をすることになったのかと言うと……

「この地域一帯には天然の魔力妨害岩が多量にあるようだ。転移がうまく出来ん……しょうがない、いちいち戻るのも面倒だ」

と言うわけである。結局、今日は突き出た巨石の陰で野営をすることになった。

「ふむ、このままでは埒があかな」

「きゅいきゅいきゅい」

「……この方法だと、見つけるのは困難」



「そう言う大事なことは、先に言う」

「ごめんなさいなのね！ でも、私は召喚される前は住処から出たことなかったから、何処に住んでるかなんて知らなかったのね」

まったく・・・、まあいい。それより大事なものは

「【神龍木】が何処にあるかわかる？」

「そうだな、知っているのか？」

そう聞くと、シルフィード（人間形態）は考え込み言った。

「うーん、私が住んでいたところに精霊さんたちが良く遊びにくる木があったような気がするのね」

「精霊が？ と言うか見えるのか？」

エヴァが驚いたようにシルフィードに尋ねた。

「きゅい！ シルフィは風韻竜だから、風の精霊さんが見えるのね」

その日はもう夜も遅くなってしまったので、私たちは明日の朝にシルフィードの案内で、風韻竜の住処へ行くことになったのだ。た。

【サイド・アウト】

「ははッ、ははははッ　　ははははは、楽しいわね！　不死鳥さん？」

「ぬう、やりおるわ。　貴様、本当に人間か？」

「さあ、どうでしょう・・・ねッ！！！」

炎が飛び散り、光の槍が岩を貫く。　不死鳥が爆風を吹かせば、ルイズが【虚無の疾風】で押し返す。　不死鳥の身体は炎と化し、突っ込んで来るが、そんなのお構い無しとルイズが殴り飛ばす。

「がはッ・・・、バカな炎化した我を素手で殴り飛ばすだと！？」

「ふふふん、知らないの？　一定以上のレベルだと、精霊化はあんまり通用しないのよ？」

「なにをッ！ はあああああああああッ」

「はははッ・・・行くわよ？ おおおおおおおッ！！！」

そして辺りに爆風と閃光が再び撒き散らされた。

数時間前

ぱぱつと火竜山脈の麓に来たルイズとシエスタは早速、不死鳥がいると言う山脈の最奥部へと向かって行った。

「ふふふ、なんか楽しいわね。 こう歓迎されちゃうと」

「はあ・・・、よくこんな状態で言えますね？」

シエスタが呆れたように呟く。 それもその筈、山脈に入っすぐに襲ってきた火竜を振り返り討ちになると、さらに多くの火竜が襲ってきて、それを繰り返すうちに周囲を囲まれてしまったのだ。

「ははは、んなこと言ったって襲ってくるんだからしょうがないじゃないっつと」

「こうして話しているうちにも、火竜はどんどん数を減らして行く。

「そうだぜ嬢ちゃん！ それに並みの奴ならここでお陀仏だろうけど、この程度の奴ら相棒の敵じゃないぜ！」

「まあそうですけど……。　　なんだか火竜が可哀想になってきましたよ」

「大丈夫！ 死んではいないわよ！ ……多分」

ルイズはデルフの峰で火竜を攻撃していたのだが……

「吹っ飛ぶほどの力で殴られたら、死ぬんじゃない……」

「まあそのときは、襲ってきたのが運の尽きだと思ってもらうわ。ほらとどめ！」

「まあ、食べられるわけにもいきませんしね」

神鳴流奥義

百花繚乱！



狗音爆碎拳!!!

残り数十匹になっていた火竜たちは、吹き飛び、恐れをなして逃げて行った。その後も順調に最奥部を目指して進み、遂にたどり着いたのだった。

「さて、この辺りが最奥部の筈なんだけど……、いないわね？」

「そうですね、何処かに出かけてるんでしょうか？」

「そうね……、地震？」

いきなり地面が揺れたので、ルイズとシエスタは宙に浮かび様子を見る。すると、爆音と共に火山が噴火し、中から炎に包まれた鳥が現れた。大きさは人ほど、しかし、感じる魔力はただ者ではないことをルイズに感じさせていた。

「私の住処を荒らす者よ。なにようだ？」

「やっとお出ましね。不死鳥さん。あなたの涙を貰えないかしら？ 必要なのよ」

「我の涙？ はははっ、これは面白い。いいだろうってくれてやる。但し、我と戦い見事勝利をおさめることが出来たらだかな」

「話がわかる奴でよかったわ。シエスタ、ちょっと離れてて。こいつは私が一人でやりたいの」

「・・・分かりました。ルイズさん。気をつけて下さいね？ おそらく、かなり強いですよ、あの鳥」

「ふふん、そんなことはわかってるわよ。ほら、早く行きなさい」

シエスタを促し、離れさせる。ルイズは不死鳥に振り返り言った。

「待たせたわね。それじゃあ・・・楽しく戦いましょうか」

そして抑えていた魔力を解き放つのだった。

「おおおおおおッ」

炎が槍を型どり、四方八方からルイズに降り注ぐが……

「あまいあまいッ！」

ルイズも光の槍を作り出し、相殺する。

「いくわよッ！ 耐えなさい……！」

神鳴流秘伝奥義

滅殺斬空斬魔閃

「おおおお、なんじゃこりゃあ……！！……！！……！！」

デルフが自分の刀身から放たれる強大なエネルギーに驚き叫ぶ。

「なにッ！ ぬおおおおおおッ」

不死鳥は炎を圧縮した障壁を何重にも展開し、なんとか防ぎきる。

「今度はこちらの番だ！」

そう言っただけで、不死鳥。何枚もの羽根が宙に舞ったかと思うと、次の瞬間には炎の大剣となり、ルイズに飛来した。

「っと、やるわね!!!」

この戦いは夜を徹して行われた。

## 第27話 素材集め(2)

【サイド・シルフィ】

きゅい、久しぶりにお家に帰ることになったのね・・・  
お母さまとお父さまが反対しているところを、家出気味に召喚の  
ゲートをくぐってしまったのね・・・ 怒ってなければいいんだ  
け。

【サイド・アウト】

野営をしたタバサ一行は、朝を迎えるとシルフィードの案内で  
風韻竜の住処へと向かった。

「あの大きな木の中がお家なのね」

「・・・木？」

「木だな」

「中は空洞になってるのね！」

百メートルを優に超えるような巨木を目指して空を飛ぶシルフィード。話によると、木の中は空洞になっているらしい。

「ここからは降りて行くのね。うう……、お父さまも母さまも怒ってなければいいんだけど きゅい……」

森の中に降り、しばらく歩くと、巨木の根本に入口のような穴があった。

「ここが……」

「そうなのね！ ここが私のお家なのね」

「……それで、【神龍木】は何処にあるんだ？」

「この木の中に不思議な木があったのね。みんなその木を拝んだから、多分それなのね」

一行が入ろうとした時、ちょうど中から竜が出てきた。

「っ！ イルツ！ イルククウなのかい!？」

「きゅいつ！ お母さま〜ッ!？」

一方その頃ルイズは……

「……夜が明けちゃったか、あんたも粘るわね」

「ふふふ、よもや人間がここまでやるとわな」

そんな会話の最中にも両者の間には爆煙と閃光が、炎や光、闇の剣や槍が飛び交う。

「らいッ……こーけんッ!?!」

「ぐッ……、おおおおおおおッ!?!」

デルフから放たれるた雷球が不死鳥を捉えるも、すぐに立て直し、お返しとばかりにルイズを全方位から炎弾で攻撃する。しかしルイズがただでくらうわけはなく、全ての炎弾をデルフで斬り伏せようとする。何発か剣撃を抜けてしまい、咄嗟に障壁を張って防ぐが……

「ぐう……、障壁の上からこのダメージとは…… どうぞの大鬼神並みにやるわね」

夜の闇でわからなかったが、辺りは戦いの余波で焦土と化していた。隙を探り合い、両者は空中で睨み合う。ルイズがデルフを鞘に戻しながら言った。

「なかなか、楽しかったけど……、次で最後よ」

「……よからう。流石に我も限界だ」

「光の精霊千一柱 集い来たりて 敵を射て 【魔法の射手・収束・光の千一矢】」

右腕固定

【光の千一矢】がルイズの右腕に収束していく。

「火山に潜む精霊の力よ……」

不死鳥は周囲一帯の精霊の力を集めていく。



「闇の精霊千一柱 集い来たりて 敵を射て 【魔法の射手・収束・闇の千一矢】」

左腕固定

今度は左腕に【闇の千一矢】を収束させるルイズ。

術式統合

両手を合わせ光と闇の【魔法の射手】を融合させる。瞬間、それまでと比べ物にならないほど膨れ上がる魔力。

殲滅砲

【国崩し】

右拳に全て収束させ、腰だめに構える。【国崩し】とは、反発する属性を闇の魔法を応用し、強引に融合させる技。その威力はラカンインパクトに迫る……。光と闇に長けているルイズだからこそ出来る荒業だ。

「我は古き盟約に基づき命令する。我が身に宿りて仇なす敵を討て」

不死鳥に、凄まじい魔力が集まっていく。両者はしばらく

らみ合い、同時に動いた。

「死なないでねッ！ ルイズッ・・・インッパクトッ！！！！！！！！  
（命名 ラカン）」

「おおおおおおおおおおおおおおおッ」

ルイズは拳を突きだし、【国崩し】を解放。不死鳥はその身を巨大な炎の鳥と化し、ルイズに突っ込む。

爆風と閃光、衝撃波が辺り一面を包み込み、岩石を吹き飛ばした・・・。

### 【サイド・タバサ】

巨木を利用して作られた風韻竜の住処に来た私たちを待ち受けていたのは、シルフィードの両親とその一族だった。

「本当に心配したんだよ？　なんで、いきなり行ってしまったんだい」

「そつだぞイル？　心配したんだぞ」

「きゅい……、ごめんなさいなのね」

シルフィードより二回りほど大きな両親が先ほどからシルフィードと話している。巨木の中は思ったより広く、十数匹の風韻竜が暮らしていた。

「紹介するのね！　この青いちびっこがタバサお姉さまと言って、私のマスターなのね！　無口だけど、実は優しいのね！」

「あなたが……」

「ちびも」

ちびっこって……、まあ小さいのは認めるが……それだとエヴァはどっつなるんだろうか？

「それで、もうひとりには金髪の子霊さまなのね！　エヴァお姉さま

なのね」

「おお！ 精霊さまが……………」

精霊さまときたか……………、まあ間違っではないだろうか……………

「お母さま、お父さま、私を召喚したからといってタバサお姉さまを恨まないでなのね？」

「……………いいんだよ、イル。確かに最初は戸惑ったが、召喚は選ぶことが出来ないことは知っている。きっと【大いなる意思】の定めたことだったのだろう」

「お父さま……………」

「そうね……………、でも久しぶりに帰ってきたんだから、ゆっくりしていいってね？」

「お母さま……………、ぐすっ」

なんだか心が温かくなる光景だ…………… 家族……………か

このあと、エヴァが精霊だと言うことを理由に（嘘ではないが、本当でもない）なんとか祭られている【神龍木】の葉を一枚貰い、数日の間、風韻竜の住処に滞在した。

なかなか出されたサラダが美味しかった。

【サイド・アウト】

「汝が為にユピテル王の恩寵あれ【治癒】」

ポロポロになった不死鳥にルイズが回復魔法を使い、治療した。

「はっ……、そうか、我は負けたのか……」

「なかなか楽しかったわよ？ この世界じゃあなたに勝てる人間なんていないでしょうね」

「我が人間に敗れるとはな……」

「まあ、私もほとんど人間とは言えないけどね？」

そう言って、ルイズは右腕だけを魔族化させ、不死鳥に見せた。

「……ふふふ、そうか。だが、我に勝ったのは事実……  
・ 約束通り、我の涙をくれてやるっ」

そう言つと不死鳥の目から数滴の涙が零れ、ルイズの方に飛んできた。腰にあるポーチから小瓶を取り出し、受けとる。

「ありがとう」

「約束だからな。それにこれもやるっ」

不死鳥が羽ばたくと、羽根が一枚ルイズに舞ってきた。

「……これは？」

「それはあらゆる炎から持ち主を護る我の羽根だ。……何かの役に立つだろうから持っていくがいい」

「へへ。有り難くもらっておくわ」

「ふふふ。本当に久しぶりに全力を出した。これで人間に負けたのは二度目になるな」

「あなたに勝った人間がいたの？」

「ああ。遙か昔にな」

「よかつたら名前を覚えてくれない？」

「……たしかブリミルとか言っていたな。まあ、お前ほどではないが奴も奇っ怪な術を使う剛の者だった」

「……へへ、ブリミルね（ブリミルって、あのブリミルよね？ ふふふ、私は始祖ブリミルに並ん……いや抜かしたわね）」

そんなことを考えていると、ボロボロになったシエスタがルイズの影から転移してきた。

「やっと終わりましたかルイズさん」

「なんでそんなにボロボロになってるのよシエスタ？」

「うう……、なんかルイズさんから離れたとたん、来るときに蹴

散らした火竜たちが仲間を呼んで襲ってきたんですよ…… 退屈しなくてよかったですけど、振り返ちになっているうちにこんなボロボロに〜」

「一晩徹夜で竜と戦うなんて、貴重な体験が出来て良かったじゃない」

「よくないですよ！ もう、疲れましたよ……」

そんな会話をしていると、不死鳥が羽ばたき、空に飛び上がった。

「名を聞こう。少女達よ」

「ルイズよ」

「シエスタです」

「ルイズにシエスタか……、覚えた。縁があればまた会うこともあるだろう。さらばだ」

そうして不死鳥は去って行った。



「……それにしても、情報と全然強さが違ったわね。まったく、まさかあんなに強かったなんて……世界は広いわね」

「でも、ルイズさん、魔族化してないですよね？」

「まあね。ギリギリの戦いの方が燃えるじゃない」

そこで黙って鞘に入っていたデルフが言った。

「前にも言ったけどよ、相棒ってバトルマニじゃないわよ？ 少しでも戦闘が好きな女の子だから……そうか」

「さて、もうくたくたです。早く帰って休みましょうよ」

「そうね。それじゃあ行きましょうか……私も流石に眠いわ」

こうして無事素材を入手したルイズたちはとりあえず麓の宿に向かったのだった。

## 第28話 舞踏会

ルイズ一行が素材を集め終えてから、数日後の午後。ルイズは、タバサ、エヴァと共に自室で集めた素材の調査を行っていた。なぜこんなに遅くなってしまったかと言うと、集めたはいいがどうやって調査すればいいのか分からず、調べるのに時間がかかったからである。

「っし、完成つと」

「やっとできたか」

「これが……」

ルイズは出来た薬を小瓶に流し込み、タバサに渡した。

「はい。それであなたのお母さんは治る筈よ」

「ありがとう。本当にありがとう」

「ふふふっ、良いつてことよ……、にしても治したあとはどうするつもり？ 完治したことがばれたらヤバイんじゃない？」

「……とりあえず、ゲルマニアに匿ってもらおうと思っ  
てる」

「……そう。なんかあったら言いなさいよ？ 仲間なんだから  
ね」

こうしてタバサは部屋に戻って行った。

「さてと……、タバサの件は大体こんなもんね……  
次は……アーハンブラ城ね」

ルイズは机の引き出しから、マチルダからの報告の手紙を取り  
出して、もう一度読み直した。

『 報告書                    ガリアを探ったけど、警備が嚴重過ぎてなか  
なか調べられなかった。しかし、この警備体制を考えると、何か  
をしているのかも知れない。また、何故かはわからないが、アー  
ハンブラ城に兵が集中している。これ以上の調査は現状では困難  
なため、終了する。』

あるときは情報屋のフーケより』

「……まあ、相手の出方を見るしかないわね」

アーハンブラ城とは、ガリアの東の端にある、有名な古戦場である。

「おいルイズ」

「なによエヴァ？」

「スレイプニルの舞踏会ってなんだ？ シエスタの奴が、私は出るのかどうか少し前に聞いてきたんだが」

「スレイプニル？ ……って明日じゃないのよ！ 完璧に忘れてたわ！？」

タバサが自分の部屋に戻って来ると、ベッドの上に一羽のカラスがいてのを見つけた。タバサが首をかしげると、ぼんっ！と音がして左右に割れた。おそらくは【魔法人形】の一種であろう。なかには手紙が入っている。取り上げ、目を通す。タ

バサの眉間がわずかによった。

「どうしたんだい嬢ちゃん？　ここいらは子供が歩く場所じゃないぜ？」

その夜、タバサはいかげわしい酒場や賭博場が並ぶチクトンネ街に来ていた。　酔っ払いを無視して、目的の酒場へ向かう。

そこはチクトンネ街でも、割りと上品なつくりの酒場だった。

カウンターに座るとすぐに隣の席に深いフードをかぶった女が腰を掛けた。

「はじめまして。　北花壇騎士タバサ殿」

タバサは軽く頷いたあと、口を開いた。

「どござして？」

どうしてガリアではなく、トリステインで任務を授けるのだ？  
と、そついう疑問だ。

「この国が、今度の任務の舞台だからよ」

「……………」

女はかぶったフードをずらした。切れ長の目。さらさらした黒髪の間には、ルーンの文字が躍っている。その女は司令塔の内部でルイズのコピーを作り出し操っていた女であった。

「あなたとわたしの主人はね、こういう風に考えてるの。世界に四匹しかいない竜同士を戦わせたいんだけど……………、なぜか一匹だけ他の竜と違って特別強力なの。で、その竜を内部から攻撃して、倒そうってわけ」

「……………竜退治？」

「あなたもよく知っている人物よ」

女は、タバサに一枚の紙を見せた。そこにかかれた名前と似顔絵を見て、目を見開く。

「この任務が成功したら……………大きな報酬があるわ。あなたの母親……………、毒をあおって心を病んだのよね。その心を取り戻せる薬よ」

タバサは軽く唇をかんで、俯き震えるフリをした。

(・・・どうやら私たちが薬を作っていることはバレていないよう  
だ・・・。 たぶん、前にルイズが張った認識阻害の結界のお陰か  
・・・)

「あら？ 天下の北花壇騎士さまが、知り合いだからって私情を挟  
むの？ わかつてるの？ あなた、自分の母親の心を取り戻せるチ  
ヤンスなのよ？」

タバサは俯きながらも、どうやってこの女を嵌めるかを考える  
のだった。

いよいよ本日はスレイプニルの舞踏会である。 といっても、ル  
イズからしたら何時もより豪華なものが食べられるわぐぐらいの  
考えでしかないのだが・・・ 朝食の席では、お前はいつた  
い誰になるんだ？ とかそんな会話があちこちで交わされている。  
そんな会話を聞き、ルイズは思い出したように言った。

「あ・・・、そう言えば、なんちゃらの鏡とかで変装するんだ  
っけ？」

「【真実の鏡】、対象がなりたいたいと心の底で思っている姿に、幻影魔法をかける鏡」

「ああ、それぞれ」

そんな会話をタバサとしていると、目の前のタバサから念話がきた。

『ルイズ、エヴァ、シエスタ。ちょっと話がある』

『なにになに？ 厄介ごとかしら？ ドンと来なさい』

『なんだいったい？』

『はい？ 何かようですか？』

『実は……』



夕方になり、宝物庫から【真実の鏡】が、二階のダンスホールの入り口まで引き出された。鏡の周りには黒いカーテンがひかれ、誰が今、姿を変えているのかわからぬようになっていた。

「夜の貴婦人が、あなたたちを幻想の世界へと案内しますよ」

シュヴルーズ先生が、ノリノリでならんだ生徒たちを誘導している。ルイズも列に並び、先ほどのタバサの話を考えていた。

（母親を治す薬と引き換えに、私を不意打ちして殺すようにと命令がきた……か。まったく……どうやって料理してやるうかしらね？ 特徴から言って、あの時のマジックアイテム使いかしら……。わたしの血をまだ持っていたら厄介ね。と言っても、今のタバサなら、コピーのわたしが相手でも一方的にはやられないと思うけどね〜）

そんなことをルイズが考えていると、いつの間にか順番が来ていた。カーテンのなかにルイズは入り、布がかけられた鏡をみる。外から、シュヴルーズ先生の声が聞こえ。

「いいですか？ 理想の姿を思い浮かべるのです。誤魔化してもしかたがありませんよ？ この鏡は心の底までを覗き込み、あなたをその姿にしてしまうのです。心の準備ができたなら、布をお取りなさい」

ルイズは「はい」と、返事をして、かけられた布を持ち上げた。美しい、虹色に光る鏡が現れる。

そこに映った自分の姿が、溢れる虹色の光に覆いつくされていく。不意に光は消え、元の薄暗い空間へと戻った。

「……………」

鏡に映ったのは十四、五歳の赤毛のローブを羽織った男……  
・大戦期のナギだった。

「こ、こう来たか……カトレア姉さま辺りになると思ってたんだけどって、これ、声まで変わるの？ いや、変わるのかよ」

そして、時間まで豪華な食事を楽しむルイズであった。

「タバサ、用ってなに？」

舞踏会の途中で変装が解けてしまうと言うハプニングがあったが、約束した時間になったのでルイズはヴェストリの広場に向かった。

「……………」

タバサが無言でベンチに座っている。ちなみに、エヴァとシエスタは見えないところで待機している。

「ルイズ……………死んでもらう『いく』」

「え……………？『オツケー』」

「氷の精霊五十九柱 集い来たりて敵を射て 【魔法の射手・連弾・氷の五十九矢】」

何十もの【魔法の射手】がルイズに迫るが……

「バカな!？」

いきなり反転し、物陰に隠れていた女に向かって行った。  
女は宙を舞って地面に叩きつけられる。しかし……

「……魔法人形？」

吹き飛んだ女を確認し、タバサが呟いた。ルイズも悔しそうに言う。

「ちっ、仕留め損ねたわね」

そのとき、頭に響くような声が、上空から聞こえた。

『なぜだ？ なぜ、そいつを殺らない？ 母親を治す薬が欲しくないのか？』

「……」

『飼い犬が飼い主に歯向かうというの？』

「勘違いしないで。あなたたちに忠誠を誓ったことなど、一度もない」

『あなたの裏切りは報告するわ』

「問題ない。 なぜならあなたは此処から逃げ切れない」

『言ってくれるわね？ 追って来られるものなら、追ってくるかい』

すると、次々と空から人型に羽がついたようなガーゴイルが現れた。 その数、数百。

「ちっ、これは予想外ね『エヴァ、シエスタ。 頼むわ』」

『しかたない』

『わかりました！』

エヴァとシエスタに追跡を任せ、ルイズとタバサは空に飛び上がり、ガーゴイルの迎撃を開始した。

【サイド・シエフィールド】

ちっ、まさか裏切るとは・・・ 母親の話を出せば乗ってくる  
と思っていたのに・・・

わたしは急いで乗っているガーゴイルを出し、その場から逃げ  
た。すでにコピー（偽ルイズ）を作るための血はない。なんと  
か逃げ切らなければ・・・

「待ちなさい！」

追つてが来たか。 どうすれば・・・

『まったく。 だから、そんなことで殺せるなら、苦労はないと言  
ったのだ』

わたしの前の空間が歪み、黒いローブを着た男が現れた。 デ  
ユナミスか・・・ 借は作りたくないが仕方がない。

次の瞬間、周囲に幾重にも展開される魔方陣。 大量の化け物  
が召喚されて来た。

【サイド・エヴァ】

あともう一步と言つところで、大量召喚の気配を感じた。 ち

っ、これはあの戦場と同じもの・・・黒ローブの男が来ていると言っことか。

「シエスタ。 注意しろ」

「わかりました！」

次の瞬間、展開された魔方陣から大量の魔族が召喚されてきた。雑魚だか数が数だ、突破には多少時間がかかるだろう。

「このままだと逃げられる。 さっさと突破するぞ」

「了解です！ はああああああっ！！！！」

気を纏い、シエスタが突っ込んだ。 さて、時間はかけているれないな？

【氷爆】！！！！

【サイド・ルイズ】

「【雷の暴風】ッ！！！」

周囲のガーゴイルが数十体吹き飛ばす。しかし、倒しても倒してもなかなか数が減らない。どうやらかなり気合い入れて時間稼ぎしているようね？

向こうではタバサが術式兵装【疾風霧氷】を纏って、ガーゴイルたちを氷結粉碎している。大分強くなったわね。

私たちが一端背中合わせになった時、異変が起きた。いきなり百五十メートルはあるうかと言う巨大な飛行船が現れたのだ。そして、うねる蛇のような荒れ狂う炎が船から伸びて、周囲にいるガーゴイルたちを焼き尽くしていく。

『生徒が襲われているのでね。 助太刀するよ』

何処かで聞いたことがある声が響いてきた。拡声器かなにかで、妙なエコーがかかっている。おかしい。確か、今コルベル先生はキュルケと一緒にゲルマニアにいる筈なのに。すると、キュルケの声も聞こえてきた。

『久しぶりに会ったと思ったら、あなたたち、何してるの？ 随分と楽しそうじゃない。まったく、スレイプニルの舞踏会があるから驚かそうと思ったのに、こっちが驚かされたわよ？』

キュルケとコルベル先生が加わり、程無くしてガーゴイルたちはすべて消え去った。



【サイド・シエスタ】

「ラストッ！」

私とエヴァさんは最後の魔族を倒して、敵を追った。もう、随分と離されてしまっている。急がないと！

「チッ！ シエスタッ 避ける！！！」

エヴァさんの突然の言葉。そこで私は周囲に浮かぶ、数百の影を固めたような黒い短剣に気づいた。

「くっ！」

避けきれないっ、と判断した私は全力で狗神を集中。狗神の障壁で身体を包み込み、防御しようとした。エヴァさんは私がどうこうしなくてもきつと大丈夫だろう。

短剣が当たる瞬間。

黒き牢球

短剣は爆発し、凄まじい爆風に障壁は耐えきれず私は気を失った……

【サイド・エヴァ】

クツ！ シエスタが墜とされたか。 咄嗟のことに無事とは言えなかったが、なんとか障壁で耐えた私は落ちていくシエスタを浮遊させた。 が、その浮遊させる一瞬を突かれ、背後をとられてしまった。

「隙ありだ」

「チツ！！！」

振り向きざまに、【断罪の剣】で袈裟斬りにするが……

「貴様……その身体」

「ふふふっ」

手応えがあつたにも関わらず、奴の身体は血を噴き出すどころか、まるで影のような黒い霧になり、半分が消えた。しかし、そんなことは関係ないかのように、またしても黒い短剣で包囲してくる。

「ふんっ、同じ技が何度も通じるものかッ」

避けようとしたそのとき短剣が膨れ上がり……私を封じ込めようとしてくる。

メラーン・カイ・スファイリコン・デズモーターリオン

「がああああああッ」

戦場で掛けられた数倍の力に、なかなか抜け出せず破るのに苦労した。

「これでどうだ?」

ドスッ

いつの間にか接近していた奴に腹を抜き手で貫かれ、大きな穴を開けられた。私に死はないが、これを治すのに数日は巻物から出られんな……

「かふつ……なめ……るな」

【氷爆】！！！！

「ぬづううう」

至近距離からの爆発に、流石にダメージを受けたようだ。

「……まあいい、足止めはした。手傷も負わせられたのだからもう十分だな。ふふ、さらばだ」

そんなことを言い残し、奴は消えていった。

【サイド・アウター】

ルイズとタバサはキュルケたちと合流したあと、飛行船に乗り、エヴァたちを追っていた。

「ちっ、召喚の気配を感じたからまさかと思ってたけど・・・」

ルイズが呟く。そのとき、視界にシエスタを肩に担ぐエヴァが入った。飛行船にルイズが乗っているのを見ると、エヴァが甲板に飛び乗ってくる。他のみんなも集まってきた。

「シエスタッ、・・・ってエヴァも大丈夫？」

ルイズが横たわらせたシエスタを見てからエヴァを見ると、エヴァもかなり負傷している。

「・・・すまん、逃げられた」

そう言い残し、エヴァは巻物に戻った。

「ちょっと、大丈夫なの？」

「二、三日すれば大丈夫よ。それよりあの女に逃げられたのがいたいわね」

「……母様が危ないかもしれない」

タバサが拳を握りしめて言う。

「そうね。 早めに行ったほうがよさそうね…… ところでタバサ」

「なに？」

「薬で治したあとなんだけど、ゲルマニアじゃガリアの奴等は何をするかわからないわ。 学院にいてもらったらどう？」

「……」

「学院長と相談して、今度から認識障害の結界だけじゃなくいろいろと張っておくわよ」

「……わかった。 感謝する」

タバサから、了解を得ると、ルイズはコルベールに話かけた。

「コルベール先生。 ちょっといいですか？」

「なんだね？」

「学院長を説得して、身元不明の女性を一人雇ってくれるようにして欲しいんです。 フーケを雇っていたくらいだから、不可能ではないでしょう？」

「うむ、わかった。 なんとかしてみよう。 君には助けってもらったよだからね、ミス・ヴァリエール」

「ありがとうございます」

こうして、キュルケを加えて一向はガリアのオルレアン領。 タバサの実家へとシルフィードに乗り、急いだのだった。

「なんで、転移魔法を使わないのよルイズ！」

「こっから一発で行けるほど万能じゃないのよ。ある程度近くに  
来たら、転移するわ」

「シルフィード。スピードアップ」

「お姉さま、これが限界なのね！ きゅい」



## 第29話 エルフ

オルレアン領にルイズ一行（ルイズ、キュルケ、タバサ、シルフィ）が到着したのはもうすぐ夜が明ける頃だった。幸い何も起きていないようだ。

「・・・それじゃあ、まあ親子で感動の再会ってことで、私たちは野暮ね。　ここで待ってるわ」

「そう言うこと。　早くお母さんを取り返して来なさい」

ルイズとキュルケの言葉に後押しされ、タバサは頷くと二人を客間に残し、寝室へ向かった。

「さてと・・・、あんまり長居するとなんか来そうだわ・・・  
　　っ、お客さんみたいね」

「ホントに？　早いわね」

「とりあえず私が出るわ。　キュルケとシルフィは周りを警戒して。　敵は一人みたいだし、陽動だったら厄介だわ」

「オツケー 大丈夫だと思うけど、気をつけてね？」

「きゅい 頑張るのね！」

ルイズは片手を上げて、気配のする正門に向かって行った。

寝室に来たタバサは目の前で眠っている自分の母親、オルレア  
ン公夫人が無事に戻って来てくれるのか、内心びくびくしながらも  
懐から小瓶を取り出した。水の精霊に言われて作った薬である。  
その薬を母親の口元へ持っていき、飲ませる。

「……………お願い」

か細く咳くタバサ。 しばらくの間をおき、目を開けるオルレ  
アン公夫人。

「……………シャルロット？」

長い間眠っていたオルレアン公夫人はタバサの顔を見てそう咳  
く。 その目には狂気ではなく理性が宿っていた。 変わってしまった  
タバサ、幼い頃のやんちゃさは消え失せ、触れれば切れる抜き

身の刃のようになってしまった。が・・・

「お母・・・さま・・・」

涙を溢し、抱き合う二人。こうして親子の再会は果たされたのだった。

正門に着いたルイズを待っていたのは異国のローブを纏い、帽子を被った男だった。

「どちら様かしら？　ここは人の家なんだけど？」

ルイズは男の前に立つとそう言い放った。

「・・・ここに、ルイズと言う者はいるか？」

「それなら、私がルイズだけど。　なんのよう？　あなたみたいな知り合いはいない筈だけど」

「ああ、初対面の場合、帽子を脱ぐのが作法だったな」

すると、男は帽子を脱いだ。

「私は【ネフテス】のビダーシャルだ。　出会いに感謝を」

金髪の髪から、長い尖った耳が突き出ている。

男はエルフだった。　ハルケギニアの東方に広がる砂漠に暮らす長命の種族。　人間の何倍もの歴史と文明を誇り、強力な先住魔法の使い手にして、恐るべし戦士・・・なのだが、そんなことはお構い無しとルイズは軽い口調で言った。

「エルフ・・・ね、それでその【ネフテス】のエルフさんが私に　なんの用かしら？」

身体に力をいれ、威圧感を込めながら言った。

「・・・流石は不死鳥を打ち倒した者。　凄まじい力だ」

「？　なんで不死鳥と戦ったことを知ってるの？」

「ふふふ、我々は不死鳥と交流がある。我々の中では有名だぞ」

「へ〜。で、用件は？まさかガリアの手先とか言ったら戦わなくちゃいけないんだけど？」

「ガリアか。確かに、ガリア王ジョゼフのもとには行ったが、手先と言うわけではない。・・・用件だったな。それを話すには少し時間がかかるのだが、いいか？」

「構わないわ」

「・・・実は我々【ネフテス】の預言者が、近い将来【シャイターの門】、お前たちの言う【聖地】に封印された、大厄災をもたらす何か復活すると預言したのだ。伝承によると、悪魔の担い手、その四の四が揃いしとき、大厄災がもたらされるとある。我々は悪魔の担い手が揃うのを阻止するためにここに来た」

「・・・悪魔の担い手って？」

「お前たちの言う【虚無】のことだ。担い手が揃うのを阻止するために、我々はガリアと協力体制を築こうとした。しかし、ガリア王ジョゼフは信用ならない者だった。そこで、不死鳥を打ち倒したと言うお前に、担い手たちが【聖地】に侵攻してきた時、防ぐ

手伝いをして欲しい」

ビダーシャルの話を聞いたルイズは少し考えて言った。

「……それなら必要ないわね」

「なぜだ？ できる限りの見返りは約束するぞ」

「何でかって、私がその【虚無】の担い手とやらだからよ」

「ッ……!」

その言葉を聞き、ビダーシャルは身構えた。

「ああ、大丈夫よ。私は【聖地】なんてどうだって良いから。よかったわね。これで四の四とやらが揃うことはなくなったわ」

「………本当か？」

「ええ」

ビダーシャルは考え込み、言った。

「その言葉、信じよう。私は一度戻る。【聖地】には近づかないでくれ」

「分かったわ。まあ、何かあったら来なさい。私は何でも屋をやってるからね、格安で力になるわよ？」

「ふっ、お前はおかしな奴だな。エルフに対してもそのようなことを言うとは……」

「あいにくと、種族による差別はしないんでね」

「そうか。では頼んだぞ」

そう言ってビダーシャルは去って行った。

その後、ガリアからの刺客が来る前に一行は魔法学院へと戻って行ったのだった。

ガリア王国の王都リュティスにあるベルサルテイル宮殿。その王座に腰掛けて、ガリア王ジョゼフは報告を聞いていた。

「到着したときには既に……」

「そうか、もうよい。下げれ」

兵を下がらせ、ジョゼフは一人虚空をみながら呟いた。

「ふふふ、まったく。ことごとく余の先を行きよるわ。なかなかの指してとみえる。楽しくなってきたな……なあ余のミューズ？」

心底楽しいと言うように、ジョゼフは顔を歪める。

「……なあ、シャルル。お前をこの手にかけたときより、おれの心は震えんだよ。まるで油が切れ、錆び付いた時計のようだよ。時を刻めず、ただ流れ行く時間を見つめることしかできないぬガラクタだ……。ふふふ、お前の娘を絶望のなか殺せば……。おれは悲しむことが出来るだろうか。後悔に涙を流せるだろうか」





### 第30話 つかの間の平穩

タバサの母を治療した後、魔法学院のオールド・オスマンに事情を説明し、なんとかオルレアン公夫人を秘書として匿ってもらってから十日ほどが過ぎた。何かしらのアクションがあると見ていたルイズたちは拍子抜けする一方、警戒は解かず、いつもの学院生活を活かして過ごしていた。

「くっ……」

指が震える。 心臓の音があまりの緊張でうるさく感じるほど高鳴っている。

「……バカな……ありえないわ」

言うことを聞かない指の震えを意志の力で強引に止めようとする……が、止まらない。 かつて世界の滅亡すら止めたこともある自分がなぜ……

「ぐぐぐぐっ……ふんぬっ」

「ねえルイズ、あんた何を編んでるの？」

ふとキュルケが問いかける。ルイズは一旦編み物を中断し、前を向いた。

「……セーター」

トリスティン魔法学院の放課後、ほとんどの女子生徒たちは食堂から張り出したテラスで、お茶を飲むのが日課であった。ルイズ、キュルケ、シルフィの三人は丸いテーブルを一つ使って、ケーキとお茶を楽しんでいた。

「ぶっ……あははははははっ、セーター？ それセーターなの？」

「ぬいぐるみかと思ったのね」

シルフィードは十数皿目になるケーキに手をつけながら言った。

「くっ、私に不可能はないはずなのに……」

「なに言ってるのよ、詩とかも壊滅的じゃない」

「・・・かはっ」

そんなことを言っていると、シエスタが給仕にやってきた。

「ケーキのおかわりはいらいますか？」

「あ、シエスタ見てよ。これ何に見える？」

キュルケはルイズが編んだセーター（仮）をシエスタに見せる。

「え〜と、ヒトデのぬいぐるみですか？」

「ぐはっ」

「あはははははっ」

「？」

「シエシエ、私にケーキちょうだいなのね」  
「きゅい」

「はい、どうぞ」

しばらく笑い続けたキュルケが笑いやむ頃には、セーター？はルイズによって跡形もなくなっていたと言う……

「ところで、タバサさんとエヴァさんはどうしたんですか？ 姿が見えませんが」

シエスタが疑問に思い問いかける。その問いに立ち直ったルイズが答えた。

「ああ、タバサとエヴァ？ タバサならお母さんと部屋にいるわよ。エヴァは確かオールド・オスマンとチエスをしに行ったわね」

「そうなんですか。 数年ぶりの再会ですもんね」

「にしても、何にもしてこないってのが逆に怖いわね。 なに考えてるんだか」

キュルケがさっきとは一転、笑いを引っ込めて言った。

「さあね。 まあ私たちは何かあったときに、すぐ対応出来るようにするしかないわよ。 それに学院の周囲には結界を張ったわ。 私に気づかれずに突破することはまず不可能よ。 もちろん気は抜

けないけど」

「そっか、じゃあ……私はダーリンとイチヤツについてどうしようか  
しらね」

「はいはい行ってらっしゃい」

「……ぬむ……？ ま……」待ったはなしだ」……何じ  
やケチじゃのう……年上のくせに」

「ふんっ、じじいがよく言う」

エヴァは学院長室で胡座をかき、オスマンとチェスをしていた。  
ちなみに今のところ、六対〇でエヴァが勝ち越している。

「ああもう、負けじゃ負けじゃ」

「ふふふ、まあなかなか楽しめたな」

酒瓶を宙に浮かし、お猪口に注ぎ、飲み干す。

「一人で飲まんと、ワシにもわけとくれい」

「ぬ、人の酒を飲むなッ」

オスマンも浮いている酒をコップに注ぎ、飲み出した。

「大体貴様は良かったのか？」

「なにがじゃ？」

「タバサの母親を匿うことだ。 私たちがいるとは言え、絶対に生徒に危害がないとは言い切れないんだぞ？」

「まあ、ワシも人の子ってことじゃな。 それに若い奴らの可能性は出来るだけ潰したくはないんじゃないかよ」

「………そうか」

「その言のじや」

酒をごくごくと飲みながら、オスマンは言う。

「……って、じじい！ 貴様、どんだけ飲んでるんだ！」

「いや、これはなかなか美味しいの」

タバサは母親と一緒に部屋で過ごしていた。 何をするでもない。 ただただ一緒にいるだけ、それでもタバサにとってはかけがえのない空間だった。

「お母さま」

「ん……？」



オルレアン公夫人は最初はあまりの娘の変わりように戸惑っていたが、あの甘えん坊だったシャルロットの面影をタバサに見た。今はタバサが小さな頃好きだった小説イーヴィルディーの勇者を読んでいた。

ふと、タバサが呟く。

「ごめんなさい」

「どづしたの？」

「急すぎて、染み付いた態度が変えられない。違和感があるですよ？」

オルレアン公夫人は、そんなことかと、思い言った。

「なにを言っているの。大丈夫。あなたは私の娘シャルロット。確かに性格とかは変わっているかもしれないけど、そんなことは些細なことだわ」

「……そう」

魔の手はもつすべそこ井で迫ってきていることだ。狂王ジョゼフの

### 第31話 狂宴（1）

タバサの母親を取り戻し、一ヶ月が過ぎた。何のアクションも起こさないガリアに疑問を持ちながらも日常を過ごしていたルイズ達だったが、一通の手紙から狂王のゲームは始まりを告げることになる。

「・・・で、なんで私たちがこんなところに来ないといけないのかしら？」

キュルケが呟く。ここはトリステインの王宮。虚無の曜日  
で休みだったところに、アンリエッタ女王からルイズに手紙が来たのだ。

「しょうがないじゃない。手紙には【紅き翼】のメンバー全員きてくださいってあったんだから」

今ここにいるのは、ルイズ、エヴァ、キュルケ、タバサ、シルフィ、シエスタそしてオルレアン公夫人である。オルレアン公夫人はもしものことがあったらいけないと、ルイズが連れてきたのである。

「それにしても、私みたいな平民が、王宮の中に入ることがあるなんて……」

「なに言ってるのよ。シエスタに勝てる魔法使いなんて、普通じゃないわよ？　普通はね」

そんな雑談をしていると、アンリエッタに会う時間になった。

「良く来てくれましたね、【紅き翼】の皆さん。此度の戦争、少し遅れましたが改めてお礼をさせていただきますと思います」

「……」

アンリエッタを見たときに一瞬驚き、無言で考え込むルイズ。

「やられた……、何時から入れ替わってたのかしら？」

「？　なんのことですか？」

「一度見破られた技よ……アーウェルンクス」

ルイズの言葉に、その場にいたキュルケ達が警戒する。　タバ

サは母親を庇うように前へ出た。

「・・・よくわかったね。 【千の呪文の男】にもだけど、こんなに簡単に見破られるとは思わなかった。 本物のお姫さまと王子さまはガリアだよ」

「あんたっ」

「助けたければ、そこに行くんだね」

何かの手紙を投げ渡されるルイズ。 そしてアーウェルンクスが手を振り上げる。 すると、地面から巨大な石槍が突き出てきた。

「ちっ この流れでいくと前と同じように・・・」

その時、警備の兵が騒ぎを聞きつけ、部屋に飛び込んでくる。

「どうなさいました女王陛下下ッ！」

「その者共を捕らえなさい！ 暗殺されかけました！ 反逆者です」

「逃げるわよ皆ッ」

押し寄せてくる警備兵を尻目にルイズ達は転移魔法で離脱したのだった。

『ふふふ、この手紙を読んでいると言うことは、国から追われているな？　どうかな？　楽しいだろう？　そんなお前たちに朗報だ。』

一週間後、ガリアのベルサルテイル宮殿で、ダンスパーティーが開かれる。その会場に本物のアンリエッタ姫がいるかもしれない？　【紅き翼】とやらのメンバーで来るがいい。ああ、ちなみに来なかったり、奇襲したりすれば、アンリエッタ姫の命はないと思え。　楽しいパーティーになるといいな』

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

「ここは夏休みに使っていた、二階建ての何でも屋事務所。ルイズ達は情報をまとめるため、一度この場所に隠れていた。」

「またまた、国から追われる身とはね。実家に迷惑がいかなきやいいけど・・・ あんた達はどうする？　私は助けに行くけど、無理に来なくてもいいわよ？　命の保証はないわ」

「私は行く。父の仇を討つ時がきた」

「シャルロット」

「ごめんなさい、お母さま。これだけは譲れない」

「まあ、急ぐことはないわ。まだ一週間あるから」

「ククク、罫と決まっている場所に飛び込んで行くとはバカだな。退屈しなくていいが」

「仕方ないじゃない。奇襲して失敗したら取り返しがつかないわ。アーウェルンクスがいる以上、成功する確率も低いしね。こうなったらそのパーティーとやらで蹴散らしてやるわよ」

そんな話をしているルイズ達だったが、キュルケ、シルフィ、シエスタの三人は事態に着いていけずにフリーズしていた。

「え〜と、姫様が敵で？」

「きゅい……きゅい」

「あれ？私、国に追われてるの？ダメ、理解が追いつかないです……」

結局、非戦闘員のオルレアン公夫人、護衛としてシエスタを何でも屋に残し、残りのメンバーでガリアに向かうことになったのだ。  
った。

「さて、囚われのお姫さまを助けに行きましょうか。 ついでに王子さまとその他もね」



### 第32話 狂宴(2)

あっという間に一週間が過ぎた。

ベルサルテイル宮殿では楽士達が奏でる楽器の音が、大広間に流れていた。百人は余裕で入れるようなホールの中には、ガリアの貴族と思われる人々が談笑している。

「行きましようか」

ルイズの言葉に頷く一行。太陽は沈み、月が顔を覗かせている。これから一行はダンスパーティーに参加・・・せずに、速攻でジョゼフをボコリ居場所を吐かせよう！と言う、作戦と言っていないのかわからない作戦を開始しようとしているのだ・・・

ルイズ達が宮殿に乗り込もうと敷地に入った途端、無数の魔方阵と共に魔族？が大量に召喚されてくる。

「やっぱりね。君が素直にパーティーに参加するなんてことは、あり得ないと思っていたよ」

召喚魔に囲まれたルイズ達の前に、白髪の青年アーウェルンクスと黒いローブの男デュナミスが姿をあらわす。

### 【奈落の業火】

触れれば跡形も残らないような、火炎放射がルイズから放たれ、包囲の一角を崩した。

「キュルケ、タバサ、シルフィ。先に行きなさい。こいつらをかたずけてから、私たちも行くわ」

キュルケ達は頷き、宮殿に向かって行った。

「行かせてもいいの？」

「ふふふ、僕たちの役目は君たちの足止めだからね」

「……まいったわねこりゃあ」

背からデルフを抜き、嬉しそうにルイズは笑う。

「そう？ その割には楽しそうだけど」

「相棒。全然困ったように見えないぜ？ やっぱり戦闘きよ」  
「そ  
っちは頼んだわよ、エヴァ」・・・ひどい

「ふん、私を誰だと思ってる」

デルフを構えるルイズ。

「さてと、どこまでナギに近づけたか、試させてもらおうわよ」

「・・・どちらにしろ君の存在は脅威になりかねない。ここで退  
場してもらおうよ」

大気を震わせ、睨み合う両者。 次の瞬間、消えたかと錯覚  
するほどの速度で二人は交差した。

先に進んだタバサ達を待ち受けていたのは、先程までダンスを

していたガリア貴族達だった。タバサ達がホールに踏み込んだ途端に楽士達の演奏が止み、杖を構えた貴族達が、感情の見えない顔で襲ってきたのだ。

「・・・なんだか狂ったダンスパーティーになりそうね」

「きゅい お姉さま、この人達人じゃないのねッ！」

飛んでくる魔法の矢を避けながら、呟くキュルケ。シルフ  
イードの言葉にタバサが貴族を一人攻撃してみる。すると、真つ  
二つになった貴族は人形に姿を変えた。それを見たキュルケがタ  
バサに言う。

「ここは任されたわ。あんたたち二人は先に行きなさい。どう  
せ、ラスボスらしく一番奥の部屋にいるんでしょ？」

迫り来る魔法人形を蹴りとばし、キュルケが言った。

「・・・任せる。気をつけて」

「この程度の奴らには負けないわよ。あんたも気をつけなさいね  
？シルフィ、無理しないように見ててよ？」

「きゅい！」

魔法の射手の弾幕で包囲を破り、タバサとシルフィが先へと進む。二人を見送ったキュルケは魔法人形達に振り返り言った。

「そのあんたもいい加減出てきたらどう？」

すると、人形の群れの中から神の頭脳が姿をあらわす。

「おや、バレてたのかい」

「なんで、タバサ達を行かせたのかしら？ あなたのご主人様はガリア王ジョゼフなんでしょ？」

「ふふふ、ジョゼフ様があんな小娘に殺られるものか」

神の頭脳が右手を上げる。すると、五メートルにとどく程の巨大なガーゴイルが周りから現れる。

「……………どうやら楽勝ではなさそうね……………」

杖に【ブレイド】を纏わせ、キュルケは魔法人形の群れに突っ

込んで行った。

「おお、地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ 【冥府の石柱】」

一本一本が百メートル程の石柱が数十本ルイズに降り注ぐ。ルイズとアーウェルンクスは壮絶な空中戦を繰り広げていた。ルイズの手の一振りで、夜空に眩い星が生まれる。数百の石の槍がルイズを狙い撃つ。両者は一歩も引くことなく、召喚された石柱の上に着地した。

「はあああああっ」

気合いと共に、ルイズが斬りかかる。アーウェルンクスも石の剣を持ち、応じる。上段から中段、そしてまた上段へ、コンマ数秒の間に数合斬り結び、鏝迫り合いになる。

「さすがだね!」

「・・・まさか、あの時の少女が彼に並ぶ程になるとは・・・  
認めよう、君は強い」

「ッ！！！」

アーウェルンクスが自らの剣と共に、デルフリンガーを絡めとり宙へ弾き飛ばす。両腕が無防備に上がってしまい、ガードが間に合わない。双掌打を受けルイズは吹き飛ばされた。クレータができるほどの勢いで地面に叩きつけられるが、すぐさま立ち上がる。

「ぐっ」

もちろんノーダメージと言っことはありえず、多少ふらつく。

「やるね。あの状態から反撃してくるとは思わなかった」

鳩尾を押さえたアーウェルンクスが降りてくる。ルイズは攻撃を喰らったあと、吹き飛びながら蹴りを放っていたのだ。

「まったく、なんて固い障壁してんのよ。おかしいでしょ、人間

技？」

「その障壁の上からこれだけダメージを負わせる君も十分おかしいけどね」

「はっ、言ってなさい」

ルイズは身体を魔族化させ、再び対峙する。

「魔族化……か。厄介だね」

「仕切り直しといきましょう……かつ……！」

刹那の間に十メートル程の距離をゼロにするルイズ。

「らあああッ！」

「ふッ！」



【サイド・タバサ】

……ついに、遂にこの時がきた。父の仇が今、私の前に。シルフィードには悪いが、部屋の前で待機してもらっている。強く反対されたが、強引に押し通した。ここからの私を見て欲しくなかったのだ。

「来たか、シャルロット」

玉座に座る仇の姿。ガリア王ジョゼフは私を見ると、待ち望んでいたかのように顔を歪ませた。

「父の仇、とらせてもらおう」

「くくく、ははは、ははははははははッ！ 余に人間としての後悔を味あわせてくれ……！」

狂気を宿した瞳。ジョゼフは立ち上がる。その手には杖が握られている。

## 【断罪の剣】

私は腕に【断罪の剣】を纏わせ、構える。ふふ、断罪か・・・もう私の両腕は血に染まっていると言うのに・・・北花壇騎士としての汚れ仕事、戦争。数えきれないほど人を殺めた私に、断罪は似合わない。だが、そんなことは関係ない。私は・・・

「はッ！」

私はジョゼフに【断罪の剣】を振りかぶる。高速歩法【瞬動】を駆使し、袈裟斬りに叩きつけようとしたその時・・・

「・・・ッ!？」

「惜しかったな」

ジョゼフの姿が掻き消え、背後から声が聞こえてきた。私は背後に振り返り、【断罪の剣】を一閃させるが、そこにも姿がない。

「この呪文は【加速】というのだ。虚無の魔法、皮肉なものだろう？ シャルルを殺めた後になって、目覚めたのだから」

再び現れたジョゼフに斬りかかるが、かすりもしない。意識を集中すると、見えた。確かに凄まじい速度で動いている。今の私に奴を捉える術は……ない。

「絶望する姿を見せてくれ。その姿が俺に後悔をくれるかもしれないのだからな」

ジョゼフは懐から短剣を引き抜いた。再び、【加速】で消える。私に近づいて来るのはなんとか知覚出来たが、防御が間に合わない。辛うじて急所はガードしたが、一瞬のうちに身体中を八いや十回斬りつけられ、私は膝をついた。服に赤い染みが浮き出て、血溜まりが床にできはじめる。

「ほう、まだそんな目が出るか……っと危ない」

無詠唱による【魔法の射手・氷の十七矢】も避けられてしまった。が、それは時間稼ぎでしかない。この状況を打破しえる魔法を私は詠唱する。

「契約に従い、我に従え、氷の女王。来たれ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが。全ての命ある者に等しき死を 其れは安らぎ也」

【おわるせかい】

百五十フィート四方を完全氷結させる広範囲氷結殲滅魔法。普通に放つても、おそらく氷結する前に逃げられてしまう。だから………

### 術式固定

解放される筈だった魔力が私の右手の上に巨大な球体として固定される。

### 掌握

「ぐぐぐあぁあぁ」

握り潰し、取り込む。身体中に引き裂かれるような激痛が走るが、歯をくいしばって耐える。

### 術式兵装 【絶対零度】

「む、なにやら妙な技を使ったようだが、……これで終わりだ」

……  
瞬時に目の前に現れたジョゼフは私の心臓に短剣を突き立て……

### 第33話 狂宴(3)

「はあ、はあ……くっ」

ダンスホールには切り裂かれた人形の残骸が散乱していた。キュルケは息を整えて、身構える。未だに神の頭脳は健在。ガ  
ーゴイルを操り、攻め立てる。

「いい加減、死にな」

鋭く、まるで大剣のような爪がキュルケに迫るが、キュルケは懐に飛び込みガーゴイルを両断する。

「……ち、なんなのよそのガーゴイル」

キュルケの目の前で両断されたガーゴイルの上半身と下半身が近づき、粘土人形のように繋がると、再び立ち上がる。

「このガーゴイルは不死身に近い。どれだけ切り裂いても無駄だ  
というものを」

再びガーゴイルが襲ってくる。

（やっぱり、術者本人を倒すしかないか）

そう考えたキュルケだが、ガーゴイルは五十体近くいる。只でさえ捌くのがやっとなのだから、無理矢理攻めたら、致命的な隙になりかねない。

（切り裂いてダメなら、完全に燃やす！）

迫りくる鋭利な爪を掻い潜り、詠唱を始める。

「来たれ、深淵の闇、燃え盛る大剣！！！」

神の頭脳は止めようとガーゴイルでより一層激しく攻撃する。

流石にキュルケも避けきれず爪が掠り、鮮血が滲むが、呪文の詠唱は止めない。

「闇と影と憎悪と破壊、復讐の火焰！」

キュルケの腕に闇の炎が収束していく。

「我を焼け、彼を焼け、そはただ焼き尽くす者」

【奈落の業火】！！！！

神の頭脳に向けて、【奈落の業火】の凄まじい火炎が迫る。  
しかし、ガーゴイルを盾にして、防がれてしまった。

「もらったーッ！！！」

消し飛んだガーゴイルを無視して、キュルケは神の頭脳に迫る。  
キュルケの拳が神の頭脳を捉えるが……

「………ッ人形！？」

吹き飛んだ神の頭脳は壁に叩きつけられると、人形になってしまった。

『ふふふ、やるわね。そこに私がいたら危なかったわ』

ホールに反響するように神の頭脳の声が響きわたる。

「ちっ、なんかセコい奴ね」

『ふん、作戦と言いなさい。さて、まだまだガーゴイルは健在よ。十分に楽しみなさい?』

見れば【奈落の業火】の直撃を受けた十数体は再生していないが、それでもまだ三十体近くいる。

「まったく。しつこい奴は嫌われるわよ?」

キュルケは何処に神の頭脳がいるのか探しつつ、ガーゴイルとのダンスを続けるのだった。

511

### 【サイド・ルイズ】

流石はアーウェルンクス。ナギが苦戦しただけのことはある。私の想像の遙か上を行くわ。魔族化して互角、いや少し押され気味ね……。これはあまり使いたくないけど、術式兵装を使わないといけないかもしれない。

「ふふ、ふふふふふ、あはははははッ」



命がかかったこの緊張感。　すぐ目の前を死が通りすぎて行く。  
・　・　其れが堪らなく生を実感出来る・・・　何時からこんな  
ことを考えるようになったのだろうか・・・、まあいい。　兎に角、  
今が最高に愉しいのだから・・・　これじゃあデルフに戦闘狂と言  
われても仕方ないかもね。

「らあああつー！」

「はあッ！！！！」

もう何度目になるかわからない拳の打ち合い。　捌き、避け、  
時には相殺する。　お互いに吹き飛ぶ勢いを利用し距離をとる。

「フーッ」

地面を抉るようにして、やっと止まった。　不意に左腕に激痛  
が走る。　見ると二の腕をぎっくりと斬られていた。　だが、まだ  
動く。　アバラも何本か折れている様だ。　アーウエルクスを見  
ると、全身から血なのか、水のようなものを流し、少なからず負傷  
しているようだが、私ほどではないように見える。

「よう、相棒」

デルフの声に脇を見やると、地面に突き刺さるデルフがいた。私は引き抜いて構える。

「随分と苦戦してるみてえだな」

「うっさい。いいところなんだから、あんたは黙ってなさいッ！」

地面から巨大な石槍が飛び出してくる。上に飛び上がると、アーウエルンクスが既に待ち構えていた。石剣とデルフが残像を残して火花を散らす。

「これで・・・どつよッ」

我流 滅殺斬空斬魔閃 弐の太刀!!!

アーウエルンクスの強固な障壁をすり抜け、至近距離から全てを滅ぼす斬撃を飛ばす。

「ぐっ!!!」

夜空に一条の光の柱を作るが、紙一重で避けられてしまった。

が、衝撃だけで胸の辺りが浅く切り裂けたようだ。再び着地し、斬りかかる。上段、中段、下段。ありとあらゆる角度からの斬撃に、アーウエルンクスは石剣で対応し、凄まじく重い蹴りを剣劇の間に放ってきた。なんとかガードするが吹き飛んでしまう。私とあいつは二十メートルほどの距離で再び対峙した。

「はあ、はあ・・・予想以上よ。・・・愉しいわね」

間違いなくこの世界に来て一番の激戦。母上とは引き分けたが、あれは幼いころのトラウマで、全然力が出せていなかった。不死鳥とはかなり本気だったが、魔族化も使わなかったし、やはりこれ程追い詰められはしなかった。

「・・・見事。確かに君は最強クラスだ。このままじゃあ埒があかないね。・・・そろそろ決めさせてもらうよ」

アーウエルンクスの周囲に、砂が集まりだした。警戒して、光の槍を飛ばすが・・・

「・・・」

砂に触れた途端、削られたように槍が形を失う。

「高密度の砂による高速回転。触れれば削りとられる、と言った

「どこかしらね？」

「Exactly」

奥の手を出してきたか・・・、確かにこのままじゃじり貧ね。しょうがない、私もとっておきを見せてあげますかね」

「契約に従い、我に従え、光の女神・・・【聖なる剣群】」

術式固定・掌握

術式兵装【聖閃光刃】

私が術式兵装を纏った途端、身体の内側から制御出来ない程の魔力が溢れ出してきた。アーウェルンクスが驚いているが、私にも時間がない。制御が効かず、数十秒で自爆してしまうのだ。速攻で決める！

「はあッ」

【偽・光速瞬動】（普段の十倍速の瞬動）という技で、身体を一瞬だけ、不完全だが光にし、アーウェルンクスの後ろをとる。【聖閃光刃】の付加能力で、宙に光の剣を百本ほど作り出しアーウェルンクスに叩きつける。砂の壁とコンマ数秒拮抗する、そのコンマ数秒のうちにアーウェルンクスが飛び退いた。それを読んでい

た私は両手に光剣を握り、懐に入り込んだ。

「らああああッ！」

「ッ!？」

私の双剣の乱舞を身体中を浅く切り裂かれながら避けるアーウェルンクス。石槍が地面から突き出てくるが、今の私には届かない。上空に避け、再び数百の光剣を降らせる。アーウェルンクスは石の槍を飛ばして相殺したり、砂の壁や障壁で防いでいる。

「おおおおおおッ!!!!!!!!!!!!!!」

私は巨大な光剣を作り出し、有らん限りの魔力を込めて、ぶん投げた。亜音速でアーウェルンクスに飛んでいき、大爆発が起きる。一応、宮殿に被害が行かないように投げたつもりだが大丈夫だろうか……。そこで限界がきたようだ。全身から血が吹き出し、術式兵装が解ける。使えば重症確実ってどう言うことよ……。ハッキリ言って、今にも貧血で倒れそうだ。アーウェルンクスの生死を確かめようと、地面に降り立つと……

「おお、地の底に眠る、死者の宮殿…… 【冥府の石柱】」

「!!!!!!!!!!」

驚いた。あれを喰らってまだ生きてるなんて。現れたのは満身創痍と言えるアーウェルンクスだった。まあ私も満身創痍だが・

「ぐっ……驚いたよ、まさかそんな隠し玉が有るとは思わなかった。流石に今の状態で君を倒すのは無理そうだ……目的は果たしたし、退くことにするよ」

「待ちなさいッ!!!」

闇の槍を咄嗟に放つが奴は水を使った転移で逃げて行った。私も術式兵装のせいで身体にガタが来ていたので、深追いは出来なかった……ってアイツ、宮殿に【冥府の石柱】を放って行ったわよ!?

### 【サイド・アウト】

…… ジョゼフの短剣によって、心臓を貫かれたタバサ。しかし・

「ッ!? なにッ!?」

短剣を抜こうとした途端、ジヨゼフの腕が中ほどまで凍りつく。

「・・・掴まえた」

その隙を逃さず、タバサは腕に纏った【断罪の剣】で、ジヨゼフを袈裟斬りにしたのだった。

「・・・」

崩れ落ちるジヨゼフ。しかし、その姿を見ても、タバサの心には喜びも悲しみも生まれなかった。あるのは、今まで自分を支えていた柱が壊れるような、言い様のない嫌な気持ちだった。

「ゴホツ・・・、ふふふ、そうか、俺を殺すために人間を辞めていたのか。ふふ、どうしたシャルロット。俺はまだ死んでいないぞ?」

口の端から血を流しながらジヨゼフは立ち上がった。しかし、このまま放っておけば死んでしまうような重傷だ。

「……………」

無言のタバサ。その時、激しい轟音と共に、数体のガーゴイルを従えた神の頭脳とキュルケが壁を壊してタバサ達がいる部屋に入ってきた。

「ッ！ ジョゼフ様ッ」

神の頭脳が重傷のジョゼフに気付き、タバサの前に割って入る。襲ってきたガーゴイルにタバサは飛び退き、キュルケの横に立った。

「どうした？ 殺さないのか？」

ジョゼフがタバサに問いかける。

「ジョゼフ様、喋らないで下さい！ 今私が治療を「よいッ！？」ですがッ」「よいと言った……………」

「……………」



やはり無言のタバサ。隣に立つキュルケが心配そうな表情で見守る。

「……………私は……………ッ!!!」

タバサが口を開こうとしたその時、宮殿全体を揺るがすような轟音と共に、巨大な石柱が天井を突き破り落ちてきた。タバサ達には直撃しなかったが、どうやら一本だけではないらしい、断続的に地響きが続いている。

「ふん、アーウェルンクスめ、裏切ったか……………まあいい、さっさと行け」

「……………」

タバサとキュルケは無言でジョゼフを見た。先程まで瞳の奥に渦巻いていた狂気が、薄れたように見える。

「きゅい なんなのねッ！」

待機していたシルフィードが部屋に入ってくる。再び衝撃と共に地響きがタバサ達を襲う。宮殿が倒壊するのも時間の問題だろう。

「ああそうだ、アンリエッタ女王とその他を取り戻しに来たのだっ  
たな。そいつらはアーハンブラ城で石になっている。お前の仲  
間、あのルイズとか言う奴なら治せる筈だ」

「………何故？」

「さあな。 たんなる気まぐれだ。 ついでにこれもとっておけ」

そう言っつてジョゼフは冠を脱ぐと、それをタバサに投げてよこ  
した。

「さあもう行け。 俺が心変わりしないうちにな。 もう此処も数  
分と持たないだろう。 ……ああ、お前の母に一言、すまないと  
伝えてくれ。 ふふ、今さらだがな」

タバサは無言で考え込み、小さく頷いた。 しかし、次の瞬間  
にはジョゼフとタバサ達の間天井が崩れてきた。 タバサとキユ  
ルケは急いで退避したのだった。

「ふん、行ったか。 ……ミヨズニトニルン、お前も俺に付  
き合うことはない。 今からでも脱出したらどうだ？」

「私とあなたは一心同体。何処までもお供しますよ」

瓦礫がジヨゼフ達に降り注いでくる。 神の頭脳が尋ねた。

「……何故急にあのようなことを？」

「……さあな、俺にもわからん。只、人外にまでなつて俺を殺そうとしたシャルロットが、最後になつて躊躇ったことがきつかけかもしれない。未だに涙を流すことは叶わぬが、少し心が揺れた」

「……そうですか。なら、一緒に探させて下さい。あなたの涙を」

「ふふふ、お前も物好きだな」

崩れ落ちたベルサルテイル宮殿。その瓦礫の山から、ジヨゼ  
フトその従者の死体は見つからなかったそうだ……

第34話 終結？（前書き）

短いです。

### 第34話 終結？

「ここにいるのよね？」

そんなルイズの問いにタバサは無言で頷いた。アーハンブラ城にアンリエッタ達がいるとの情報をジョゼフから聞いた一行は、崩れ落ちるベルサルテイル宮殿を急いで後にしてやって来た。トリスティンから追われ、更にはガリアでも暴れてしまったため、早急にアンリエッタに誤解を解いてもらう必要があるのだ。

「早く見つけて、とっとと終わらせましようよ。流石に疲れたわ」

キュルケが疲れた表情で言った。

「それもそうね・・・ 傷は治せても、完全じゃないわ。ダメー  
ジは残るもんね・・・」

ルイズもよく見れば、かなりやつれている。アーウエルンク  
スとの戦闘や術式兵装の後遺症がまだ尾を引いているようだ。

アンリエッタ達はすぐに見つかった。アーハンブラ城には

警備の兵も居ず、また、隠されていた訳でもなかったためだ。牢屋で見つかった石化した三人を調べたルイズは、安堵の溜め息をついた。

「よかった、永久石化だったらどうしようかと思ってたけど、違うみたい」

ルイズはさっそく治療を始め、アンリエッタ・ウェールズ・マザリーニの三人は、徐々に石から元の姿に戻っていった。

「……………あら？　ここは……………」

「アン、逃げるッ！……………って、あれ？　僕は確か……………」

「……………うっ」

ルイズは戸惑う三人に、状況を説明しなければいけないことや、タバサが宮殿から脱出してから無言で考え事をしていて、しかも何故か王冠を握っていたことなどを考え、面倒だな〜とか思っていたりいなかったりし、溜め息を吐いたのだった……

見渡す限りの砂の海に立つ巨大な石碑。その周囲にはドーム状の結界が張られている。そんな場所の上空に、アーウェルクスとデユナミスはいた。

「……どうだ？ 破れそうか？」

黒ローブの男デユナミスが尋ねる。アーウェルクスは首を横に振った。

「……このままでは少し厳しいね。流石にこの規模の結界だといかに虚無の【解除】が籠ったこの石を使っても……」

アーウェルクスの手のひらにはビー玉ほどの、丸い石が乗っている。

「ちっ……… 無駄足だったと言うことか」

「……いや、一定の周期でこの結界が弱まることは分かっている。そこで使い、僕達の力も合わせれば或いは」



石を懐にしまいアーウェルンクスは言う。

「フム・・・ ならば待つとしよう。 ライフメーカーの復活は近い」

デュナミスの言葉を最後に、二人は何処かに消えて行ったのだ  
った・・・

### 第34話 終結？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。突然ですが、最近忙しく週一回の更新が難しくなってきました。楽しみにしている人がいれば申し訳ありませんが、次回からは不定期で更新していきたいと思えます。

くシエスタの日記く (前書き)

遅くなりました。

シエスタの日記

ルイズさん達がガリア王ジョゼフの誘いにのり、ガリアの宮殿  
に行ってしまった。 私はオルレアン公夫人の護衛のため、  
隠れ家の一つにいます。 なんてあそこでパーをだしてしまった  
んでしょうか・・・、一緒にルイズさんと行きたかったのに・・・  
(涙)

とにかく刺客もなく暇なので、日記を書きたいと思います。

やっとルイズさん達が帰って来ました。 途中、ドウドウー  
とか言う歯応えのない刺客がやって来ましたが、丁重に排除させて  
もらいました。 雑魚です(笑) あれで刺客とか(笑)

今日である事件から十日ほどが経ちました。　何やらタバサさんとオルレアン公夫人が、ガリアに戻るそうです。　ジョゼフ王が姿を消したため、次の王を誰にするかと言う話で、タバサさんの名が上がったそうです。　タバサさん曰く、女王になるつもりはなく、適当に擦り付けてくるとのこと。　明日には学院を立つそうなので、別れの酒盛りを準備しています。　早く帰って来るといいな、最近は大分強くなってきたので、そろそろ本気でやらないと勝てなくなってきました。　次に会うときが楽しみです……

気がついたら朝になっていました……　なぜかワインを一杯飲んでから、記憶がありません。　しかも、学院の中庭で飲んでいた筈なのに、起きたら大分離れたら草原に寝ていました。　辺りは何故か焦土と化して、ズタボロのタバサさんとキュルケさん、

そして服が汚れたルイズさんとエヴァさんがいました。何故でしょ？ ルイズさんに聞くと、『なかなか楽しめたわ。でも、あんたはあんまり酒を飲むんじゃないわよ』と、いわれました。

??????

第35話 その名はマック・ド・ナルド

其は、次元の狭間よりやって来た。

あらゆる災厄をその身に宿し、破滅をもたらす。

太陽は黒く染まり、大空は赤く染まる。

狂気の光が世界を照らし、今、滅びがそこに迫る。

神の左手ガンダールヴ。 勇猛果敢な神の盾。 左に握つ

た大剣で、次元の守りを切り払う。

神の右手がヴィンダールヴ。 心優しき神の笛。 あらゆる

る獣を操りて、導きし我を“あの”場へ運ぶ。

神の頭脳はニヨズニトニルン。 知恵のかたまり神の本。

あらゆる知識を溜め込みて、導きし我に急所を伝える。

そして最後にもう一人……。 記すことさえはばかれる。

四人の僕を従えて、我は死地へと進み出る。

『〜ヴリミルの日記〜』より。

サイド・ルイズ

丸太のような氷の槍が幾百も私に迫る。霞むような速度のそれを最小限の動きで捌き、私はエヴァに詰め寄った。ここは幻想空間の草原。今は早朝と言ったところか……。最近はこれと言に二時間は闘い通したが、外では数分だろう。鈍るのはって事件がないが、アーウェルンクスのこともあるため、鈍るのはこまる。と言うことで、エヴァに修行を手伝ってもらっているのだ。と言っても、模擬戦と言う名の死闘だが……。先ほだから、完全に死ねる技のオンパレードになっている。まあ幻想空間で死んでも、どうと言うことではないが。

「『氷神の戦鎚』……！」

エヴァの腕が降り下ろさせるのと同時に、巨大な氷の塊が落ち



てきた。　　デルフで一刀両断しながら、私は光の槍を飛ばす『光の投擲』を詠唱、宙に浮遊するエヴァに向かって開放した。　　しかしそこはエヴァンジェリン、『断罪の剣』を腕に纏わせて、光の槍を掻い潜る。

「おおおおおッ！」

「はああああッ！」

デルフリンガーと物質を相転移させる必殺の剣が激しい火花を散らしながらぶつかり合う。　　数十合と、斬り結ぶなかで、私は

『虚無の疾風』、エヴァは『闇の吹雪』を詠唱している。

「来たれ光精、闇の……」

「来たれ氷精、闇の精！」

『虚無の……』

『闇の……』

空中で斬り結んでいた私とエヴァは虚空瞬動を駆使して距離をあけた。　　お互いの距離は三十メートル程か、そこで私は『虚無の疾風』を開放。　　白と黒が混ざりあった竜巻が打ち出される。

エヴァも『闇の吹雪』を放ち、大爆発が起きた。

「はあ、はあ、はあ……やるなルイズ。私が数段本体より劣るとは言え、【闇の福音】相手に……」

その言葉と共に、エヴァは再び構える。　　いままでの闘いと、大爆発の余波で、草原はクレーターだらけだ。

「……そう言えば、あなたにはなんで私が【光と闇の女帝】って言われてたのか教えてなかったわね」

「なに？……常人にはどちらかしか使えないところをお前は両方使えるからじゃないのか？」

「ふふふ……止められるもんなら止めてみなさい？……  
来たれ、この世全ての光と闇……」

「……っ!？」

どうやら私の技に幻想空間が耐えられなかったようだ。 自  
分の部屋に戻っていた。

「おわっ……なんだあれは？ ラカンの出鱈目な、全力な  
んちゃらインパクトと同等か！？」

エヴァが目を剥いて掴みかかってきた。 まあ、私の最終奥  
義なわけけど…… 威力は旧世界の科学爆弾。

「まあまあだっただしょ？」

「……幻想空間とは言え、身体が一欠片も残さず消し飛んだ  
ぞ？」

エヴァが睨んできたが、スルーする。 こうして、朝の模擬  
戦？は終了した。 因みに言っておくと、私の最終奥義はチート  
ではなく、扱いが極度に難しいれっきとした技術……反発する光  
と闇の最大魔法を無理矢理合成させることで、爆発的な威力をもた  
らす……なわけで、ラカンみたいに【気】だけで出鱈目な威力を  
出すチートではない。

サイド・アウト

授業が終わり、ルイズはキュルケ、シエスタ、エヴァとまったりと過ごしていた。

「最近はずっと平和ね〜 これと言って事件もないし……もうすぐ三年生に進級だしね〜」

「いいんじゃないの？ と言うか、これが普通でしょ。どこの王族と死闘とか、戦場に突撃とか、普通の魔法学院の生徒のやることじゃないわよ」

私の言葉にキュルケが返す。

「そうですねルイズさん。平和が一番です！」

「それはそうだけど、これが嵐の前の静けさで、次は世界滅亡！と

かにならなきやいいんだけど……どつかしてるわね。あは、あはははは……」

「ふむ。まあ休める時に休んでおけ」

エヴァは紅茶を飲みながらそう呟いた。

それはある日の朝食に起こった。食堂に集まると、祈りを捧げるまえに、新任の教師の紹介があると言っただ。コルベールが生徒たちの前に立ち、言った。

「えー、急遽決まりましたが、図書館の司書を勤めてもらうことになりました。マック・ド・ナルド先生です。それでは先生、どうぞ」

出てきたのはローブを纏った青年だった。

「おはようございます。このたび図書館の司書になりました、マ

ツク・ド・ナルドです。 いたらないこともあると思いますが、どうぞよろしく願います」

「あら、いい男。 でも残念ね、私の心はジャンにしかもう向かないのよね」

「……………」

「って、あら、こっちを見てるのかしら……ルイズ？ ちょっと聞いているの？」

「あ、アルビレオ・イマ……なにがマツク・ド・ナルドよ……旧世界で食べたハンバーガーが旨かったとかで決めたんでしょね……って、んなバカな!？」

「ちょっと、アル！ なんでいるのよ？ てかどうやって来たのよ」

『ふふふ、なんのことやら。 私の名前はマツク・ド・ナルドですよ？ まあ詳しい話は後程……それに言ったでしょ？ 機会があれば貴女の人生を収集したい』

『……………』

「わ、私の生活が・・・ま、またからかわれる日々が・・・」

朝食の後、すぐさまルイズはエヴァと共にマック・ド・ナルド先生とやらの部屋に突撃していった。もちろん授業はすっぱかした。

「おやおやこれはミス・ヴァリエール。どうしたんですか？今は授業中の筈ですが？」

「・・・」

「ば、バカな」

ルイズは無言、エヴァは声をもらす。

「・・・一体どうやって来たのよ古本」

気持ちを落ち着かせ、ルイズは尋ねた。

「ふふふ、まあ本体ではないんですよ？　しいて言うなら人造霊、そこにいるエヴァンジェリンと同じですね。　大変でしたよ。　貴女が転移する瞬間に本体が私をまぎれこませ、追ってきた訳です。　ほとんど同じタイミングで転移したと言うのに、一年近く遅れてしまいました」

「・・・なにか起きると思ったが、これ程とは・・・ルイズ恐るべし」

「エヴァ、あんた・・・」

さんざん魔法世界でからかわれたルイズとエヴァにある意味最凶の敵がやってきてしまったのだった・・・

「アル、あんたって奴は・・・」

「ところでアルとは誰ですか？　私の名前はマック・ド・ナルドですが？　マックと呼んで下さい」

「くっ、そのネタを押し通す気だな・・・」



「くくく、それにしても人造霊とは言え、使い魔としてキティを召喚するとは……ルイズ、あなたはそんな趣味が「んなわけあるかーッ！ このエロナスビが」

「貴様、さりげなく人のことをキティと呼んだな！」

「で、こんな惨状になってる訳ね」

「「「「「」」」」」」

キュルケの言葉に無言で返すルイズとエヴァ。

「ふふふ、全く。久しぶりの再会だからと言って、激しいですね」

「「あなた（貴様）って奴は……………」」

部屋の中はめちゃくちゃ、と言つか最早部屋の原型を保っていない。が、いつの間にか場所がルイズの部屋に変わっていて、ルイズは自分自身で自分の部屋を壊していた。

「もうやだ…… 何時もの調子が出ないわ。 コイツ相手だとペースが狂わされて……………」

「……………諦めるルイズ。 私は諦めた」

「ふふふ、 よろしくお願いいたしますよ、二人とも」

そんなマック（アル）の言葉に二人は深く溜め息を吐いた。

### 第36話 壊れる封印

窓から射し込む眩い光で、ルイズは目を覚ました。

「あゝ朝だゝ」

あくびまじりにそんなことを呟き、寝間着から着替え始める。

ジョゼフによる狂宴から数ヶ月、当初はアーウエルンクス達の行方を調べていたのだがまったく見つからず、一行は普段の生活に戻って行った。ガリア王ジョゼフが事件の中で行方不明になったのをきっかけに、タバサを女王に祭り上げようと言う動きがうまれ、めんどくさそうにタバサは一時ガリアへと戻って行った。まあ、マック・ド・ナルド（アルビレオ・イマ）の人造霊が魔法世界から追ってくると言う、ある意味大事件が起きたが……

着替え終えたルイズが朝食に向かうと、ちょうどキュルケに出会った。因みにデルフとエヴァは部屋である。

「おはよう、ルイズ」

「オッス」

世間話をしながら食堂へ向かう。食堂では明日に【春の使い魔召喚】が控えているせいか、二年生達の間ではりつめた空気がただよっていた。ルイズがこの世界に戻ってもうすぐ一年だ。

「それにしても、タバサがまだ帰って来ないわ。三年になるまでには戻ってくるって言ったのに・・・」

「仕方ないでしょ、後腐れなく終わらせてくる、とかカツコいいこと言ってたんだから。まあなにかと難しいんでしょうね」

「うん・・・」

と、タバサについて話していると、料理が運ばれてきた。

ここ数ヶ月、たいして大きな事件に巻き込まれていなかったからだろうか、ルイズは忘れていた。・・・厄介事は忘れたところにやってくることを・・・

「・・・ついにきたな」

「ああ、いまが一番弱まるタイミングだよ」

そう言つて、白髪の青年アーウェルンクスは、懐から【解除】が籠められた石をとりだし、石碑を守る結界へ投げつける。

バチバチと火花を散らし、軋みだす結界・・・

「おお、地の底に眠る死者の宮殿・・・」

### 冥府の石柱

「ぬんっ」

アーウェルンクスの放った巨大な石柱とデュナミスの召喚した百メートルにとどく召喚魔の拳がひび割れた結界に激突し、硬質なガラスが割れるような音と共に砕け散った。

残るは石碑のみ・・・

「はっ！」

短い呼気と共にアーウェルンクスが放った拳が巨大な石碑に打ち付けられ、轟音をたてながら崩れ落ちる。崩れた瓦礫の前で二人はかたひざをついた。

「お待たせしました、ライフメーカー」

.....

「.....?」

返ってこない返事にどうしたのかと顔をあげた二人は目を疑った。造物主が封じられていると思っていた場所には、世界を塗りつぶすような漆黒の球体が浮かんでいたのだ。直径一メートル程のそれは次の瞬間には、二人に向かって幾百もの触手を伸ばしてきた。

「.....ッ!？」

「ぬっ!??くうッうあああああああ」

咄嗟に異変に気付いたアーウェルンクスはその場から飛び退いたが、デュナミスはコンマ数秒反応が遅れた。黒い触手はそのままメキメキと締め上げ、デュナミスは唸り声を残し、消え去った。

その様子を呆然と見ていたアーウェルンクスは自分に迫る触手に気付き、石の槍を放って牽制した。あまりにも予想外の展開に、なんとか頭を切り替えようとすする。

（いつたいあれはなんだ・・・？ 黒い球体・・・いや徐々に変化し始めているのか？・・・ふふふ、僕達がライフメーカーだと思っていたものは、とんだ怪物だったと言うことか・・・）

造物主と勘違いする程の力の波動が周囲に撒き散らされ、突風が吹き荒れる。

「・・・ツク、このまま殺られるのもしかた。抵抗はさせてもらおうよ」

全身に死の予感を感じながらも、アーウェルンクスは呟いた・・・

エルフの首都アディール。海岸線から突き出た直径五キロにも及ぶ人工島には魔法世界（ムンドウ・マギクス）のメガロメセンブリアのような町並みが建ち並んでいた。

朝からたたき起こされたルクシャナは恋人？のアリイと共に、ネフテスの評議会本部・・・通称【カスパ】と呼ばれるエルフ世界の中枢に来ていた。ルクシャナとしてはティリユーク統領が自分達になんのようにかと思っていた。

「ちよつとルクシャナ、貧乏揺すりはやめなよ。この世界を管理するべく選ばれた高貴な種族である僕らがそんなんじゃない・・・」

「まったく！ 少しくらいいいじゃないよ。こつちは朝早くからたたき起こされて、気がたつてるんだから」

と、そんな話をしていると、統領が待つ部屋に呼ばれる。部屋の前にはすでに一人のエルフがいた。

「あつ、叔父様！」

「ひさしぶりだな、ルクシャナ」

そこにいたのはビダーシャルだった。ルククシャナ。

満面の笑みで飛び付



「ところで、なにかあったんですか？」

と心配そうな顔をして尋ねるアリイ。

「ふむ、今からティリユーク統領に聞くところだよ」

三人が部屋のなかに入ると、そこには年老いた老エルフが机越しに座っていた。

「・・・来たか」

「はっ、お待ちせしました」

「それでは早速だが、君達三人で例の者達を連れてきてくれないか」

「例の・・・と言うと、あのルイズ・フランソワーズやその仲間達ですか？」

「むっ」

「理由をきいても？」

「……今朝、聖地の結界が何者かに破られた」

「「！」「！」「」

統領の言葉に耳を疑う三人。それもそのはず、聖地の結界とは遙か昔より一度も破られたことのないとされる、絶対の護りだったのだ。

「調査隊をすぐさま派遣したが、最悪の事態もあり得る。すぐに出発してもらいたい。小型飛行艇の使用を許可する」

その言葉に驚き、アリエーが言った。

「ちょっと待って下さい！ 蛮人にそのようなものを見せてもよろしいんですか！」

「言ったはずだ、最悪の事態もあり得ると。全エルフの中でも五指にはいる飛行艇の操縦者である君ならば、早く行けるだろう。もしかすると、伝承にある六千年前の大災厄も起こり得るかも知れん。戦力が多いにこしたことはないだろう」

「しかし、一体誰が？ 悪魔の力の使い手が四人揃いでもしないかぎり、結界が破られることはないはず……」

「それに関しては調査隊の報告を待つ。君達は一刻も早く【紅き翼】のルイズ・フランソワーズ、そして出来ればその仲間も連れてきてくれ」

「「分かりました」」

「……統領。叔父様やアリイーは分かりませんが、なんで私は呼ばれたんですか？ 私には、カヤルイズさんとの面識もありませんし、アリイーみたいに操縦が上手いわけでもないんですが……」

「ふむ、君は学者なのだろう？ なにか起きないとも限らないからな。それに、恋人が居た方がやる気が出るだろう？」

そう言っアリイーに笑いかける統領。

「か、からかうのはやめてください……」

聖地の結界が破られ、五時間が経過。中央管制室のモニターでティリユークが報告を待っていたその時、それは起こった……

ノイズと共に途切れる映像。管制室にいたエルフ一同にどよめきがはしる。

「ッ!? どうした、何が起こったんだ!」

声を荒げてしまったティリユークの問いに、かすれた声でスタッフの一人が答えた。

「ち、調査隊との通信断絶……護衛艦の反応……ロス  
ト」

広域望遠鏡に映し変えられたモニターには、爆発的に肥大化し、宙へと浮かぶ漆黒の球体……いや、町の一つや二つは呑み込める程のそれは最早、小惑星とも言えはいいのだろうか……が映っ

ていた。

同刻、ルイズの部屋。

「あ、あああ、ああ……………」

「ん？ どうしたデルフ？」

一人、ポテチにゲームを楽しんでいたエヴァは、いきなり騒ぎだしたデルフに訝しげに問いかけた。

「あ、姐さん…… なにか知らねえけど、不味い、とてつもなく不味いことが起きてる気がするぜ」

「……………ほお」

「一刻も早く相棒のところに……………」

「……ふむ。厄介事の匂いがするな……ふふふ。この時間だと食堂か」

ゲームと食べかけのポテチを巻物にしまい、エヴァはルイズがいるであろう食堂へデルフと共に向かって行った。

サイド・ティリユーク

モニターに映るのはグロテスクな化け物ども……人間と昆虫を掛け合わせたようなキメラや瞳が身体全身にある竜種……そんな化け物どもが、太陽の代わりとばかりに空に浮かぶあの漆黒の球体から、無数に生み出され、今、我々エルフの街を囲っている。街全体を結界で覆うことで凌いでいるが、それもいつまでもつか……幸いなのは、アリー達を【紅き翼】を探すために、早めに出発させたことか。あと一時間でも遅ければ、希望の光を残すことすら出来ないところだった……

太陽は黒く染まり、大空は紅く染まる。奇しくも伝承通りになってしまったが……まだまだ、まだ終わってはいない……



「なんなのよ本当に？ いきなり過ぎでしょうが……っとないわね！」

襲いかかってきたギーシュ（久しぶりの登場）をデコピンで吹き飛ばし、なんとか状況を整理しようとする。

「ねえルイズ」

そんなとき後ろから声をかけられ、振り向くと、そこにはキュルケがいた。

「ん？ なによキュルケ、今考え事してるんだ……けど……さあ〜」

見ると、明らかに目が正気じゃない。      と言っか今にも【奈落の業火】を放とうとしている。

「死・ん・で（笑）」

「だあ〜あんたもかい!？」



## 奈落の業火

反射的に避けるが、後ろにいた生徒達が火だるまになって吹っ飛ぶのが見えた。冷や汗をたらしながら私はキュルケの首に手刀を打ち込み気絶させる。

「……………ま、いつか。あそこにいたのが運の尽きってことで

取り敢えず燃えているところを水属性の魔法で消火。すると、暴れている教師と生徒達がいきなり潰れて気絶した。恐らくマツク（アル）の重力魔法だろう。教師のテーブルの方から、微笑しながらアル……………もうマツクでいいや……………マツクが歩いてきた。

「いやいや、こんなことが毎回起こるんですか？ ふふふ、激しいですね」

「激しいのは、あんたの頭の中よ……………さて、取り敢えず」

『エヴァ、聞こえる？』

エヴァに念話を送った。

『聞こえる。　一体なにが起きた？』

『あなたは正気でしようね？』

『？　ああ、大丈夫だ。　デルフがうるさくてな、お前に話があるとか言うから部屋を出たら、いきなりメイドが襲いかかってきた』

『・・・殺してないでしようね？』

『死んではいないだろ・・・たぶん』

『たぶん！？　今、たぶんっていったわよね！？』

『どうでもいいから続けるぞ。　メイドをあしらっていると、シエスタが来てな、正気のようにだったから、今そっちにむかっているとこらだ』

　どうやらシエスタは大丈夫だったようだ。　一旦事態を整理したい。　さっきの思念波がどの程度の範囲に発せられたのかが気になる。　・・・この学院だけ？　それともトリステイン全域？　それとも・・・このハルケギニア全域？　どちらにせよ、かなりの規模で被害が出ているだろう。

『・・・分かったわ。　取り敢えず外に出ましよう。　正門に来て』

『分かった』

やれやれ、なんだか大変なことになってきたわね……



そんなところにやって来たのは三人のエルフが乗った飛行艇だった。ルイズ達は、聖地で起こったことなどを聞き、急いで飛行艇に乗り込んだのだった。連絡しようとビダーシャルは考えたが、通信がと繋がらない。すると、聖地の方向からキメラがまさしく無数に飛来してきたのだ。

「見えた！ アディールだ！」

そう声をあげたのは、操縦者であるアリイだった。

「そんな……」

「……クツ」

見えてきた街は結界に覆われ、キメラ達の侵入を防いでいた。が、所々破られ、そのたびに撃墜し、修復している。

『……え……か……』

「っ！」

ビダーシャルが急にきた通信に気づき、応答する。

『聞こえるか?.....』

「はい。こちら【紅き翼搜索隊】のビダーシャルです」

『テイリユークだ。よくやった。【紅き翼】のメンバーは見つかったか?』

「はい」

『それではかわってくれ』

「少々お待ちを」

そう言って、ビダーシャルはデッキでカメラを撃墜している、ルイズの呼びにいったのだった。

サイド・ルイズ

グロい姿をしたキメラ達を撃墜していると、ビダーシャルが来

た。なんでも、エルフの統領が私を呼んでいるらしい。エ  
ヴァとシエスタ、マックにこの場を任せ、私は船のなかに入った。

挨拶なんかはメンドクサイので省略。話をまとめると、聖

地の上空に浮かんでいる黒い球をどうにかして、壊して欲しいらしい。  
解析とやらによると、全てのキメラの力の核が黒い球らしく。  
あれを壊せば、キメラは増えない上に、今いるキメラも消える可能性が高いらしい。状況から言っても、実力から言っても、そんな事が出来る可能性があるのは私たちだけだろう。しようがないので引き受ける。こうして未だにキメラを生み出し続けるあの黒い太陽に向かうことになったのだった。

「……………と言うわけで、今からあの黒い球に突撃していく訳だけれど……………質問はある?」

「……………まあそうなると思ったがな」

「ふふふ、早速これですか。ルイズ。貴女といると、本当に退屈しませんね?」

「うっさいわよその二人。 . . . シエスタはどうする？ もしかしなくとも死ぬ確率は高いわよ？」

「ここまで来て仲間外れですか？ それに、ここで降りたって外にはキメラがうようよいるんですよ？」

「. . . . . それもそうね」

さてと、なんだか知らないけど、あの黒い球には消えてもらいますかね。

黒い球に向かって飛ぶ飛行艇。 と、やはりキメラ達が妨害してきた。

「総数 . . . 五万體。 今の高度は上空三千メートル。 . . . 黒い球の高度は一万メートル、飛行艇で運べる限界だ。 出来る限り



近づく。 合図したらそちらで向かってくれ。 . . . . 頼むぞ」

ビダーシャルが言った。 エルフのアリイーとルクシヤナも頭をさげる。

「頑張ってください」

「こんなことを言えたぎりじゃありませんが . . . . 世界を頼みます」

私は背を向けながら、片手をあげることで返事をし、デッキに向かった。

「さてさて、大変なことになってしまいましたね」

「 . . . . そっ思ってるなら、もうちょっと緊張しなさいよ。 その微笑」

「ふふふ、これは癖ですからね。ま、こんなところで貴女が死んだら、人生の収集が出来なくなってしまうですからね。頑張りましょうか」

そんなことをマックと話していると、エヴァが呆れたように言った。

「ルイズ。そうやってマックの相手をしているお前も、随分と余裕だな。そら来たぞ！」

空を埋め尽くすキメラ。 暴れるとするか・・・

サイド・アウト

「弾幕張るわよ弾幕ッ！……！！ エヴァ！」

「ふんッ」

魔法の射手・氷の1001矢!!!

「光の精霊・・・」

魔法の射手・光の1001矢!!!

「潰れなさい」

「いきますッ！」

疾風黒狼牙!!!

ルイズとエヴァの魔法の射手による弾幕。 マツクの重力魔法。 シエスタの狗神。 瞬く間に数を減らすキメラ達だが、数が数だ。 十数秒の拮抗のあと、すぐに盛り返してくる。 が、ルイズ達もそれを黙って見ている訳はなく、次の詠唱を終わらせていた。

「千の・・・」

「おわる・・・」

ルイズの手には雷撃、エヴァの手には絶対零度の冷氣が宿る。

・・・雷ッ！！！！」

・・・せかい！！！！」

広範囲雷撃殲滅呪文と広範囲氷結殲滅呪文が放たれ、視界にうつるキメラが消し飛んでいく。

『あと、二千メートルだ。一万メートルに到達したら、主砲を撃つ。それを合図に向かってくれ！』

スピーカーからビダーシャルの声が響く。すでに随分と黒い球にルイズ達は近づいていた。ラストパートと、気合いをい

光の1001矢

闇の1001矢

術式統合！！！！

「はあああああッ」

ルイズインパクト！

ルイズの右拳から放たれた極太の光線……視界が白く染まる。

「……千は墜ちたわね」

「「……」」

「ふふふ、流石はルイズ。そのままアレを攻撃した方が早いんじゃないですか？」

「流石に無理よ」

『いくぞ』

そして、主砲が漆黒の球体に向けて放たれた。

### 第38話　ラスボス？

サイド・ルイズ

血の色をした空。　目の前には視界に収まらないほど巨大な

球体。　漆黒のそれを守るように飛びかかって来る異形のキメ

ラ達。　つい数十時間前まで平和な時間を謳歌していたとは思え

ない光景だ。　近くまで来て気づいたが、黒い球体は波打ってい

た。　おそらくなかに入れるのだろうが、一体どうなっているの

やら・・・　ふと思ったが、ラスボスがいるような場所は空中の

ダンジョンとかじゃないといけない決まりでもあるのだろうか？

【完全なる世界】のライフメーカーに、今回の正体不明の封印さ  
れていた奴もそうだし・・・　まあいい、嫌な予感化する

が、そんなのねじ伏せてやろうじゃないの・・・

キメラを蹴散らしながら、私たちは漆黒の球体へと突っ込んで

行く。　そのとき、ふと足下のハルケギニアの大地を見た。

流星に私でも、ここまで高いところからだと家だか城だか全く見え

ないが・・・

まさか、このとき見た景色が、私の知る最後のハルケギニアに  
なるとは、このとき夢にも思わなかった・・・

球体に入った私たちが最初に見たものは、何処までも続く灰色の砂丘だった。生命の欠片すら存在しない・・・というより、空間そのものが死んでいるかのようだ。そのとき、私は違和感に気がついた。

「・・・・・・・・おいルイズ」

顔をしかめてエヴァが話しかけてき。

「ええ・・・・・・・・」

「これはまた・・・・・・・・凄まじい相手ですね」

エヴァもマツクも気がついたようだ。      そう言う私もいまだに信じられないが、「こ」は・・・・・・・・

「一体どうしたんですか皆さん？」

「・・・・・・・・・・違うのよ」

「それは、さっきまでとは景色が違いますが・・・」

「違うわ・・・世界が違うのよ」

「・・・はい？」

「幻想空間でも、閉鎖結界でもない・・・ たぶん、あの球体は一つの世界だったのね・・・信じられないけど」

「っ！・・・でも、それと相手の強さがどう関係するんですか？」

「そりゃどのくらい強いのか分からないけど、世界ひとつを維持できる奴が弱いと思う？ まあやることは変わらないわね。早くどっかにいるラスボスでも倒しちゃいませよ」

しばらく歩くと、人影が見えてきた。

其処にいたのは・・・

「アーウェルンクスと・・・？」



何故疑問系なのか言うと、黒い何だかよく分からない文字が全身に浮かび上がっているからだ。 何処か違和感を感じる。

「……来タカ」

今、確信した。 コイツ、アーウェルンクスじゃない。

「我ノ世界デ死ネ」

そう言つて襲いかかつて来る。 おそらくラスボスに操られてるってところか……。 いい加減けりをつける！

### 魔族化

私の身体が人間のそれから、魔族の物に変わっていく。 髪の色は銀に変わり、爪は獣のように鋭く伸び、尾てい骨の辺りから竜種のような尻尾まで生えてきた。 それと共に溢れる力。 その力を拳に集中させ、アーウェルンクスを迎え撃つが……

「っ！？ かはッ……」

右のストレートを軽く捌かれ、いいのを一撃鳩尾にもらって私

は吹き飛ばされた。 . . . . おかしい、前に戦った時は魔族化して拮抗か多少押し負けていたくらいだったはず . . . . 操られてるせい？

「ちいつ」

エヴァが氷の槍を飛ばし、マツクは重力を操り押し潰そうとする . . . . . アーウェルリンクスはその場に佇んだまま動けない . . . . . いや、動かないのか。障壁のみで全て防いでもった . . . . . なんて高密度な多重障壁、アレじゃあ攻撃を届かせるのは容易じゃない。 っと、まずは私を仕留めることにしたのか、突っ込んでくる。 私は構えるが鈍い痛みが一瞬走り、動きが止まってしまふ。 不味い、さっきのでアバラに罅が入ったのか . . . . . すぐ治るだろうが、今は不味い . . . . . ピンチの私。 っと、そこでシエスタが横から突撃してきた。

「狗音 . . . . 爆碎拳ッ！」

高密度に圧縮された狗神がシエスタの右拳を黒く染め上げている。

「はああああッ!!!」

渾身の力で叩き付けるシエスタ。

だが . . .

「邪魔ダ」

腕を円を描くように回転させ受け流される。 態勢が崩れた  
ところで大砲のような蹴りがシエスタに突き刺さる。

「があッ」

吹き飛ばされ、砂丘を崩しながら地面を転がるシエスタ。  
くそっ、強い。

「らあッ!」

【光の投擲】と【闇の投擲】を無詠唱で発動。 光と闇の槍を  
飛ばし、アーウェルンクスの高密度多重障壁を削る。 ハッキリ  
言ってこんな多重障壁は異常だ。 もはや人間業を三回ぐらい超  
えてる……

「しっ」

「私を無視するとは上等だッ!」

いつの間にか接近していたマックが掌底、エヴァが【断罪の剣】  
で斬撃を繰り出していた。 それに合わせ、私も右の拳に【魔法

の射手・光の千一矢】を集束、三人同時にアーウェルンクスに叩き込んだ。吹き飛ばぶアイツ。でも、追撃をかける前に高密度、高速回転の砂の壁が私たちに襲いかかる。飛び上がり回避する。

「……げ」

と、気配を感じ上を向くと、吹き飛ばされたアイツが【冥府の石柱】を発動させ、空一面に巨大な石柱を浮かべていた。

「終ワリダ」

そう言って手を降りおろす。私は避けきれないと考え、一点突破をすることにした。

「来たれ光精、闇の精……」

虚無の疾風！！！！

一部石柱を吹き飛ばし、僅かな隙間を作り出す。全速力で脱出。危なかった……。地面に石柱が突き立ち、轟音を響かせて砂煙をあげる。が、それとは別に氷が砕ける音が聞こえた。それと同時に石柱が一本崩れる。

『ルイズ・すま・ん』

・・・エヴァがやられたか。 一本の石柱に降り立つ私。  
するとマックが現れた。 左腕と頭から出血している。

「エヴァが殺られましたか」

「いや、人造霊だし死んではいないでしょ。 それよりあんた、【  
イノチノシヘン】は使えないの？」

「まあ、言いたいことは分かります。 ナギカラカン辺りに化けて  
戦えと言うんでしょう？ ですが、人造霊になり力が落ちた私では本  
体よりかなり時間が限られてしまいますよ？ おそらく数十秒で解  
けてしまいます」

「・・・そう。 じゃあその数十秒を稼いで頂戴。 私は術式  
兵装を準備するわ。 相手は出力は決まってるけど、魔力量は無制  
限。 このままじゃじり貧になるわ」

「仕方ありません。 頼みますよ？」

マックは懐からカードを取りだす。

来たれ

それを感じとったのか、アーウエルンクスが晴れつつある砂煙から突っ込んできた。マックが何百冊と浮遊する本の一冊を掴み取り、よどみなく槩を挟む。それを抜き取りと同時に光が包み込み、次の瞬間、ソコに立っていたのは赤毛の青年だった。

「はあッ！」

「・・・ッ!？」

数百の雷の槍を飛ばし、膝蹴りをお見舞いする。準備完了まであと十五秒。

「百重千重と重なりて、走れよ稲妻」

千の雷!!!

どうやら出し惜しみする気はないようだ。アーウエルンクスが吹き飛んだ辺り一体に、雷の広範囲殲滅呪文が炸裂する。つと、ここで時間切れらしい。光と共に、マックは元に戻ってしまった。

「時間稼ぎご苦労つて言うかそのまま倒しちゃいなさいよッ」

「ふふふ、またまた無茶を言いますね。後は頼みましたよ。もう余力はありません」

しょうがない。ここで決める！

【聖なる剣群】 固定・掌握

術式兵装【聖閃光刃】

魔族化した身体が擬似的に光の精霊と化し、うつすらと輝く。段々と自分の身体が人間の物から離れて行ってるのか、前程のはち切れるような感覚は受けない。これなら数分は持つだろう。

普段の十倍速でアーウェルンクスが吹き飛んだ辺りの石柱に移動。石柱の残骸にポロポロになり立っているアーウェルンクスがいた。石の槍を飛ばしてくるが、無視。そんな牽制程度の技じゃあ、半精霊化している私には無意味。すぐさま両手に刀身が一・五メートル程の光の両刃剣を作り出し、斬りかかる。

前はこれで圧倒出来たのだが、今回は拮抗する。目にも映らない速度で双剣を乱舞させる私に対して、アーウェルンクスは石剣や拳、高密度の砂などを使い、凌いでいく。

「っっ」

短い呼吸と共に私は左手の剣を袈裟斬りに、さらに刹那の間もなく右の剣で胸を串刺しにしようと突く。　　が、決まらない。

紙一重で逸らされたり捌かれたりしてしまう。　　・・・や  
はりこの兵装はスピードはスゴいが、威力が軽くなってしまつようだ。　　しかし、それを補う鋭さがある。　　閃光のごとき斬撃を浴びせ、確実にアーウエルンクスに傷を負わせていく。　　っと、そろそろ時間が迫ってきたため、決める！　　後ろに回り込み、数百の光で編まれた剣を生み出し降らせる。　　アーウエルンクスは流石に喰らってはくれないが、これは直撃を狙った訳ではない。

「・・・ッ!？」

気づいたようだが遅い・・・　　アーウエルンクスが逃げられないように周りには剣が檻のように突き刺さっていた。　　突破するにしても一瞬はかかる筈だ。　　私にはそれだけあれば充分！

「あああああああッ!!!」

ルイズ流　　奥義　　光剣集束【光の太刀】!!!

【聖なる剣群】を一筋の斬撃に集束させ、自分の魔力と共に放



った。アーウェルンクスは光に呑み込まれる。同時に術式兵装は解けた。

「はあ、はあ、はあ・・・はあはあ・・・はあ・・・ふう」

身体全身が休息を欲して凄まじい疲労感を訴える。だがこの程度ですんで良かった。魔族化が進んでいると言う事だが、以前までは使う度に反動で重症になっていたのだ。それを考えれば軽いものだろう。

地面に突き立つ光の剣や石柱が消えていく。残ったのは砂丘に残る【光の太刀】の爪痕と、身体の三分の二が消し飛んだアーウェルンクスだけだ。

「コノ身体ハココマデカ。ハハハハハハ、ヤルナ？ 我ヲ封印シタヤツヲ思イ出スゾ・・・ダガ、マダダ、マダ終ワラナイ」

そんなことを言うと、膨大な魔力が集まっていき、異形の姿へと変化していく。これがラスボスお馴染みの第二形態ってやつかしらね？ ったく冗談じゃ無いわよ。

第39話 最終決戦（前書き）

術式兵装【聖閃光刃】の付加能力は

・出力アップ

・擬似光精霊化

・偽光速移動（通常の十倍速。速いが威力が軽くなる）

・光剣生成（【千の顔を持つ英雄】の光剣のみバージョン）

です。

### 第39話 最終決戦

「第二形態・・・そんなのあり？」

ルイズの眩きが灰色の砂丘に響き渡る。 術式兵装や魔族化

も解け、すでに身体はポロポロ。 【聖閃光刃】の反動で、凄ま

じい疲労感がルイズを襲っていた。

(・・・魔力の残量、三割弱・・・やれるかしらね?)

ピシリと音がした。 空気にひびが入ったかのような、大き

な癖にどこかひそかさを秘めた音だった。 ビリビリと肌を震わ

せていたプレッシャーが、突き刺さるような痛みに変わった。

音の元は、アーウェルンクスだった。 異形と化し、膨れ上がっ

た鱗の塊が音を立てて崩れ始めた。 まるで鱗の繭から羽化する

ように、中からナニかが繭を破ろうとしていく。 一枚一枚剥が

れ落ち、砂煙をあげていく。 そこで、戦いが始まってから沈黙

していたデルフの声がひび割れる音に混じった。

「・・・ここからが本番だぞ相棒」

「ははは、どうしましょうかね、こっちはポロポロだったのに」

乾いた笑い声が口からこぼれる。　　デルフに手をかけた。

鞘から抜き去り、デルフの刀身が空気を裂く。　　こうしている間にも、ハルケギニアの人々はキメラに襲われ、命を散らしているのだ。　　撤退は出来ないし、そもそもさせてくれないだろう。

だから、ルイズは身構える。　　全身を走る魔力の密度を上昇させる。　　ついに鱗の繭が二つに割れた。　　中から現れたのは、完全にアーウェルンクスではないことを証明していた。　　長く飛び出した顎、零れた鋭い牙の列、刺々しい巨大な翅、そして、小山程もある巨体。　　竜種に似た、全身灰色のそれが吠える。　　空気を重く揺すった。

「気を付ける相棒。　　ブリミルと四人の使い魔は……コイツに殺された」

「……………」

アーウェルンクスの声で喋っていた声が聞こえない。　　あの姿になって、喋れなくなったのだろうか、それとも元々は喋れなかったのか……　　ルイズは頬を伝う汗を感じていた。　　全身から汗が噴いていた。

封印されていた魔獣……このレベルなら帝都守護聖獣の一体【古龍龍樹】に匹敵、もしくは凌駕する。　　さしずめ、邪神と言ったところだろうか。

両足に魔力を集中。五十メートル程の距離を一瞬で詰める。  
が、寸前で寒気を感じて転がる。凄まじい力の高まり。  
直後、一瞬前までいた場所が消し飛ぶ。【光の太刀】に匹敵  
する熱線が地面を抉りながら、遙か彼方の地平線まで伸びていく。  
舌打ちと共に降り下ろされてきた大木程もある三本の爪を回避。  
巨体を感じさせない速さだった。

「来たれ氷精、闇の精……」

闇の吹雪!!!

ルイズは冷気を纏った闇の竜巻を放つ。周囲を凍てつかせながら突き進む竜巻。邪神は……動かない。まるで小石が飛んで来たのを見るような、そんな嘲笑の光をルイズは邪神の瞳に感じた。

直撃すると確信した瞬間……いきなり何かの壁にぶつかったように、【闇の吹雪】は掻き消えた。

(……ッ!!! 今のは……なに?)

障壁にぶつかったにしては、余りにも呆気なく霧散した自身の魔法に、焦る気持ちを抑え分析しようとするルイズだが、……分からない。そんな時、デルフが声をかけてきた。

「思い出した！」

「何を」

「アイツは防御の瞬間、自分の周りに【世界】って壁を張るんだよ。いくら威力があっても、普通の技じゃあ届かないぜ？」

「……なにそれ。あの巨体に、あの速度、更には私の決め技クラスの攻撃をバンバン撃ってきて、ついでに防御は無敵？　どんな無理ゲーよ」

そんなことを話しているうちに、邪神の周囲に光が集束。先程の【光の太刀】クラスの攻撃が今度は同時に五つ。一斉にルイズに向かって放たれる。

「クソッ」

吐き捨てるように毒づき、回避しようと試みる。五本のうち四本は微妙にずれ、直撃コースから外れていたが、一本の熱線だけ直撃するとルイズは瞬時に見極めた。……が、見えるからと言って避けられるとは限らない。回避しきれず、右腕の二の腕が半ばまで抉られた。

「ぐぐぐぐぐッ！！！！」

鮮血を撒き散らす。 自分の腕の肉が焦げる匂いを感じるルイズ。  
咄嗟にデルフを左手に持ち変える。

「相棒、大丈夫か！？」

「くっ……これが大丈夫に見えるなら、頭の病院に行った方がいいわよ？ ツぐ……クソッ それで？ アイツにぶちかます方法はなんかないの？ このままじゃ時間の問題なんだけど？ あの巨体を消し飛ばす方法はあるけど、防御が厄介ね」

「なに？ アイツを消し飛ばせるのか？」

「まあ……魔力の残量から言って、かなり微妙だけど」

「賭けになるか…… まあアレを倒せる可能性がゼロじゃないだけかもしれませんが？ それじゃあ方法だ。 オレは一回だけあの守りを切り払えるように造られてる。 たった一回だが、ヤツの防御を抜ける筈だ。 その時に頼む」

「……嘘じゃ無いわよね…… 分かったわ。 なんとか試

すしかないわね」

方針が決まった。                      ルイズは邪神を消し去る、オリジナルの最大呪文を詠唱する。

「契約に従い我に従え、始原の混沌。                      来たれ、この世全ての光と闇よ……」

(本当なら、最低でも四割はないと駄目な呪文だけど……)

呪文詠唱に気づいたのか、激しい熱線の嵐が降り注ぐ。                      それを紙一重が避けながら、詠唱は止めない。

「右に光、左に闇を、そして身体に生の充足……」

一度、デルフを鞘に戻し、半ばまで抉れた右の二の腕を無理矢理動かして、両手を合わせる。                      傷の再生に魔力を当てられないため、未だに出血は止まっていない。

「混ぜれ、混ぜれ、混ぜれ……」

残すところ最後の一小節となったところで邪神の尻尾が横風ぎに振るわれた。                      霞むような速度のそれをルイズは……



(・・・マズッ 術式凍結!!!)

「がっ・・・!!」

まともに受けてしまった。      べきべきと嫌な音がルイズの全身から鳴り響く。

「相棒ッ!!!」

デルフの叫び声が衝撃音に掻き消される・・・ 数キロに渡って吹き飛ばされ、灰色の砂丘に巨大なクレーターを残してやっ  
と止まる。

「かはっ・・・ゴホッ   ゴホッ   うっ」

なんとか立ち上がるが、大量の吐血をしてうつ伏せに倒れてしま  
う。

(これは・・・死ぬかも・・・ 自己再生に魔力まわさないと  
か言ってる場合じゃ・・・ないわね)

視界が暗くなっていく。

「あ・棒・！・・・おいつ！　し・・・りしろ！　ヤツ・・・来・・・おい  
！」

（そんなこと言ってもデルフ。　内臓ぐちゃぐちゃで、イカれちゃ  
ってるのよ・・・）

ガクガクと膝を震わせて、立ち上がる。　が・・・

「ぐぶ・・・がはっ」

ビチャビチャとおびただしい量の鮮血を再び吐血した。その時、  
容赦なく爆風が吹き荒れルイズは再び吹き飛ばされてしまう。　仰  
向けに転がる。

「ヨクモツタト誉メテオコウカ・・・」

邪神が口を開いた。　喋れたらしい。

「我二八世界ヲ滅ボスト言ウ使命ガアルノデナ・・・サラバダ」

口から溢れる燐光。　凄まじい・・・　今までの砲撃よりさ

らに凄まじい力の高まり。

「く……………」

毒づきながらも、ルイズは目を瞑らず、最期まで敵を睨み付ける。

光が…………放たれる直前…………

「ルイズさんはッ 殺らせませんッ!!!!」

狗音爆碎拳!!!!

いつの間にか接近していたシエスタが、獣化した状態での渾身の力で邪神の顎を叩き上げた。 どうかやらルイズに止めをさすのに気をとられて、邪神は気がつかなかったようだ。 口から放たれたブレスは空を切り裂くような衝撃と共に、彼方まで飛んで行った。

「グウ……………」

顎が少し閉じられ、口の中を損傷した邪神は仰け反る。　その隙にルイズに近寄るシエスタ。

「ルイズさん！」

「……バカ、逃げなさいシエスタ。　アンタじゃアイツに勝てない」

「なに言ってるんですか！　ルイズさんもボロボロじゃないですか！」

「私は……大丈夫よ。　まだいけるわ」

「……」

俯くシエスタ。　そして……

「ルイズさん、逃げて下さい。　私が……私が時間を稼ぎます」

「！　なに言ってるのよ……ッ!？」

シエスタが言うのと同時に、ルイズが影に沈んでいく。影による転移だ。

「ルイズさん。実は私、故郷の村で除け者にされていたんです。貴女と、貴女の仲間に出会ったとき本当に嬉しかったんですよ？ それまで本当の私を受け入れてくれる人はいなかったのよ」

「シエスタ・・・あなたなにを」

「お別れです。最期に、貴女の代わりにこの化け物を倒してきますよ」

「シエスタ、やめ・・・」

そこまで言ったところで、ルイズは影に沈みきった。後ろに振り返り、邪神を見上げるシエスタ。肌突き刺さるような痛みを錯覚させるほどの、凄まじいプレッシャーを感じながら微笑む。

「そう言う訳です。アナタを倒させてもらいますよ？」

「フン。馬鹿ガ」



無理やり魔力を流し、身体を再生させていく。

(残り一割・・・か)

「そんなこと考えてる場合じゃなかったわ！ シエスタがッ」

「相棒、あいつはもう」

「黙りなさい。私は仲間をみすみす殺させるようなことはしないわよ！ 逃げるなら全員一緒」

砂丘を駆け上がり、辺りを見回す。すると、丁度正面の方向、十キロ程先に凄まじい力を感じた。急いで飛行魔法で空に飛び上がり、全速力で向かう。

「生きててよね」

そう呟いた。

「はあはあ・・・はあ、はあ・・・ぐっ」

アバラが三本骨折、うち一本は内臓を傷つけている。左腕  
は二の腕から先がない。また、右腕の拳は複雑骨折。左足  
の太股の骨には罅。これがシエスタの五分間の戦闘で負った負  
傷だ。

「ナカナカシブトイナ」

「くっ」

内臓を傷つけているせいか、口の端から溢れる。それを手  
で拭い、構えをとる。

「ダガ、・・・コレで終わリダナ」

迫る巨大な爪。シエスタはバックステップで避けようとするが、罅の入った左足が思うように動かず、ギリギリのところまで袈裟懸けに深く挟られる。



「…………ッ！」

最早、言葉も発せず、吹き飛ばされ、砂丘に叩きつけられた。  
立ち上がれないシエスタ。      なにもせずともすぐに死にそうな  
傷だが…………

「ココマデモツタ褒美ダ。      我自ラガ止メヲサシテヤロウ」

腕を振り上げる邪神。      その時…………

「待ちなさい！」

空を飛んできたルイズが叫んだ。

「貴様力。      安心シロ、スグニ後ヲオワセテヤル」

腕が降り下ろされる。

「止めるおおおおおおおおおおおッ」

雷の暴風！！！！

止めるためにルイズは【雷の暴風】を放つが……無情にも【世界】という名の壁に防がれてしまった。ザクツと、肉を突き刺す音が聞こえた。

「ホラ、クレテヤルゾ」

爪に突き刺さったシエスタを腕を振ることで投げる。ルイズのいる真下に飛んできた。降り立つ。シエスタは既に事切れていた。手を見る。紅い血ガツイテイル。

「ああああ、アアああアアああああアああああアアアああああアあアあ」

意識がとぶ。それは一瞬だっただろうか？ 一生だったのだろうか？ 矛盾した思考が浮かびながらも、次に気づいた時には身体が意識していないにもかかわらず、魔族のものになっていた。

(……魔力が増える。五割ぐらいまで回復してる)

手を握ったり開いたりしながら、ルイズは思った。目の前

には、目を見開きながら微笑し、事切れているシエスタがいた。

(・・・夢じゃなかったのね)

目を閉じさせ、呟いた。

「ありがとうございます・・・シエスタ。・・・お休みなさい」

立ち上がり前を向く。律儀にも邪神は待っていてくれたようだ。これが絶対優位に立った者の余裕か。

(せいぜい手を抜けばいいわ)

「その間に・・・殺る!」

音を置き去りにルイズは飛び掛かる。デルフに手をかけ、抜き去る。そして、斬りかかり・・・【世界】の壁に止められた。

「・・・相棒」

「なに?」

「ずいぶんと永い時を生きてきたが、相棒と駆け巡った戦場はなかなか楽しかったぜ」

ビキビキとデルフに罅が入っていく。　ルイズが全力で投擲したときも、何故か刃こぼれ一つしなかったデルフがだ・・・

「そう。　私も楽しかったわよ」

「へへ、そうかい。　んじゃ、あばよ」

そんな気軽い言葉を残して、デルフは粉々に砕け散った。それと同時に【世界】の守りも切り裂かれた。

「ナニッ!？」

(シエスタとデルフが命を捨てて作ったチャンス。　必ず仕留める!)

「術式解凍」

詠唱途中だった呪文が解凍される。

邪神に守りは・・・

ない。焦った邪神は狙いも定めずに、かすっただけで跡形もなく消し飛びそうなブレスを乱射する。そのブレスが偶然ルイズに直進した。

(不味い！)

呪文詠唱に入る瞬間だったため、一瞬反応がおくれる。避けきれないとルイズが悟ったとき・・・

エクスキューショナー・ソード!!!!

脇から飛んできた斬撃が、ブレスに当たり、僅かに逸れた。

「間に合ったか。流石に出番がないかと思ったところだぞ」

「エヴァ、遅いッ!」

「バカ言つな。身体中風穴だらけにされたんだぞ？ これでも最短だった」

「やれやれ、早く倒してくださいよ。守りとやらが復活してしま

いますよ?」

「マック！・・・それもそうね」

いつの間にかマックが脇に浮いていた。 と言っても魔力不足はまだ治っていないようだ。

「自分より強い者の再生は、非常に魔力をくうんですよ。まさか第二形態があるとは・・・ 知っていればやらなかったものを・・・」

そんなことをマックは呟いた。

「幾百幾千と拡散し、崩れよ万物・・・・・・・・」

虚無の

（ゼロ・

灰色の魔力光が右腕から溢れだし、辺り一面をてらす。

衝撃！！！！

インパ

クト）

視界が灰色に染まる。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアAああAアアアああああア  
アアアA A A A AああああああアアアアアアA  
ああああアAアアアA A A Aああああああ  
ああああああああああああああアアアッ  
バカナッ ソンナバカナああああアアアアAああ  
ああアアああアアアAああああアアアAああああ  
アアアアAああアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

邪神は光の奔流に呑み込まれていった。

「……………終わった……………のかしら」

「おそろくわな」

「魔力は感じませんし。　消し飛んだのでは？」

そんなことを呟く三人。目の前には数キロに渡って消滅した大地が煙をあげている。その時、世界に亀裂が入り始めた。主が死んだからか……と考えたルイズ達だったが……

「ククク……ハハハ、ハハハハハ マダダ、我ノ形態八百八式マデアル」

黒い霧がルイズ達の目の前で人の形をとりはじめた。身構えたが……気づく。霧は崩壊と再生を繰り返し、徐々に小さくなっていた。

「フン、ツマランヤツラダ。マサカ、人間ニ我ガタオサレル事ニナロウトハ」

含み笑いをする邪神にルイズは問いかける。

「なんで笑ってるのかしら？」

「フフ、最期ノイヤガラセダ。オマエ達ヲ遙カニハナレタ異世界ノ彼方ニトバシテヤル」

「「なんですって（だって）！！！！」」



「おやおや」

ルイズとエヴァは驚き、マツクは苦笑する。

「我が消滅スルノガハヤマルガ、キサマラニヤラレタママダト癪ダ。  
イヤガル顔ヲ最期ニ拝メタコトダシ、ヨシトスルカ」

「なんですってー！」

ルイズが殴りかかるうとするが、足元に無駄に複雑な魔方陣が展開され、強制転移が発動された。それと同時に崩れ去る邪神。

「こんな・・・こんな展開ってあり？」

「あり得んな。これは夢じゃないか？ 起きればベットでしたと  
か・・・ないか・・・」

「まあ私たちなら大抵のところなら大丈夫でしょう。むしろ楽しみですね」

「  
「  
・  
・  
・  
・  
・  
」  
」

そして、視界が黒く染まった。

## エピソード

「………」何処よ？」

「知るか」

「さあ？ 確実に言えるのは、ハルケギニア以外の世界ってことですね」

気づくと、ルイズ達は見知らぬ城？ らしき場所にいた。

ちなみに言うと、先程から回りを兵士らしき人たちに囲まれ、機械的な剣やら槍を突き付けられている。

（まあ、最初は魔族の姿だったからしょうがないんだろうけど……）

転移してきて一番最初にルイズが気づいたことは、自分が人間の姿に戻っていないと言うことだった。　　どうやら魔族化が進み、人間より魔族の姿が普通の状態になってしまったみたいだ。　　そんなことをルイズが考えていると、兵士達が道をあけ、一人の男がやって来た。

「クラウドス・イングヴァルトだ。お前達、どういつつもりでここに転移してきたんだ？　ここはシュトウラの王宮だぞ！」

「え〜と、これはその〜……………」

続く……………かも知れないし、続かないかも知れない。

## エピソード（後書き）

一応はこれで終わりますが、続くかどうかは分かりません。  
新しく新規に創るかもしれないので、続きが気になる方は、気長  
に待っていて下さい。

ここまで読んで頂き、ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8112k/>

---

虚無の魔法使い

2010年10月9日23時16分発行